

石川県鳳至郡柳田村

# 上町和住下遺跡

県土幹線軸道路整備工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

石川県立埋蔵文化財センター



石川県鳳至郡柳田村

# 上町和住下遺跡

石川県立埋蔵文化財センター



## 例 言

1. 本書は、石川県鳳<sup>たげし</sup>至<sup>かんまち</sup>郡柳田村上<sup>かんまち</sup>町地内に所在する、上<sup>かんまち</sup>町和住<sup>おすみしよ</sup>下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県土幹線軸道路整備工事に係る緊急発掘調査であり、石川県土木部道路建設課（輪島土木事務所）の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 現地調査は、平成5、6年度の2箇年にわたり、平成5年7月1日～12月20日、平成6年4月21日～9月10日にかけて実施した。
4. 発掘調査は、平成5年度は小嶋芳孝（当センター調査専門員、現調査第二課長）、石井由美（現岩瀬由美、当センター主事）、立原秀明（同嘱託、現社団法人石川県埋蔵文化財保存協会調査員）が担当し、横山昌英（当センター調査補助員）の協力を得た。平成6年度は小嶋、石井、宮田明（同嘱託、現小松市埋蔵文化財調査室調査員）が担当し、横山の協力を得た。
5. 出土遺物の整理作業は、主に平成7年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行い、それ以外の遺物実測、トレースは宮田、横山が行った。
6. 現地調査、及び出土品整理にあたっては、次の各氏の指導、助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同）  
加藤三千雄、高田英樹、浜野伸雄、山田芳和、四柳嘉章、小林正史
7. 植物種子の同定は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、炭化種実の<sup>14</sup>C年代測定を山本直人氏（名古屋大学）に、人骨鑑定を山口敏氏に依頼し、玉稿を賜った。
8. 本書の編集は小嶋の指導の下、岩瀬が行い、執筆分担は目次に記した。
9. 本書挿図で用いた方位は座標北である。
10. 本調査の出土遺物、記録資料等は当センターが一括して保管している。

# 目 次

第1章 調査の経緯	(小嶋芳孝)	1
第2章 位置と環境	(岩瀬由美)	2
第1節 地理的環境		2
第2節 歴史的環境		2
第3章 調査の概要		5
第1節 調査区割り		5
第2節 層序		5
第3節 遺構の概要		7
第4章 縄文時代の遺構と遺物		11
第1節 遺構		11
(1) 竪穴住居址		11
(2) 土坑		13
(3) まとめ		18
第2節 遺物	(宮田 明)	21
(1) 遺物の概況		21
(2) 遺構出土の土器		21
(3) 包含層出土の土器		26
(4) 石器		27
(5) まとめと補足		33
(6) 土器群の編年的位置付け		33
(7) 石器組成について		38
(8) 打製石斧の刃部形態についての補足		39
(9) 石鏃についての概観		40
第5章 古代の遺構と遺物	(小嶋)	43
(1) 土器投棄遺構		43
(2) 4 E・5 E区出土の土器		46
(3) 5 G区出土の土器		46
(4) 5 D・6 E区出土の土器		48
(5) 7 D・E・F区出土の土器		48
(6) 古代の遺構		48
(7) 古代の和住下丘陵		48
(8) 上町和住下遺跡にみる、珠洲・柳田村周辺の古代土器		50

第6章 近世以降の遺構と遺物	(岩瀬)	56
第1節 遺構		56
(1) 土坑		56
(2) 炭窯跡		58
第2節 遺物		58
第3節 まとめ		62
第7章 自然科学的調査		63
第1節 上町和住下遺跡出土の炭化種実について	(吉川純子)	63
第2節 土坑出土炭化堅果類のAMS <sup>14</sup> C年代	(山本直人)	73
第3節 上町和住下遺跡出土の近世火葬人骨について	(山口 敏)	76
第8章 まとめ	(小嶋)	78

## 挿図目次

第1～6章	第14図	23
第1図	遺構出土土器実測図2	
道路工事図と調査対象範囲	(第3、4号竪穴住居址、土坑, S = 1 / 3)	
第2図	第15図	24
周辺の遺跡(S = 1 / 25,000)	遺構出土土器実測図3(土坑、ピット, S = 1 / 3)	
第3図	第16図	25
調査区割り図(S = 1 / 800)	包含層出土土器実測図(S = 1 / 3)	
第4図	第17図	28
基本土層図(S = 1 / 60)	打製石斧実測図(S = 1 / 3)	
第5図	第18図	29
地形図(S = 1 / 1,000)	打製石斧、磨製石斧、磨石類実測図	
第6図	(石斧は S = 1 / 3、磨石類は S = 1 / 4)	
全体図(S = 1 / 250)	第19図	30
第7図	石鏃、クサビ状剥片、剥片 a 実測図(S = 1 / 2)	
第2号竪穴住居址実測図(S = 1 / 60)	第20図	31
第8図	剥片 a、b 実測図(S = 1 / 2)	
第2号竪穴住居址区割り図(S = 1 / 80)	第21図	32
第9図	石製品実測図(S = 1 / 2)	
第2号竪穴住居址区別石材分布	第22図	34
第10図	各期の土器を出土した遺構の分布状況	
第3、4号竪穴住居址実測図(S = 1 / 60)	第23図	35
第11図	包含層出土土器の散布状況1	
縄文時代の土坑実測図1(S = 1 / 40)	第24図	36
第12図	包含層出土土器の散布状況2	
縄文時代の土坑実測図2(S = 1 / 40)	第25図	37
第13図	土器の胎土別構成比	
遺構出土土器実測図1	第26図	39
(第2号竪穴住居址, S = 1 / 3)	打製石斧と石鏃の計測値の散布図	

第27図	44	第34図	57
土器投棄遺構(2D区)		近世の土坑実測図(S=1/40)	
第28図	45	第35図	59
土器投棄遺構の下層(土器群除去後の地形)		第1号炭窯跡実測図(S=1/60)	
第29図	46	第36図	60
土器投棄遺構の土器出土位置		第2号炭窯跡実測図(S=1/60)	
第30図	47	第37図	61
古代土器を出土したグリッド		近世の遺物実測図	
第31図	49	(1はS=1/4, 2、3はS=1/3)	
古代の土坑実測図(S=1/40)		第7章	
第32図	52	第1節	
古代の遺物実測図1(S=1/3)		第1図	64
第33図	53	上町和住下遺跡炭化種実出土分布	
古代の遺物実測図2(S=1/3)			

## 表目次

第1～6章		第7章	
第1表	4	第1節	
遺跡地名表		第1表	67
第2表	41	上町和住下遺跡出土炭化種実一覧表(1)	
土器一覧表		第2表	68
第3表	42	上町和住下遺跡出土炭化種実一覧表(2)	
石器一覧表		第3表	69
第4表	54	上町和住下遺跡出土炭化種実一覧表(3)	
上町和住下遺跡出土古代土器観察表(1)		第4表	70
第5表	55	上町和住下遺跡出土炭化種実一覧表(4)	
上町和住下遺跡出土古代土器観察表(2)		第2節	
		第1表	73
		測定資料・測定結果一覧表	

## 図版目次

図版1		図版5	
上町和住下遺跡の位置		調査区東側完掘状態	
図版2		実測風景	
調査区俯瞰(西から)		図版6	
調査区俯瞰(東から)		第2号竪穴住居址検出状態(南から)	
図版3		同上層遺物出土状態(北から)	
調査前風景		図版7	
表土除去作業		第2号竪穴住居址作業風景	
図版4		同床面検出状態(西から)	
表土除去状態		図版8	
調査区西側完掘状態		第2号竪穴住居址遺物出土状態(北東から)	
		同フレイク群	
		同石鏃出土状態	

**図版 9**

第2号竪穴住居址中央部ピット（北から）  
同完掘状態（北から）

**図版10**

第3号竪穴住居址検出状態（北東から）  
同完掘状態（南東から）

**図版11**

第4号竪穴住居址検出状態（南西から）  
同作業風景

**図版12**

第4号竪穴住居址完掘状態（北西から）  
第17号土坑完掘状態（西から）

**図版13**

第28号土坑検出状態（東から）  
同出土炭化種実（北から）  
同完掘状態（東から）

**図版14**

第44号土坑遺物出土状態（東から）  
同（北西から）  
同完掘状態（北から）

**図版15**

第40号土坑遺物出土状態（南西から）  
第48～50号土坑完掘状態（北西から）

**図版16**

第62号土坑炭化種実出土状態（西から）  
同近撮

**図版17**

土器投棄遺構遺物出土状態（南から）  
同

**図版18**

土器投棄遺構遺物出土状態  
第114号ピット内黒土師器出土状態（南から）

**図版19**

近世土坑検出状態（東から）  
同完掘状態（東から）

**図版20**

第2号土坑完掘状態（東から）  
第46号ピット火葬骨出土状態

**図版21**

第1号炭窯跡完掘状態（西から）  
第2号炭窯跡完掘状態（南西から）

**図版22**

縄文時代の遺物 1

**図版23**

縄文時代の遺物 2

**図版24**

縄文時代の遺物 3

**図版25**

縄文時代の遺物 4

**図版26**

縄文時代の遺物 5

**図版27**

縄文時代の遺物 6

**図版28**

古代、近世の遺物

**第7章****第1節****図版 1**

上町和住下遺跡の炭化種実

**図版 2**

上町和住下遺跡の炭化種実

**第2節****写真 1**

28号土坑出土炭化堅果類の一部

**写真 2**

44号土坑出土炭化堅果類の一部

**写真 3**

62号土坑出土炭化堅果類の一部



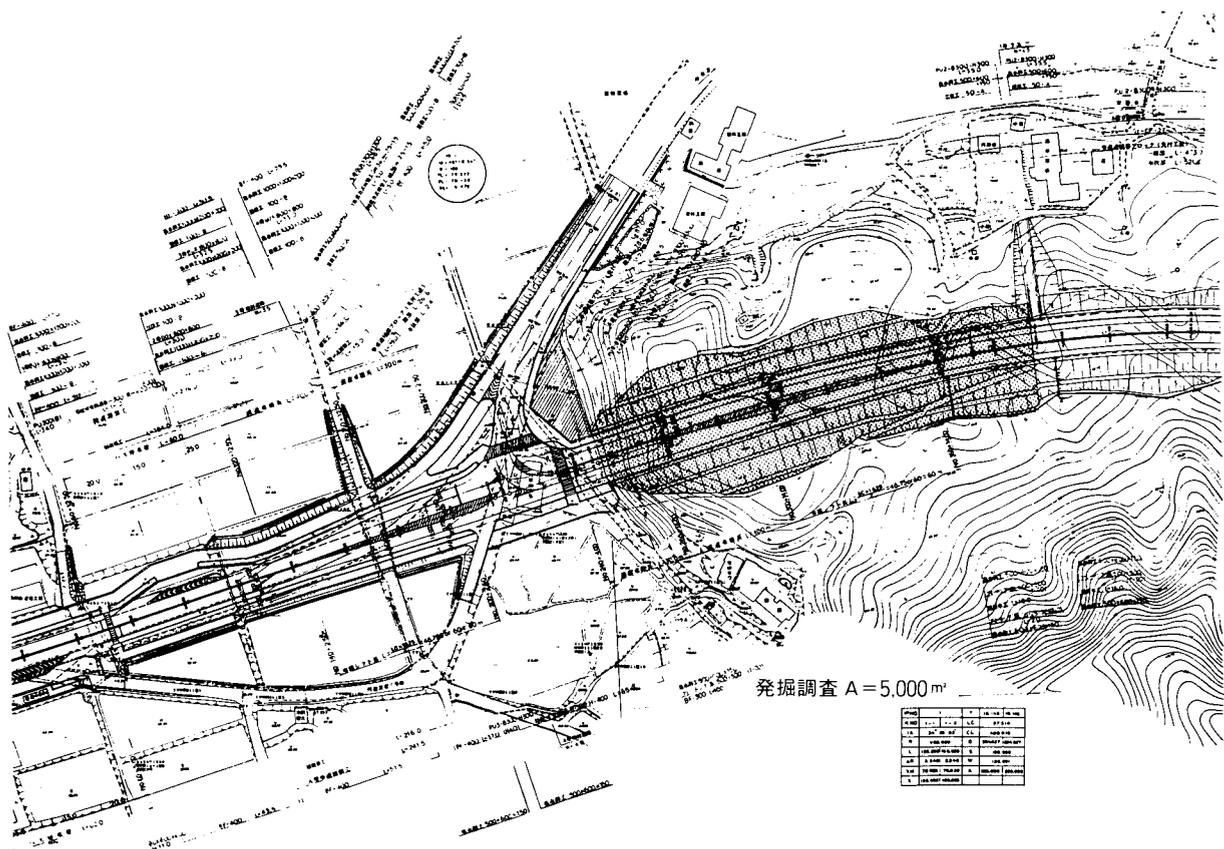
# 第1章 調査の経緯

本書は、県土幹線軸道路整備工事にかかる鳳至郡柳田村上町地内の上町和住下遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡を含む県土幹線軸道路整備工事にかかる埋蔵文化財分布調査は、1989（平成元）年1月23日と3月6日に実施している。この調査で上町和住下遺跡が新たに発見され、工事の前に発掘調査が必要なことを道路建設課長にあてて回答している。

その後、1993（平成5）年度に発掘調査を実施することになり、同年4月22日づけで道路建設課長からセンター所長あてに調査依頼が提出されている。本遺跡の調査は、1993年7月1日～12月20日にかけて第一次調査を行っている。この年度は、調査専門員小嶋芳孝・主事石井由美・嘱託立原秀明が調査を担当した。この年度の調査面積は約3,500m<sup>2</sup>で、費用は38,667,000円である。

1993年度の調査で下層に遺構が存在している可能性が明らかになり、1994年4月21日～9月10日にかけて第二次調査を行った。この年度は、調査専門員小嶋芳孝・主事石井由美・嘱託宮田明が調査を担当した。第二次調査の面積は約3,000m<sup>2</sup>で、費用は24,800,000円である。

調査の過程で縄文時代の竪穴住居跡の覆土を採集し、植物種子の水洗選別を行った。この作業で検出した種子の同定は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。また、名古屋大学の山本直人講師に、縄文時代の資料から<sup>14</sup>C測定サンプルを提供して年代測定をおこなった。1993年11月28日に現地説明会をおこなった。当日は、あいにく氷雨が降る寒い日となったが柳田村の人々を中心として、約50人の見学者を迎えた。土器・石器などの遺物整理は、1995年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。



第1図 道路工事図と調査対象範囲

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

上町和住下遺跡は、石川県鳳至郡柳田村に所在する。柳田村は能登半島先端付近に広がる中央丘陵に位置し、日本海に大きく突き出た能登半島にあって、唯一海岸線を持たない内陸の農山村である。村域は東西約16km、南北約8.5kmの長方形で、北及び西方は輪島市、東方は珠洲市に、そして南方は能都町に面している。約105km<sup>2</sup>の面積を有するが、その大半が標高100～300mの丘陵地帯であるため、村面積の75%が山林で占められ、農地はわずか10%にすぎない。北西部にそびえる鉢伏山（標高544m）に源を発する町野川が村中央部でその支流上町川と合流して北へ向かい、輪島市町野町を経て日本海へ注いでいる。この町野川水系に沿って農耕地が発達し、集落が分布している。それらが分布する標高30～100mの平坦地やその周辺では、ケヤキ林帯、コナラ・クリ林帯が、100～300mの丘陵ではコナラ、クリを中心とした落葉広葉樹の雑木林、植林された針葉樹林が広がっている。また、町野川水系は古来より人々の生活を潤すとともに、能登半島を横断し、内浦側から外浦へ抜けるルートとして、物資の流通にも不可欠な存在であった。そのため、川の合流部では物資の集積する所として古くからにぎわっていたことが想像される。

本遺跡が所在する柳田村上町は、上町川が大きく蛇行する村の南東部に位置する。遺跡は川の左岸に広がる丘陵の北端部西よりに突き出た舌状の尾根上に立地し、標高は現地表で82～83mを測る。また、丘陵裾西方には上町川に注ぐ小川が流れている。

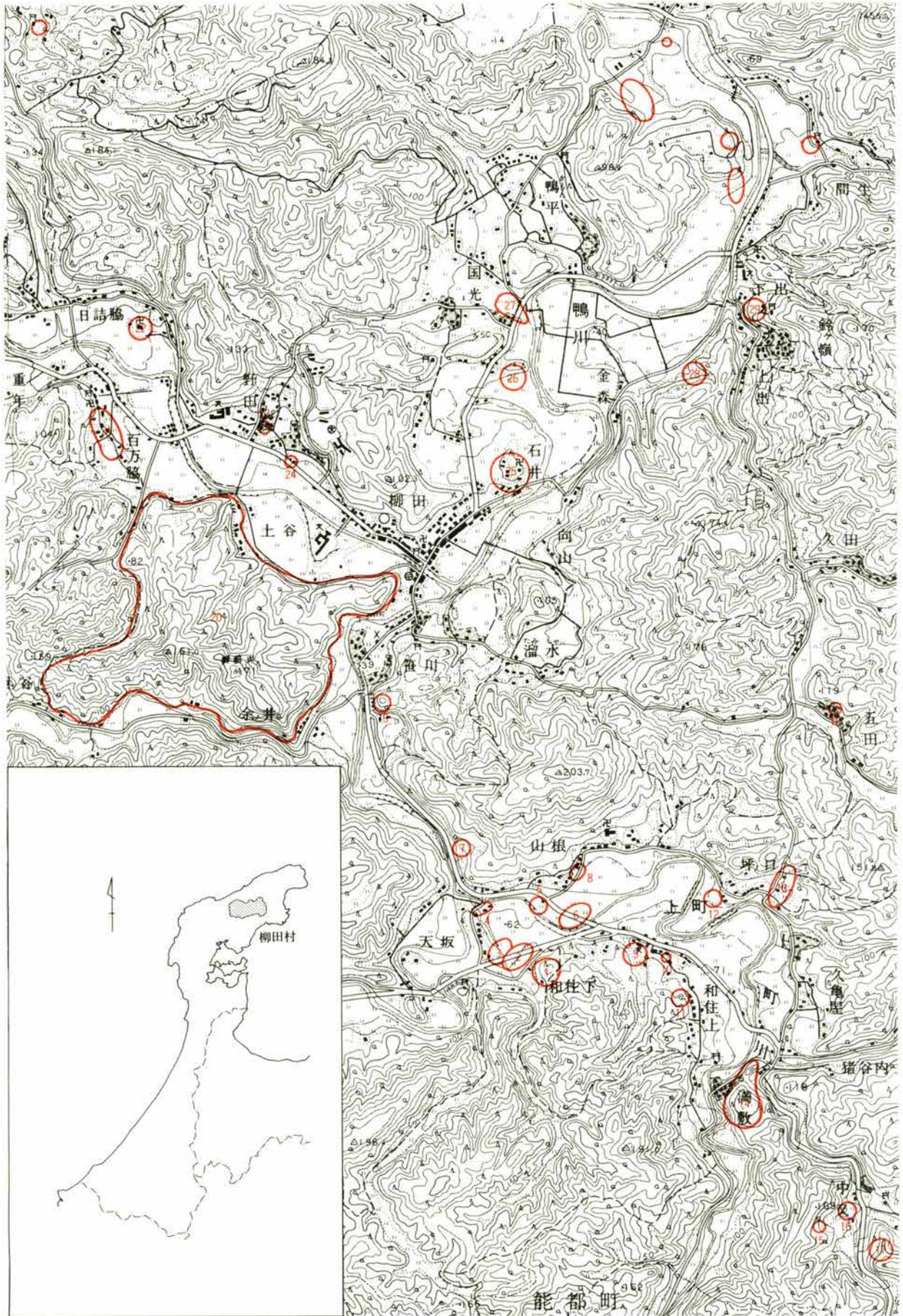
### 第2節 歴史的環境

現在、柳田村では79箇所の遺跡が確認されているが、そのうち縄文時代の遺跡が36ヶ所、中世の遺跡が35ヶ所を数え<sup>(1)</sup>、9割近くを占めている。弥生時代から古代にかけては、平安時代の遺跡が数ヶ所確認されるのみで非常に少ない。

縄文時代の遺跡では、中期の遺跡が非常に多い。該期の遺跡に限ったことではないが、町野川水系に沿って遺跡の分布が確認され、コナラ、クリなどの豊富な食資源を背景として、遅くともおよそ5000年前にはこの地に定住を開始したと推定される。村内では、本遺跡、当目兜地B遺跡、五十里A遺跡を除いては、殆ど調査が行われていないため詳細は知り得ないが、古くから各地で石棒、磨製石斧などの出土が知られていた。古い記録としては、かつての天坂村で「狐のまさかり」を拾ったとの記述があり、石斧のことであると理解されている<sup>(2)</sup>。また、同じく天坂において、全長78.8cmを測る大型の石棒が出土しており、現在は若宮陽石として若宮八幡石造祠堂に手厚く祀られている。本遺跡でも中期初頭とされる新保式期の遺物、中期前葉の新崎式期の集落を確認しており、その調査成果は当村の縄文時代中期の詳細を知る手掛かりとなろう。

続く弥生時代は、上町の上野茶谷内用下水遺跡で摩滅した坏の破片を確認しているのみである。当村は丘陵地帯であるため耕作地となり得る平地は少なく、そのことが初期農耕文化が広がる妨げとなったのかもしれない。これは「山という山なく、平野という平野なし」と形容される奥能登地方では一般的な状況である。こうした状態は、古墳時代にも引き続き、遺跡が再び増加し始めるのは平安時代になってからである。

養老二年（718）に設置された能登国には、宿駅がいくつか置かれるが、越蘇、穴水、三井、大市、待野、珠洲の六宿駅は大同三年（808）には廃止されている。その待野駅は、当村の町野川と上町川が合流する石井台地に配置されたとも推定されている。しかしながら、古代の遺跡については7遺跡を数えるものの、調



第2図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

第1表 遺跡地名表

No.	県遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	時代	No.	県遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	時代
1	40053	上町和住下遺跡	柳田村上町	集落跡	縄文・古代・近世	16	40060	中又中世墳墓	柳田村上町中又	墳墓	中世
2	40052	天坂柳田遺跡	柳田村天坂	散布地	縄文中期	17	40059	上町中又遺跡	柳田村上町中又	散布地	縄文
3	40051	上野茶谷内用水下遺跡	柳田村上町	散布地	縄文・弥生	18	40063	久田日枝神社遺跡	柳田村久田	散布地	縄文中期
4	40050	天坂横山安楽寺跡	柳田村天坂	寺跡	室町前期	19	40045	笹川経塚	柳田村笹川	経塚	室町
5	40049	天坂狭間遺跡	柳田村天坂	散布地	縄文中後期	20	40044	米山城跡	柳田村笹川	城跡	室町
6	40048	天坂錠ノ子遺跡	柳田村天坂	散布地	縄文中期	21	40041	柳田百万脇上野遺跡	柳田村柳田百万脇	散布地	縄文中期・平安・中世
7	40046	天坂潜り岩上野遺跡	柳田村天坂	散布地	縄文後期	22	40039	柳田法華寺遺跡	柳田村柳田	散布地	縄文
8	40047	天坂新平塚田墳墓	柳田村天坂	墳墓	平安～鎌倉	23	40042	野田青蓮寺遺跡	柳田村柳田野田	寺跡	中世
9	40054	和住山天平寺跡	柳田村上町和住	寺跡	室町	24	40043	柳田遺跡	柳田村柳田野田	散布地	古墳
10	40055	市姫塚中世墓	柳田村上町和住	墳墓	室町	25	40064	町野館跡	柳田村石井	館跡	室町
11	40056	和住カメガバラ中世墳墓	柳田村上町和住上	墳墓	鎌倉	26	40065	国光城跡	柳田村国光	城跡	室町
12	40061	上町経塚	柳田村上町	経塚	室町	27	40066	鴨川遺跡	柳田村鴨川	散布地	縄文
13	40062	上町萩萩台遺跡	柳田村上町	散布地	縄文中期	28	40067	鈴ヶ嶺石坊山遺跡	柳田村鈴ヶ嶺	寺跡	中世
14	40057	中山堡跡	柳田村上町	散布地	室町	29	40068	鈴ヶ嶺A遺跡	柳田村鈴ヶ嶺	散布地	縄文
15	40058	上町乙巻遺跡	柳田村上町乙巻	散布地	縄文						

査は過去に行われておらず、本遺跡で出土した平安時代の遺物は貴重な資料である。

中世には古代待野郷を継承したとみられる町野荘が柳田村を中心とした地域に置かれている。確認されている35ヶ所の中世遺跡は、その多くが珠洲焼の蔵骨器を有する中世墓であり、それに続くのが寺跡や城跡である。現時点では集落跡は確認されていないが、蔵骨器及び石塔を伴う中世墓は、集落背後の丘陵端に立地することが多い事実を考えると、それら中世墓に近接した平地や丘陵裾部分に集落が展開していたことが容易に想像できよう。中世の遺跡では、昭和37年に原田正彰氏が五十里洞穴中世墳墓を調査されており、岩壁に穿った窟に、火葬骨を納めた珠洲焼の蔵骨器を検出している。また、それらの実測作業を昭和60年に当センターが実施している<sup>(3)</sup>。14世紀頃のものとして推定されているこの墓は、その形態から、鎌倉で武士などが盛んに造ったやぐらとの類似が指摘されてもいる<sup>(4)</sup>。

それ以外には堡跡が2遺跡確認されている。そのうち、本遺跡と同じ上町に位置する中山堡は、平成9年度に当センターが県土幹線軸道路整備工事に伴い約500m<sup>2</sup>を対象として調査を行った。その結果、頂部に平坦面を、その東側に2条の堀、西側に1条の堀、2条の堅堀を検出した。堀の規模は、西側のそれぞれが上端幅で3.5～4mと約4.5m、深さが約1.3mと約2.1m、東側のそれは上端幅約5.5m、深さ約2.7mを測る。いずれも断面はU字に近いV字型である。調査での出土遺物は僅少であったが、戦国時代の小規模なとりで跡と判断されている<sup>(5)</sup>。

近世の遺跡は確認されていないが、当村では可耕域が限られるため、おそらく現在の集落が立地している場所は、近世、或いは中世からさほど変化していないと推定される。本遺跡周辺域でも、山裾に家屋が点在しており、その様子は近世の景観を彷彿とさせるものである。

註

- (1) 縄文時代と中世の複合遺跡もそれぞれに重複して数えている。
- (2) 原田正彰 『柳田村の集落誌』 石川県鳳至郡柳田村役場 1977。
- (3) 石川県立埋蔵文化財センター 『五十里A遺跡』 1988。
- (4) 戸潤幹夫 「中世墳墓窟の新例－能登島町日出ヶ島中世墳墓窟から－」 『石川県立歴史博物館紀要』 第3号 石川県立歴史博物館 1990。
- (5) 調査担当者松山和彦氏の御教示による。

参考文献

- 柳田村 『合鹿碗』 1993  
 石川県立埋蔵文化財センター 『当目兜地遺跡』 1980

## 第3章 調査の概要

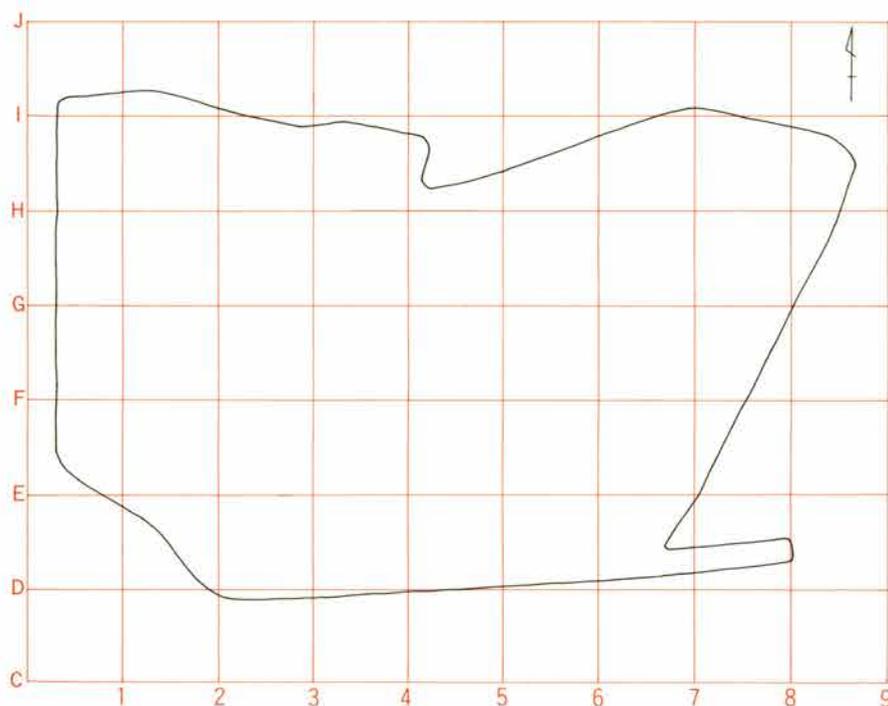
### 第1節 調査区割り (第3図)

杭打ちは業者に委託して行い、公共座標に則った10m間隔の杭を設置した。杭番号は南北方向を南から北へC～Jのアルファベットで、東西方向を西から東へ1～9のアラビア数字で表した。グリッド名は、そのグリッドの南東杭で表し、1C区から9I区まで存在する。

### 第2節 層 序 (第4図)

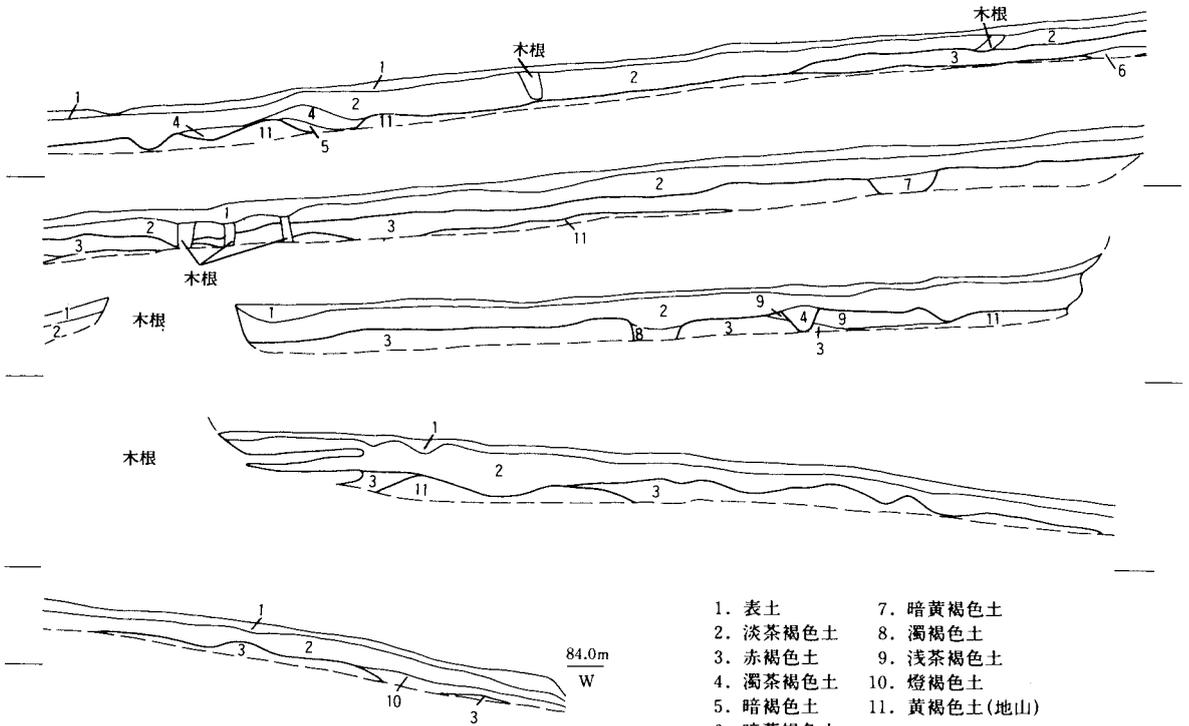
基本土層は調査区南側の壁面で観察した。第1層は現表土の腐食土であり、それ以外は基本的に粘土質の土層であった。第2層は縄文時代から古代の遺物を出す包含層である。第3層は赤褐色の締まった土で、第1次調査ではこの層を地山と認識して遺構検出を行った。この面からは数基の遺構が掘り込まれていることが確認されたが、層中に炭粒や遺物が含まれていることから、後に包含層であることが判明した。第2次調査では、その下層に広がる第11層黄褐色土まで掘り下げ、地山であることを確認し、この面で遺構検出を行っている。遺構覆土は古代のものが灰色系で締まりのない土質、縄文時代のものが褐色系で締まった粘土質である。なお、第3層上面で検出した遺構と、第11層上面で検出した遺構には時期差は認められなかった。

調査区の北端に3段の平坦面が存在し、トレンチ調査を行った。その結果、土層の観察から斜面を削平して造られた耕作地であることが明らかになり、旧地形は比較的急な斜面であったことが観察された。平坦面上からは近代以降の土器や、錆び付いた鎌の刃部が出土しており、その開墾が近代であることを示している。



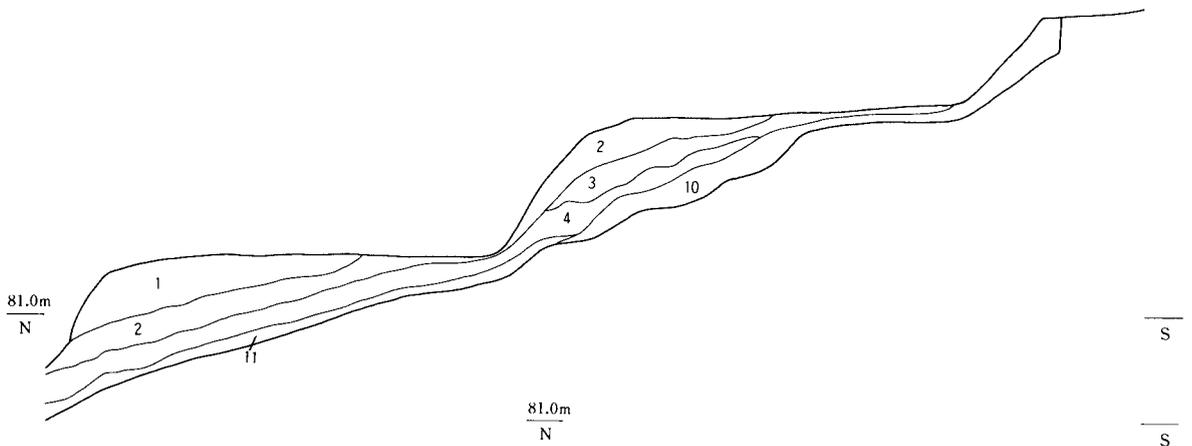
第3図 調査区割り図 (S = 1 / 800)

84.0m  
E



- |          |              |
|----------|--------------|
| 1. 表土    | 7. 暗黄褐色土     |
| 2. 淡茶褐色土 | 8. 濁褐色土      |
| 3. 赤褐色土  | 9. 浅茶褐色土     |
| 4. 濁茶褐色土 | 10. 燈褐色土     |
| 5. 暗褐色土  | 11. 黄褐色土(地山) |
| 6. 暗茶褐色土 |              |

調査区南壁



- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. 暗赤黄灰色土 | 7. 濁暗褐色土  |
| 2. 赤黄色土   | 8. 暗赤褐色土  |
| 3. 赤黄灰色土  | 9. 黑褐色土   |
| 4. 暗褐色土   | 10. 褐灰色土  |
| 5. 褐色土    | 11. 黄灰色土  |
| 6. 暗褐色土   | 12. 暗黄褐色土 |

北側平坦面



第4図 基本土層図 (S = 1 / 60)

### 第3節 遺構の概要（第5図）

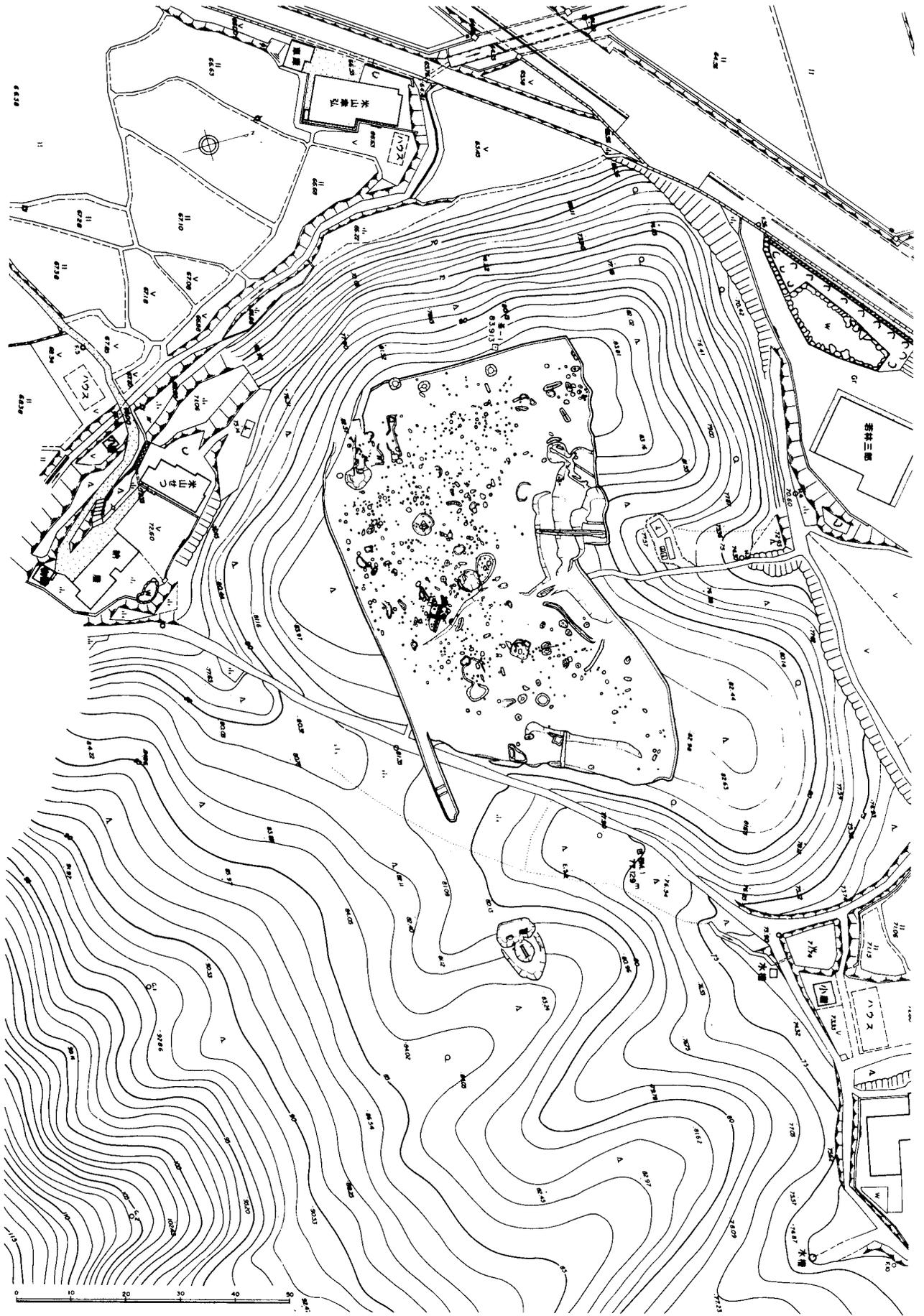
調査では、竪穴住居址3棟、土坑70基、ピット多数、炭窯跡2基が検出された。それらの時期は、縄文時代、古代、近世～近代の各時期にまとまりを持つ。

縄文時代の遺構は、竪穴住居址、土坑など調査区全体に展開するが、その中でも3～5のD～F区といった中央部分、つまり竪穴住居址の周辺に集中がみられた。土坑には、炭化した食用種実が入ったものが数基検出されており、当時の食生活が復元される。時期は中期前葉、後期中葉の2時期を主体とし、各時期の遺構分布域は若干異なる。

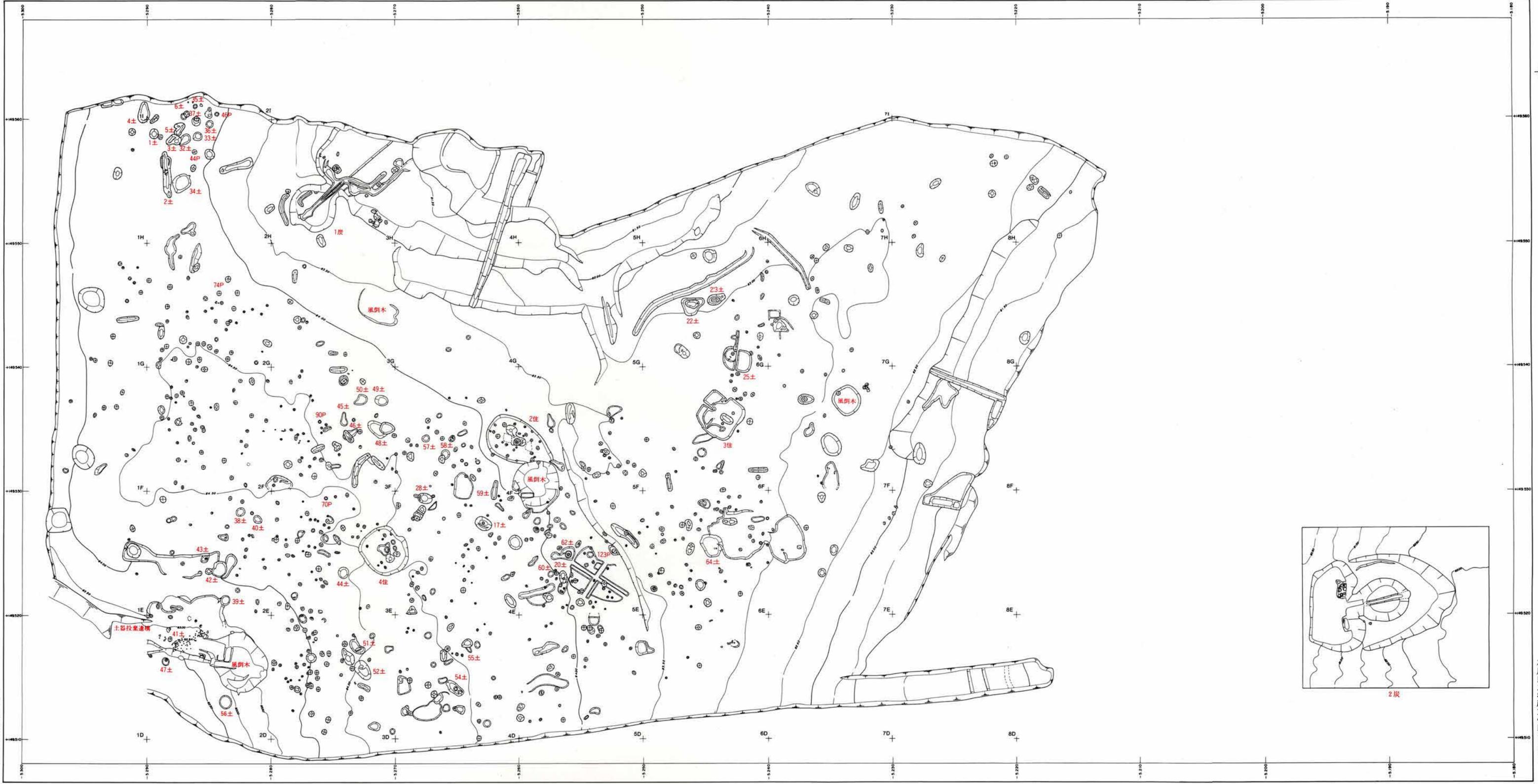
古代の遺構は調査区の南西部に集中している。大型の遺構はなく、ピットを中心とするが、掘立柱建物跡等は復元できなかった。また、2D区の斜面では焼土を伴った土器投棄遺構が検出された。土師器の供膳具、煮炊具とともに手づくねの燈明皿も出土していることから、何らかの行為の後の意図的な投棄と判断された。

近世の遺構は2H、I区のみに見られ、土坑、ピットを確認している。それらからは火葬骨や炭が出土しており、墓域と推定される。

近代に下るものとしては、炭窯跡が2基確認された。



第5図 地形図 (S = 1 / 1,000)



第6図 全体図 (S = 1 / 250)

第○号土坑→○土  
第○号ピット→○P  
第○号竪穴住居址→○住  
第○号炭窯→○炭

## 第4章 縄文時代の遺構と遺物

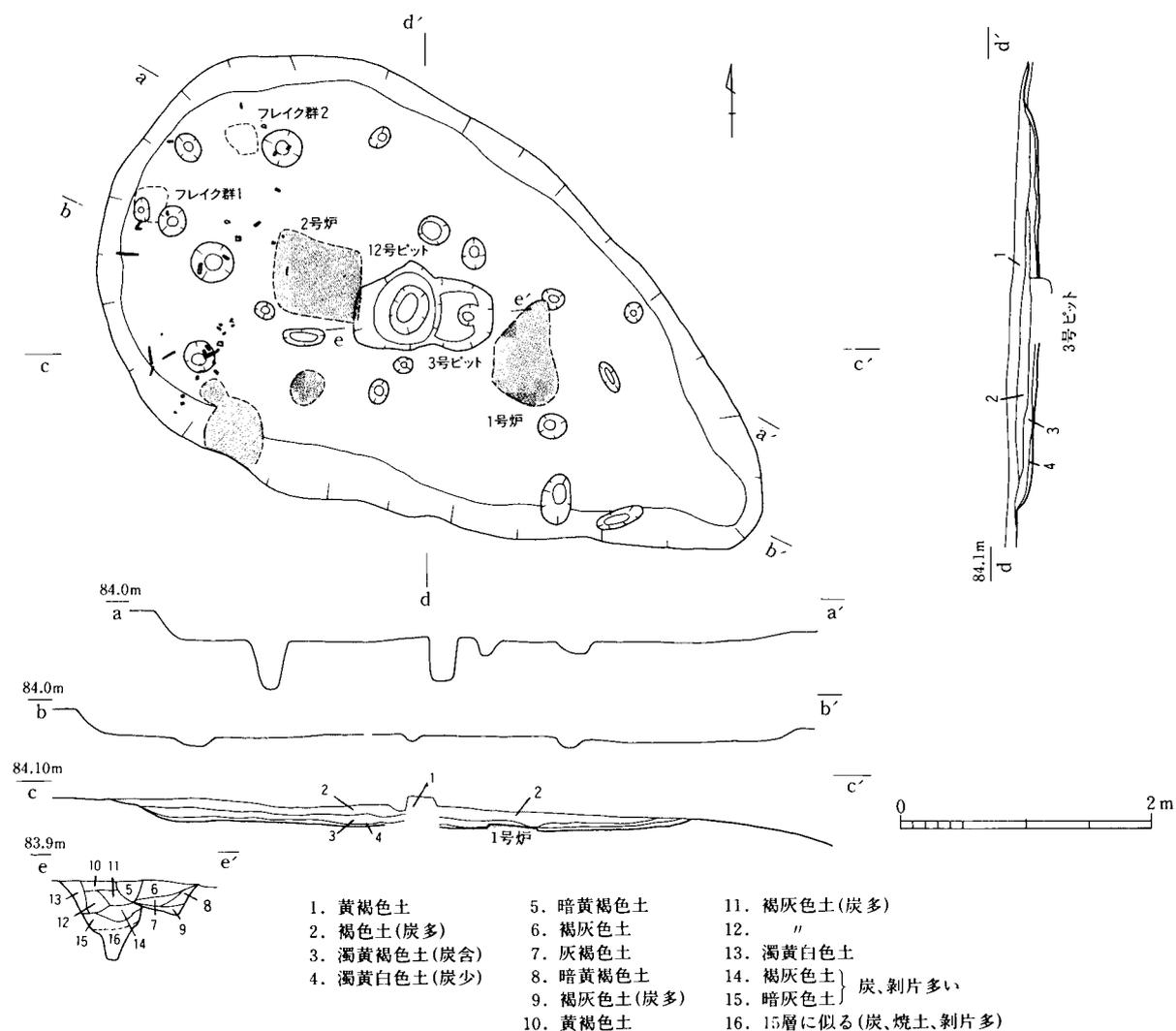
### 第1節 遺構

#### (1) 竪穴住居址

##### 第2号竪穴住居址 (第7~9図)

4 F、5 F区で検出した。本遺構の上面からは、多量の土器が出土しており、埋没する過程で土器捨て場とされたことが想像される。それらの土器を採り上げ、掘り下げた結果、土器、石器に混ざって炭化材と焼土が多く検出された。この炭化材、焼土は本住居址が火災に遭ったことを示しているが、それらが住居址の西半、特に南西部に集中して見られたことから、おそらくは半焼であったと推定している。

本住居址は長径約600cm、短径約340cmの楕円形を呈し、深さは20cm前後を測るが、南東部については、隣接する風倒木の攪乱を受けており、1mほど小さくなる可能性もある。主柱穴は、きれいには並ばないが、ほぼ線対称の6本と推定される。床面からは住居の主軸上に、地床炉と大型のピットが2基ずつ確認された。

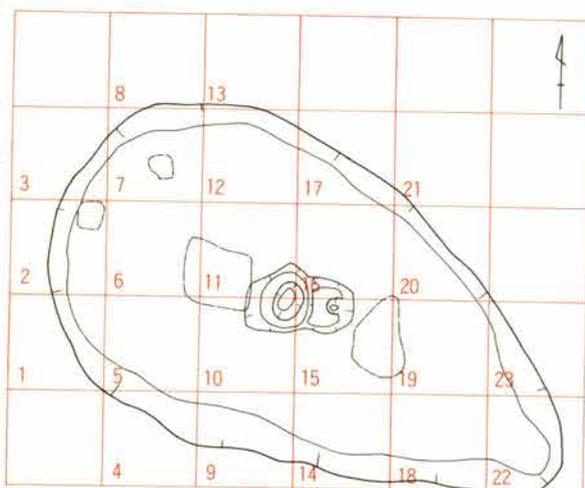


第7図 第2号竪穴住居址実測図 (S = 1/60)

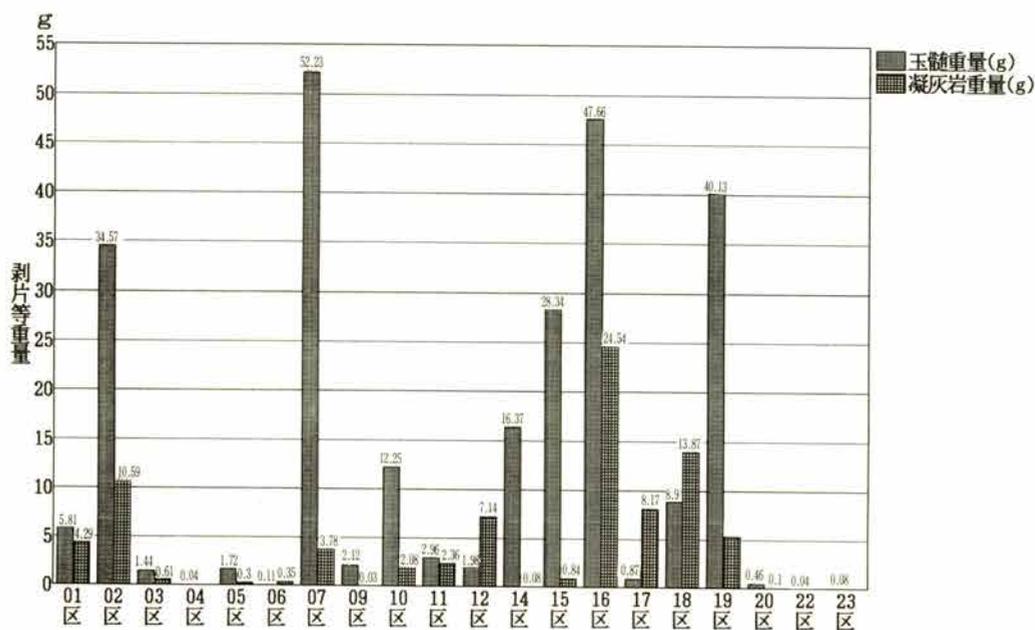
これらは造り替えの結果とみられ、第1号炉と住居内第12号ピットが、第2号炉と同第3号ピットがセットとなり、切り合い関係から前者が古いと判断された。

第1号炉は長径約90cm、短径約50cmの略楕円形を呈し、10cmの厚さで赤化が認められた。第2号炉は一辺70cm前後の略方形で、同じく10cmの厚さで赤化していた。ピットは、第12号が径130~140cmの略円形で、深さは65cmを測る。意図的に埋められた後、その上に一部重なって第2号炉が設けられていた。2段掘りとなっており、底近くには小ピットが穿たれていた。その小ピットからは第18図23の磨石が出土した。覆土の第11、14~16層には炭化物が含まれ、特に第15層では大きい塊が見られた。また、第14~16層中には剥片、碎片も多く含まれていた。第3号ピットは、径60cm弱の略円形で、深さは25cmと浅い。西側に小ピットが設けられるものの、深さ5cm程度と浅いため、明確な2段掘りとは言い難い。なお、第5層は別ピットである。

本住居址の特徴としては、石器の剥片、碎片の出土の多さが挙げられよう。床面近くまで掘り下げた際、非常に多くの剥片類が出土することに気づき、グリッドに沿った1mメッシュを組んだ上で、覆土を全てふるいに掛けて剥片類を採り上げた。結果、住居の北西部の壁際に特に顕著な出土が見られた。中でも第2、7区に、意図的に集めたものと判断される3cm以下の剥片の集積が確認され、フレイク群1、2として調査した。このことから、未製品の出土こそないものの、この場で石器の製作がなされたと判断される。これらの剥片類は、火災層よりも下層にあること、床面にもめり込んで出土していることなどから、住居として機能していた時期に石器製作が行われていたと推定している。第2、7区で出土した剥片は、第1号炉周辺で出土したものよりも概して大きく、大まかな加工を壁際で、細部の加工を炉の周辺で行った結果と理解している。



第8図 第2号竪穴住居址区割り図 (S = 1 / 80)



第9図 第2号竪穴住居址区別石材分布

住居址覆土出土の剥片類は第9図に示したように、総重量は619.69gを量り、その内訳は玉髓431.57g<sup>(1)</sup>、凝灰岩188.12gである。なお、これには調査時に番号を付して採りあげた5cm前後の大型の剥片は含まれていない。フレイク群1、2の剥片類は、玉髓と凝灰岩の合計がそれぞれ約100g、50gである。また、各ピットからも少量ずつ出土している。第3号ピットからは約15g、第12号ピットからは約100gという非常に多くの剥片類が出土し、それらには1～2cm大の比較的大きな剥片を定量含む。石材は玉髓と凝灰岩を主体とするが、約3gの黒曜石が含まれていた。黒曜石は、1、4～6、10、11、15～17区でそれぞれ数mgが確認され、中でも15、16区の破片点数が多いことから、第12号ピットわきで加工が行われたと推定できよう。ただし、その出土量は他の2種の石材に比して極めて少なく、その大きさも小さいことから、母岩を加工して石器を製作したと考えるよりも、破損した石器の再加工を行ったとみる方が妥当ではないかと考えている。

本住居址は、出土した土器の年代から新崎式3期には廃絶されたと判断される。

#### 第3号竪穴住居址（第10図）

最大幅320cmを測る不定形の竪穴住居址である。深さは10～20cmと浅い。当初、広い範囲で焼土を検出し、それらを掘り下げた結果、南西部に一際焼けた焼土を確認した。それを炉址と認識し、本遺構を住居址と判断したが、該期の住居址では主軸上に炉を設けるのが通例であり、住居址ではない可能性もある。ピットは2基しか検出されておらず、支柱穴は2本と推定される。柱穴の中間に長円形の浅い掘り込みを確認したが、その性格は明らかでない。

時期は、出土遺物から新崎式1、2期の居住が考えられる。

#### 第4号竪穴住居址（第10図）

径350～380cmを測る隅丸形状の竪穴住居址であり、深さは検出面から20～30cmを測る。支柱穴は4本とみられ、住居址のほぼ中央に地床炉が検出された。地床炉は、第2、3号竪穴住居址に比するとあまり強くは焼けていないが、長径53cm、短径35cmの楕円形の範囲で赤化が見られた。炉に近接する中央ピット（住居内第1号ピット）は、径65cm前後の略円形を呈し、2段掘りとする。深さは30cm強を測り、第10、12～14層には炭化物が見られた。隣接する第2号ピットは、径が約40cmとやや小さいが、深さは31cmと同規模である。調査時には同一の機能を有したピットとして認識していたが、地床炉に伴う中央のピットは、炉とともに主軸上に設置されるのが通有であることを考えると、別の機能を有していた可能性の方が高いかもしれない。

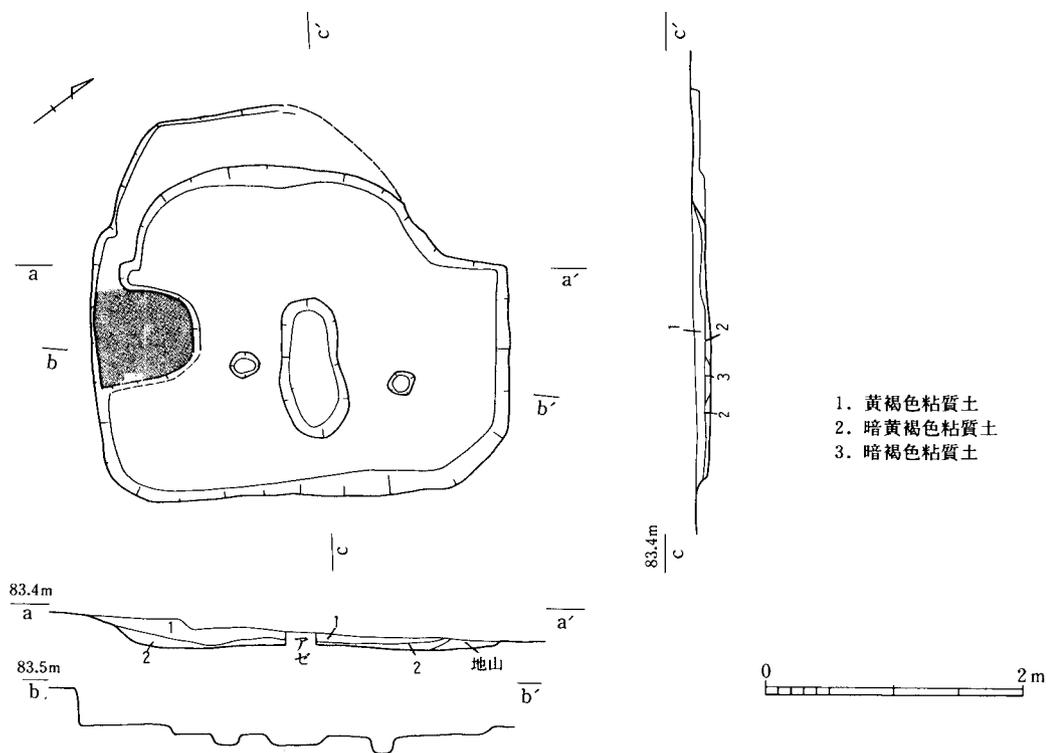
本住居址からは土器、石器などが少量出土したのみであるが、床面から出土した土器の年代から、新崎式1～3期の間に機能していたと推定される。

## (2) 土坑

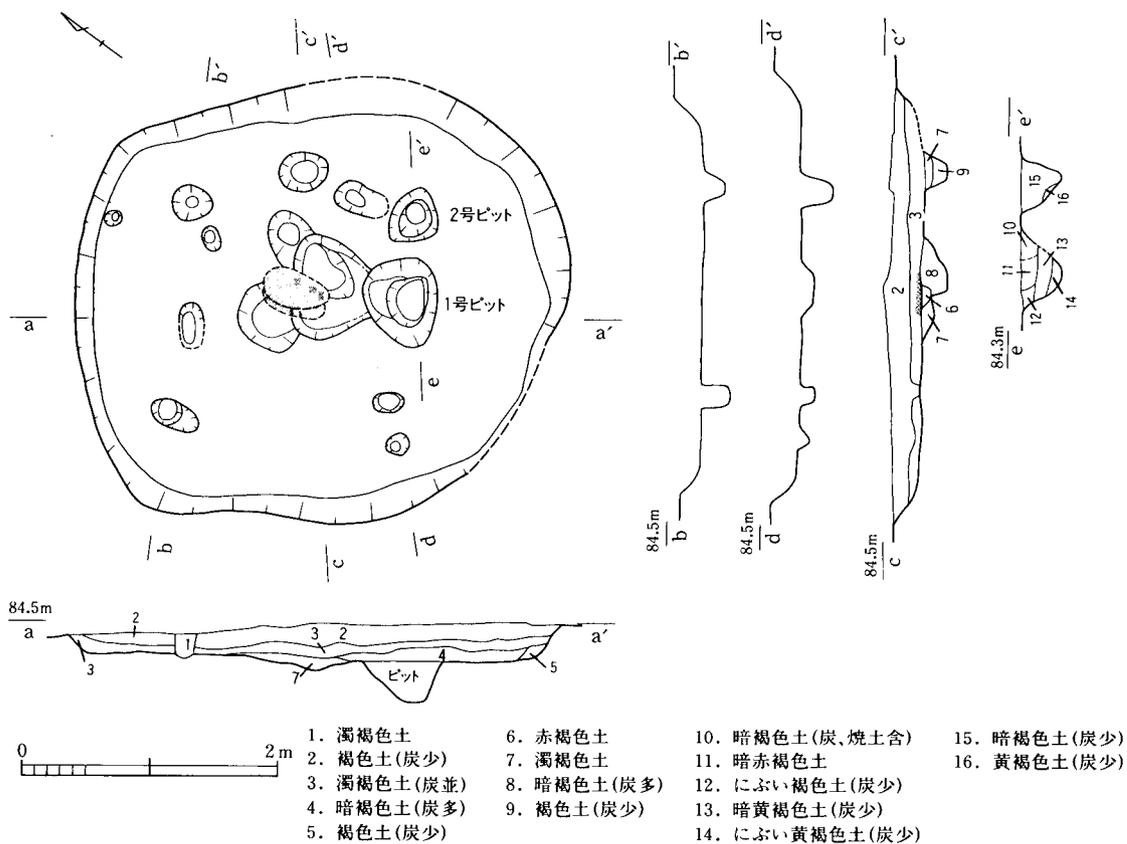
#### 第17号土坑（第11図）

4 E区で検出した。平面形は長軸136cm、短軸90cmの楕円形を呈し、深さは94cmを測る。更に底部中央付近より、径20cm、深さ40cmのピットを掘り込む。覆土は、上層が炭化物を含む暗茶褐色土であった。本土坑は、1m近い深さがあること、底部に杭を差し込んだとみられるピットが存在すること等から、動物を捕獲するための陥とし穴ではないかと推定される。

なお、図示していないが、本土坑の上半西方部に、新しいピットが切り込まれており、第14図24と、第17図2が出土した。打製石斧は、半分に折れていたものを接合したのだが、あるいは意図的な埋納であったのかもしれない。土器の年代が新崎式期と見られることから、本土坑はそれ以前のものだと判断したい。

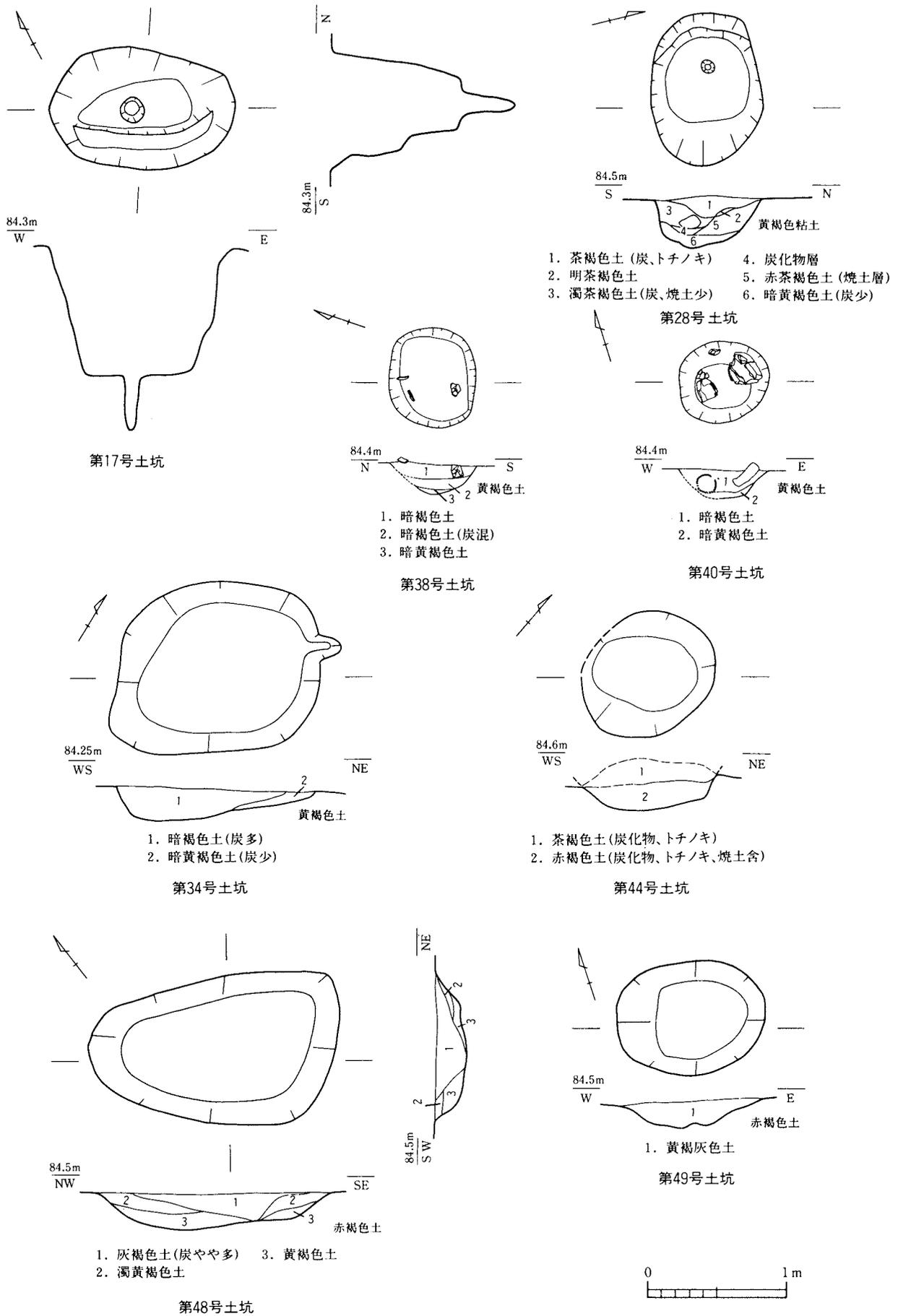


第3号竖穴住居址



第4号竖穴住居址

第10図 第3、4号竖穴住居址実測図 (S = 1 / 60)



第11図 縄文時代の土坑実測図1 (S = 1 / 40)

#### 第28号土坑（第11図）

4 E区で検出した。長軸110cm、短軸80cmの長円形を呈し、深さは40cm弱を測る。本土坑の覆土には焼土、炭化物が多く含まれ、それらに混ざって土器も多く出土した。壁面及び底面には被熱した痕跡が確認されなかったため、別の場所で焼かれたものを本土坑中に入れたものと推定している。第1層中からはトチノキを始めとした炭化種実が多量に出土している。また、少量の剥片類も確認した。

本土坑は出土遺物の年代から、後期中葉の遺構と判断される。また、トチノキについて<sup>14</sup>C年代測定を行ったところ約3,000年前のものという結果が出ている（第7章第2節参照）。

#### 第34号土坑（第11図）

2 H区で検出した。長辺140cm、短辺120cmの隅丸形状を呈し、深さは約20cmを測る。覆土中には炭化物が多く見られた。

#### 第38号土坑（第11図）

2 E区で検出した。径70cm前後の略円形を呈し、深さは約25cmを測る。第2層には焼土、炭化物が多く見られた。

#### 第40号土坑（第11図）

2 E区で検出した。径60cm前後の略円形を呈し、深さは21cmを測る。覆土には全体に炭化物と焼土が見られた。第1層からはほぼ完形の深鉢や、強く被熱した石が出土した。また、炭化したオニグルミなども出土している。

本土坑は出土遺物や覆土の類似から、第38号土坑と同時期に営まれた遺構と理解される。

#### 第44号土坑（第11図）

3 E区で検出した。径90cmの略円形を呈し、深さは検出面から20cmを測る。上面を木根で覆われていたため、検出が遅れたが、本来は40cm程度の深さがあったものと推定される。覆土には、炭化物、焼土が多く含まれ、炭化したトチノキの種実も多量に出土した。また、それらとともに土器片や1cm以下の剥片類も多く出土している。これは第28号土坑と共通するものであり、出土した土器も同一型式の製品であることから、同時期に同一目的で営まれた遺構と理解される。<sup>14</sup>C年代測定でも約3,000年前という同様の結果が得られている。

#### 第48～50号土坑（第11、12図）

いずれも3 F区で検出した。第48号土坑は長軸180cm、短軸110cm、深さ26cmを測る。第1層には炭化物がやや多く含まれていた。第49号土坑は径90cm前後の略円形を呈し、深さは約20cmを測る。覆土は黄褐灰色土の単層である。第50号土坑は長軸110cm、短軸70cmの不定形で、深さは14cmを測る。覆土は黄褐灰色土の単層である。

これらの土坑は、図示しなかった第45、46号土坑とともに円形に配置されており、関連した遺構と理解される。時期は後期中葉とみられる。

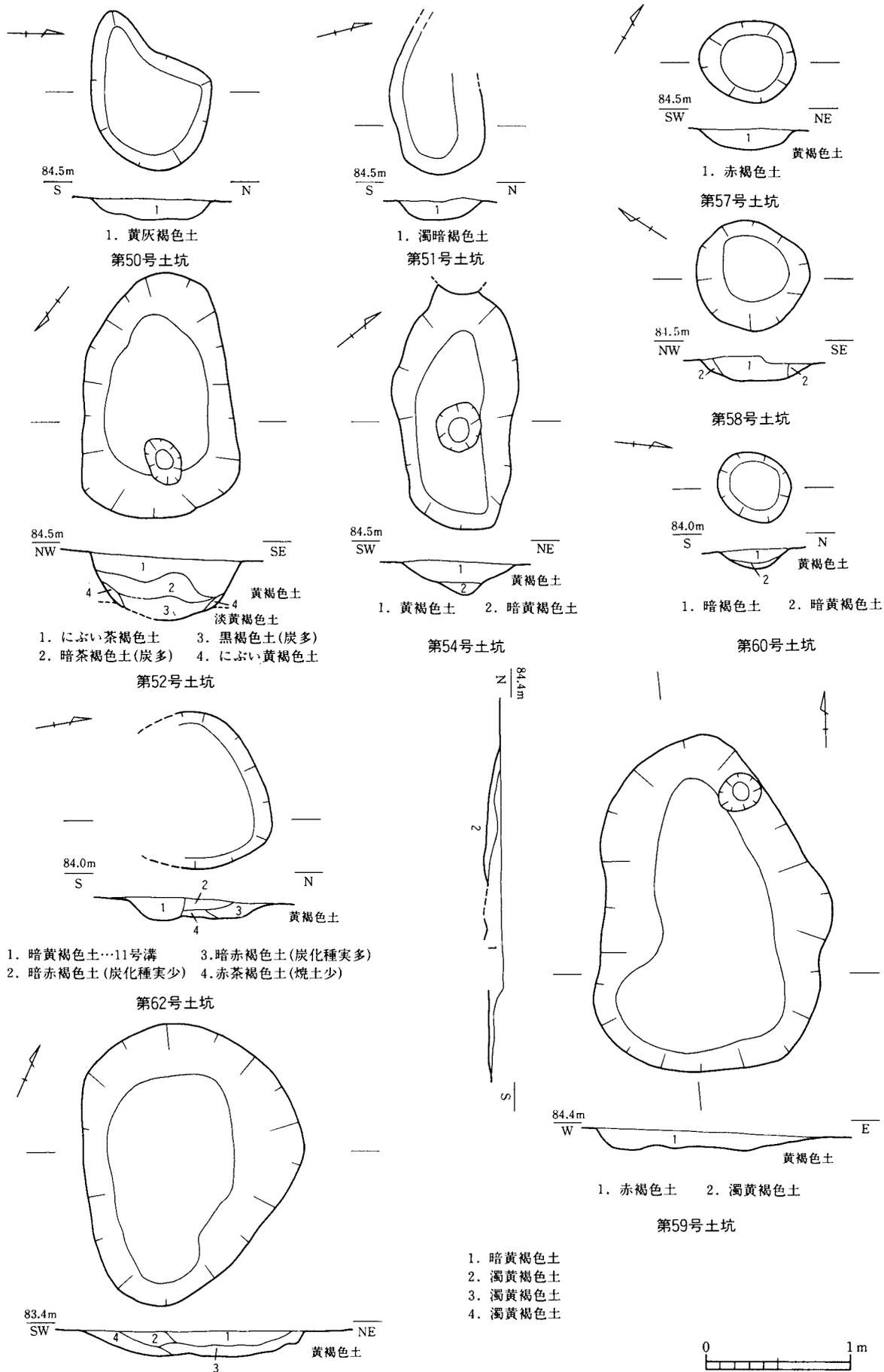
#### 第51号土坑（第12図）

3 D区で検出した。平面形態ははっきりしない。濁暗褐色土の単層である。

#### 第52号土坑（第12図）

3 D区で検出した。長軸170cm、短軸105cm、深さ45cmを測る比較的大型の土坑である。第2、3層には炭化物が多く見られた。その中には、トチノキやオニグルミなども含む。遺物もやや多く出土した。

出土遺物から、中期前葉の遺構と理解される。



第12図 縄文時代の土坑実測図2 (S = 1 / 40)

第54号土坑（第12図）

4 D区で検出した。長軸170cm、短軸80cmの長円形を呈し、深さは22cmを測る。

第57号土坑（第12図）

4 F区で検出した。径60cm前後の円形で、深さ7cmの浅い土坑である。赤褐色土の単層であり、炭化物がやや多く見られた。

第58号土坑（第12図）

4 F区で検出した。径80cmの円形で、深さは16cmを測る。第1層には炭化物、焼土が多く見られた。

第59号土坑（第12図）

4 E、F区境で検出した。長軸235cm、短軸160cm、深さは最深部で15cmを測る。第1層は火を受けた痕跡が見られた。

第60号土坑（第12図）

5 E区で検出した。径50cm弱の円形を呈し、深さは14cmを測る。中期初頭の遺物が出土している。

第62号土坑（第12図）

5 E区で検出した。溝状遺構に切られているが、径110cm程度の円形と推定される。深さは15cmを測る。第2～4層は被熱したと推定される赤褐色系の覆土であり、第2、3層からは炭化したコナラ属、トチノキが多く出土した。この<sup>14</sup>C年代測定では、4660±120年BPの年代が得られている。なお、土坑壁面に被熱の痕跡は見られなかった。

第64号土坑（第12図）

6 E区で検出した。長軸200cm、短軸150cm、深さ18cmを測る。出土遺物から中期前葉の遺構と理解される。

### (3) まとめ

本遺跡では遺物は縄文時代中期初頭に位置付けられるものが確認されているが、住居址が確認されるのはやや遅れて中期前葉になってからである。初頭に属する可能性が考えられる遺構には、陥とし穴と推定した第17号土坑と第60号土坑、第123号ピットが挙げられるのみである。

第17号土坑は、切り合い関係にあるピットから出土したただ1点の土器から時期を推定しているため、判断材料には乏しいが、県内で検出されている陥とし穴と推定される土坑は、前期から中期にかけてのものが殆どであることを鑑みるとそれに反しない。また、これまでに土坑と集落が接して検出された例はないことなどを考えると、竪穴住居址と土坑が同時期に存在したとは考え難く、集落が営まれた中期前葉であるとは考えにくい。中期前葉といってもその時間幅は長いので可能性がまるで否定される訳ではないが、中期前葉の遺物が豊富に出土するのに対して、初頭のもものが散見される程度であるという事実は、生活の主な場であったか否かの表れであると言える。

羽咋市柳田シャコデ遺跡<sup>2)</sup>や、押水町冬野遺跡群<sup>3)</sup>など陥とし穴とみられる数十基の土坑群が検出された過去の調査例では、遺物の出土が希薄であるとの結果が得られていることから、中期初頭には狩猟の場であった可能性を考えたい。このような陥とし穴とされる土坑は、県内の調査例では単独で存在するものはなく、数基から数十基の群として確認されている。それらが陥とし穴であるならば、捕獲効率からして至極当然であり、おそらくは本遺跡の場合も群として存在した中の1基であろうことが想像されよう。

中期前葉は全出土遺物のうち遺物量が最も多い。該期に属するとみられる遺構は3棟の竪穴住居址の他、

第52、58、59、64号土坑、図示はしていないが第25、55号土坑などが考えられる。また、土器は出土していないものの、炭化種実の<sup>14</sup>C年代測定から第62号土坑もその可能性が指摘される。遺跡の立地する尾根は、周囲を比較的急な斜面に囲まれており、本調査区がその平坦面部分をほぼ包括していることから、集落域がこれ以上に広がるとは考え難く、2、3棟程度の住居が営まれる小規模な集落であったと理解している。このことは、検出された竪穴住居址が大きいもので第2号竪穴住居址の長径600cm、他の2棟が400cmを下回る規模であり、それほど多くの住人が居住していたとは考えにくいことから示唆されよう。地域は異なるが、同時期の辰口町庄が屋敷A遺跡での平均値は長径600cm前後で、その周辺遺跡の中期前葉から中葉にかけての竪穴住居址は800cmを越えるものが主体を成す<sup>(4)</sup>ことからしても、本遺跡の住居址は小型であると言えよう。

竪穴住居址内部から検出された中央付近のピットは、県下でも中期の竪穴住居址での確認例は多い。一般的に食糧の貯蔵穴とされるこのピットであるが、水の貯蔵施設であるとの説<sup>(5)</sup>や、祭祀に関わるとの説<sup>(6)</sup>なども出されている。多くの例が2段掘りとなることから、食糧を貯蔵してその上に蓋をしたと理解されているが、本遺跡で検出した第2号竪穴住居址第12号ピットは、庄が屋敷遺跡群などで検出されたそれに比して段が下方に設けられており、その下の小ピットは上幅径約30cm、深さ約20cmと狭く、食料や液体を貯蔵したとはやや考え難い。この小ピットの覆土やその上層からは炭とともに多量の剥片類が出土しており、中には破損した石鏃も含まれることから、石器加工に関連した施設であった可能性も指摘したい。しかしながら、第4号竪穴住居址で検出されたピットは、石器製作とは何ら関係なく、その使用目的が一様でないことを示している。

後期中葉に帰属する遺構は、住居址こそないものの、土坑やピットを中期前葉と同数程度検出した。尾根上の可住域はほぼ調査区に含まれるため、おそらく住居は存在していたとみられるが、検出できなかっただけと考えられる。該期の遺構で、坑内から多量の焼土、炭化種実と土器、剥片類などを検出した第28、44号土坑は特筆されよう。両土坑からは、明確な使用痕が観察されなかったため図化はしていないが、共通して幅4cm前後、長さ10cm弱の長円形の河原石が1点ずつ出土してもいる。

土坑からは食糧であるトチノキの種実が出土したが、貯蔵穴とは考えていない。その理由としては、第一にその立地が丘陵上であることが挙げられる。両土坑から出土した種実はその殆どがトチノキの種実であり、これは地下の湧水や河川の流水が望める低湿地に土坑を設けて貯蔵されるのが通例である。県内でも押水町紺屋町ダイラクボウ遺跡で後期末～晩期のドングリ類、トチノキの種実の貯蔵穴を21基<sup>(7)</sup>、田鶴浜町三引C・D遺跡で中期、及び後・晩期のドングリ類、トチノキの種実の貯蔵穴を数十基検出するなどしているが<sup>(8)</sup>、いずれも地下水のわき出る低湿な地域に設けられている。第二に種実が完全に燃えて炭化した状態であることが挙げられる。あぶってそのまま食することがあったとしても、黒焦げになっては食用には適さないであろう。第三に土器片や剥片類が多く共伴することである。紺屋町ダイラクボウ遺跡も三引C・D遺跡も土坑中からは種実以外の遺物出土は非常に少ない。それは、堅果類が直接或いはそれに近い形で坑内に貯蔵されること、そして、貯蔵穴が集落とは距離を置いた水捌けの悪い低湿地に設けられることから、土坑の性格上当然とも言える。

以上のことを踏まえ、第28、44号土坑の性格を考えるとすると、可能性としてはまずごみ穴である見解を提示したい。何らかの理由で炭化してしまった種実を不要な土器、石器等と共に廃棄したのではないか。今一つの可能性としては、祭祀的な行為に基づくものとの見解である。いずれからも出土した長円形の河原石がやや気になっている。しかしながら、覆土から剥片類が出土していることや、土器片が完形に復元されな

いこと等を勘案すると、前者の見解が正しいのかもしれない。

なお、中期前葉に位置付けられた第62号土坑については、土器、石器は共伴せず、坑底に密集して炭化種実が出土しており、意図的な埋置状態と認識している。

註

- (1) 計量時に気付かなかったため、この数値には黒曜石約1g分が含まれている。
- (2) 石川県立埋蔵文化財センター 『柳田シャコデ遺跡』 1984。
- (3) 石川県立埋蔵文化財センター 『押水町冬野遺跡群』 1991。
- (4) 石川県立埋蔵文化財センター 『能美丘陵東遺跡群』 1997。
- (5) 註(4)に同じ。
- (6) 古川知明 「ロート状ピットを伴う縄文中期竪穴住居跡についてー北陸型特殊ピットの検討ー」『考古学と遺跡の保護』甘粕 健先生退官記念論集刊行会 1996。
- (7) 石川県立埋蔵文化財センター 『紺屋町ダイラクボウ遺跡』 1994。
- (8) 平成6～9年度の調査で縄文時代中期～晩期の貯蔵穴が約100基検出されている。

## 第2節 遺物

### (1) 遺物の概況

本遺跡からは、中期初頭・中期前葉・後期中葉の遺物が出土した。遺物の散布状況は全般に散漫であるが、第2号住居址に集中することが特筆される。時期の特定可能な土器が認められた遺構について、その分布状況をみると、三棟の竪穴住居址とその周辺の土坑・ピットなど、中期前葉の土器が出土した遺構は、ほぼ遺跡の中央部を東西にのびる尾根に沿って分布するのに対し、後期中葉の土器が出土した遺構は、遺跡の西側を南北にのびる尾根に占地する（第22図）。中期初頭の土器は、出土量が乏しく、遺構出土の土器も二例のみであることから、本遺跡の主体を中期前葉と後期中葉の二時期に求め、生活拠点ないし活動拠点として機能したものと考え、それぞれ1期・2期とする。中期初頭段階は、本遺跡における活動の痕跡が不明瞭であることから、0期とする。

### (2) 遺構出土の土器（第13図～第15図）

#### 第2号住居址出土の土器（第13図）

##### 0期（1）

深鉢の口縁部であり、内屈する口縁部に細い半隆起線で装飾する。

##### 1期（2～17）

2は深鉢の口縁部であり、端部内側を篋状の工具でなぞっている。緩く外反する口縁部に刻印蓮華紋を施す。3～10は基隆帯を貼付する一群であり、隆帯上半截竹管で刻むもの（3～5）・篋状の工具で綾杉状に刻むもの（6・7）の二者が認められる。図上復元した3により全形を推測することができる。口縁部は内屈し、玉抱き三叉文を刻み込む低い突起を単位とする。文様帯は口縁部と胴部の二帯に区切り、口縁部文様帯は基隆帯と半隆起線による曲線的な意匠で装飾し、胴部文様帯は半隆起線によるパネル状の区画をし、区画内を格子目を充填したり、縁を刻み目を入れたりする。口縁部資料では、口唇部は内傾して面を取り内側にせりだす傾向がある。

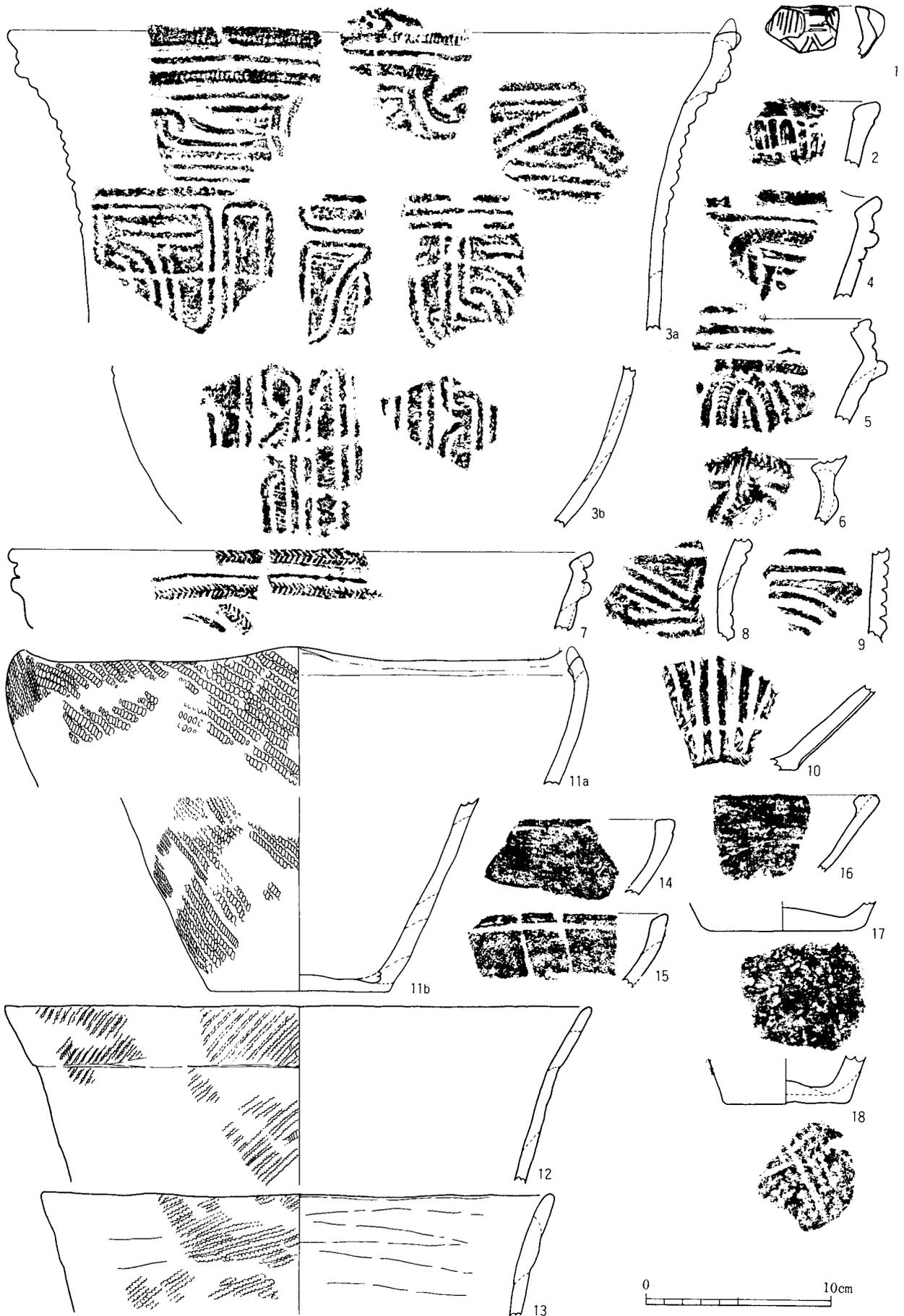
11～13は文様を施さない土器である。11は口縁部がキャリパー状となる器形であり、口唇部が内側にせりだす。全面にRL単節縄文を横位に施す。12は口縁部が外傾する、いわゆる「バケツ型」に近い器形であり、口縁部に段がある。全面に0段多条のLR単節縄文を横位に施す。13も同様な器形の深鉢であり、外面に輪積み痕・内面に指などで痕が残る。全面にRL単節縄文を施すが、11・12のように原体の回転方向は横ではなく、縦方向を基調とする。

14～16は浅鉢の口縁部であり、14・15は口縁端部の外面を篋でなぞり、16は口縁端部の内側に粘土を継ぎ足して肥厚させる。

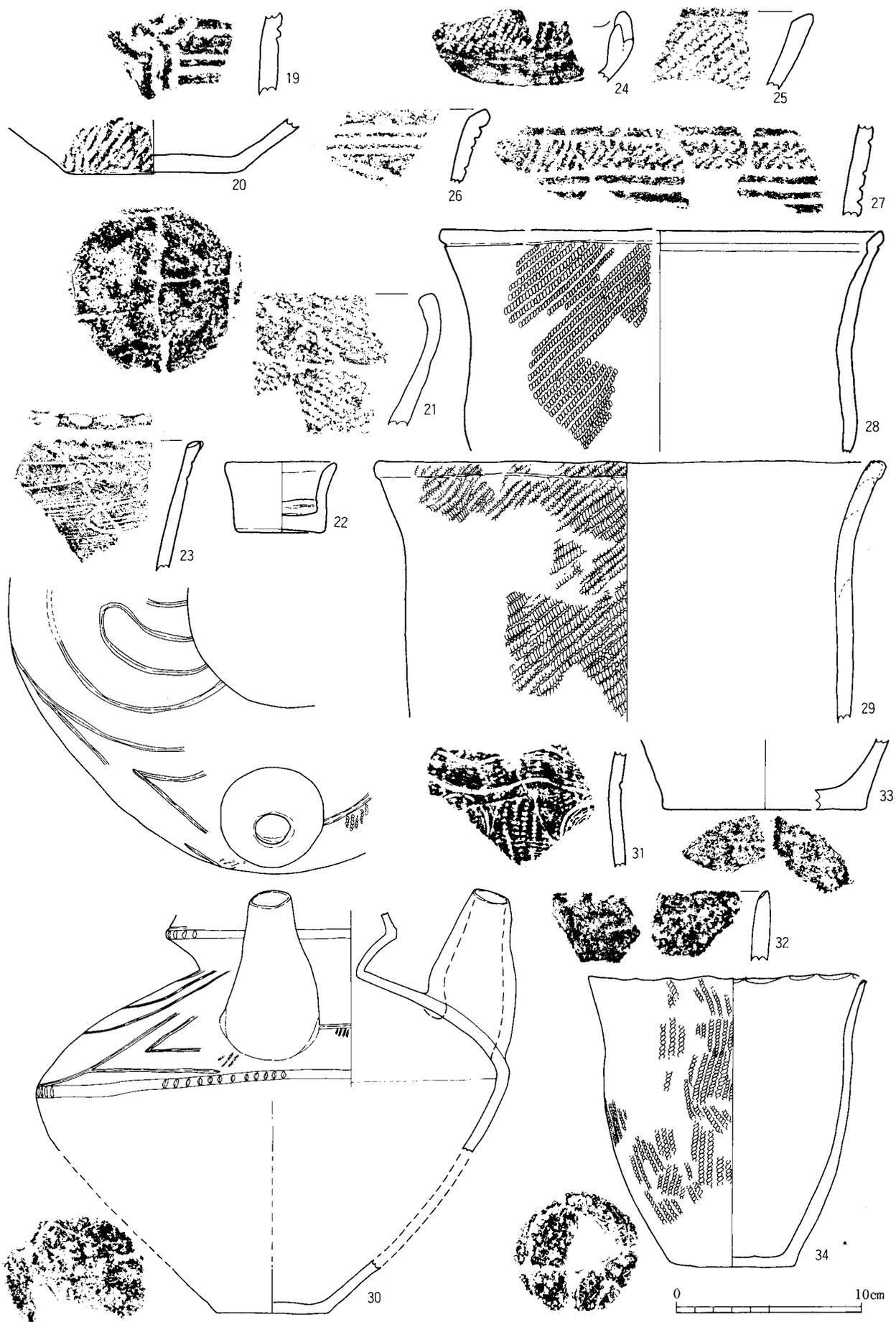
17は深鉢の底部である。底板の内面は縁が押さえられて真ん中が盛り上がり、外面は丁寧になで付けられて平滑である。

##### 2期（18）

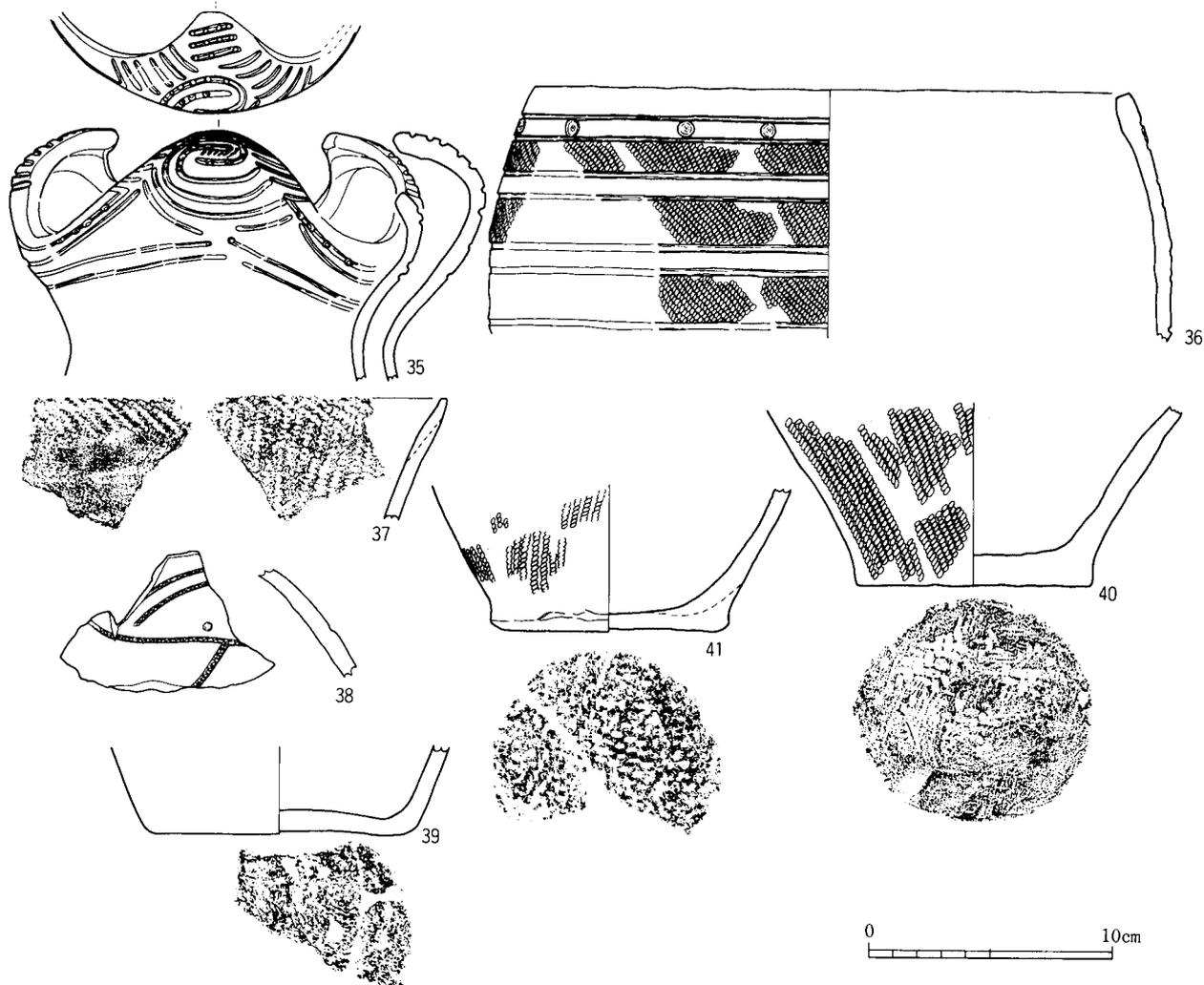
深鉢の底部であり、底板は、粘土を継ぎ足して分厚くなり、上になであげている。底部外面には網代痕が明瞭に残り、編み方は、1本越え1本送り1本潜りである。



第13图 遺構出土土器実測図1 (第2号竖穴住居址, S = 1 / 3)



第14图 遺構出土土器実測図2 (第3、4号竪穴住居址、土坑, S = 1 / 3)



第15図 遺構出土土器実測図3 (土坑、ピット, S = 1 / 3)

第3号住居址出土の土器 (第14図19・20)

1期 (19・20)

19は深鉢であり、口縁部文様帯は幅狭の無文帯を挟んで上下に少なくとも二条以上の半隆起線をめぐらす。図の資料は、ちょうど装飾の単位部にあたり、縦位の隆帯装飾で単位化している。20は深鉢の底部である。胴部の地文は縦位に施されたRL単節縄文であり、下端まで丁寧に施されている。底部外面に圧痕は認められないが、中央部がやや落ち窪んでいる。

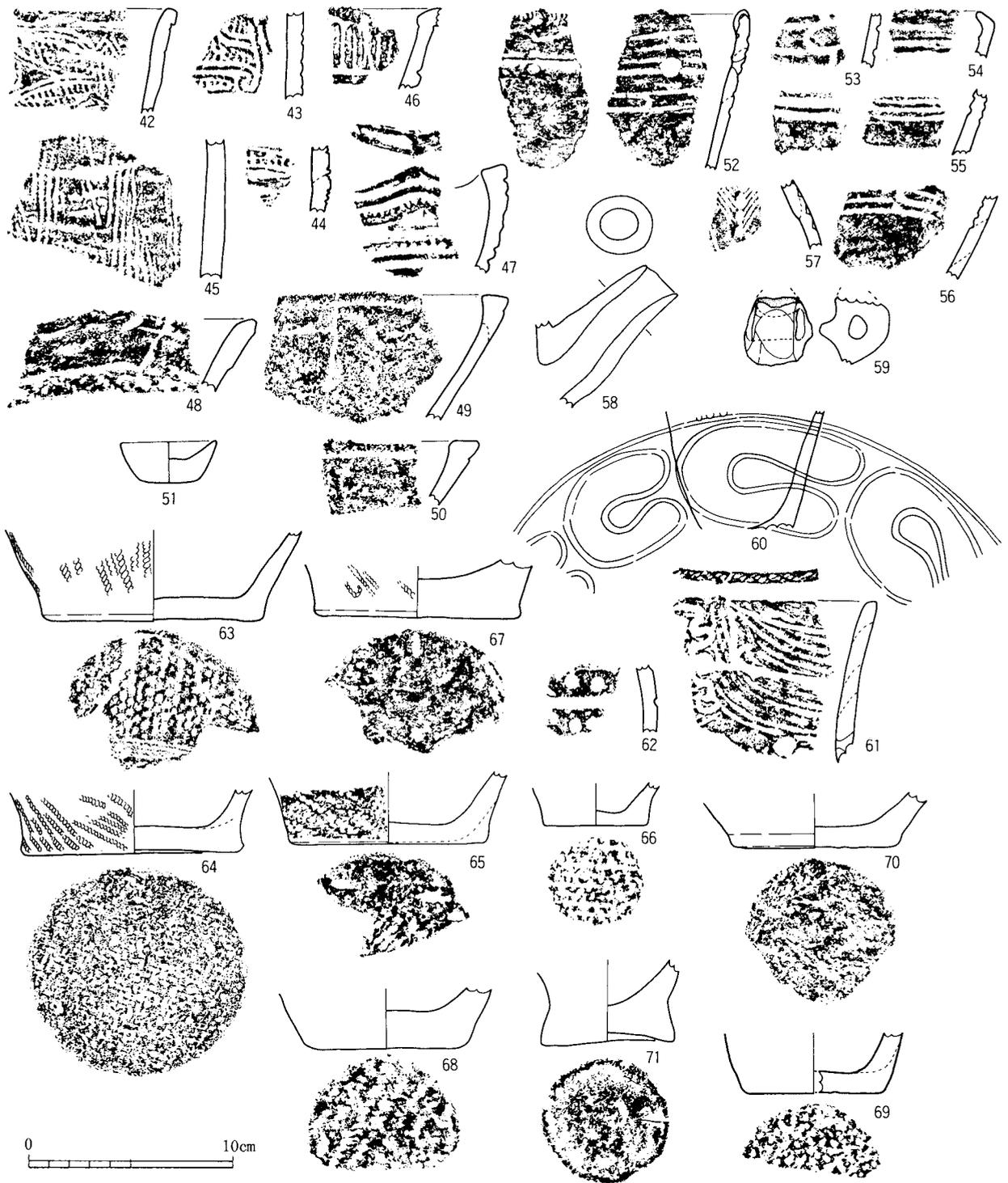
第4号住居址出土の土器 (第14図21~23)

1期 (21・22)

21は文様を施さない深鉢であり、RL単節縄文を横位に施している。22は小型土器であり、口縁部は緩く外反する。底部に圧痕は認められず、やや上げ底になっている。

2期 (23)

深鉢の口縁部であり、櫛目の条線地に沈線文を施す。口唇部には内側から押捺文をめぐらす。



第16图 包含層出土土器実測図 (S = 1 / 3)

### 土坑・ピット出土の土器（第14図24～34・第15図）

#### 0期（29）

文様を施さない深鉢である。緩く外反する口縁部の端部を外側方向に肥厚させ、全面に0段多条のLR単節縄文を横位に施している。

#### 1期（24～28・39）

26・27は深鉢であり、いずれも半隆起線による区画内の縁に刻みをいれるが、27はLR単節縄文で充填しており、有刻無文帯とはならない。

24・25・28は文様を施さない深鉢である。24はキャリパー状の口縁部の外面に粘土を重ねて双頭突起を作り出し、LR単節縄文を横位に施した後、口縁端部以下を磨り消している。25は外傾する口縁部であり、口唇部は内傾して面を取り、全面にLR単節縄文を横位に施している。28は胴部が緩く張り出し、口縁部が緩く外反する器形であり、口唇部は内傾して面を取り内側にせりだす。口縁端部外面は篋でなぞり、以下を全面にLR単節縄文を横位に施している。

39は深鉢の底部であり、底部圧痕は認められない。

#### 2期（30～38・40・41）

30・38は注口土器であり、全形を知りうる30は注口部が上方に長く伸び、肩の張り出しの強い算盤玉状の胴部に屈曲のある口縁部が取り付く。文様は胴部の上半部に施し、充填縄文を伴う沈線文様であり、注口部を挟んで二単位となるものと推測される。38も同様な器形になると推測されるが、沈線内を禾本科莖状の工具で刺突する点が際立った特徴である。底部圧痕は一本越え一本潜り一本送りである。

31は深鉢であり、胴部が緩く張り出し、口縁部が緩く外反する器形である。RL単節縄文を斜位に施した後、いったん器表面を平滑に調整して櫛目の条線文を施している。35は三単位の波状口縁が特徴的な深鉢であり、入り組ませた曲線文様や短線で装飾し、禾本科莖状工具の刺突も多用する。

36は口縁部が緩く内湾する樽形に近い深鉢であり、沈線で区切った縄文帯を何条もめぐらし、その上に竹管状の工具による二個一対の刺突を施す。縄文はRL単節縄文を横位に施し、刺突は、禾本科莖状のものが斜に刺突するのに対して、竹管状のものは垂直に刺突する。

32・34・37は文様を施さない深鉢である。32は外面が粗面であり、口唇部は内側から押捺文をめぐらす。34は口縁部が緩く外反する文様を施さない深鉢であり、全面にRL単節縄文を施すが、施文方向は一定しない。底部の網代痕は一本越え一本潜り一本送りである。37は緩く外反する器形であり、全面にRL単節縄文を斜位に施し条が縦走するが、口縁端部の内外面には同じ縄文を横位に施し、口唇部にも施している。

33・40・41は深鉢の底部である。いずれも底板は厚めであるが、41は内面を削って真ん中が薄くなっている。底部には網代痕が認められ、33は摩滅のため不明であるが、40は二本越え二本潜り一本送りであり、調整を入れて網代痕を消している。41は一本越え一本潜り一本送りである。

### (3) 包含層出土の土器（第16図）

#### 0期（42～45）

42～44は細い半隆起線で装飾する深鉢である。42は口縁部を外側に肥厚させて口縁帯を作り出し、この特徴は第14図29と共通する。45は深鉢の胴部であり、木目状捺糸文を施している。

#### 1期（46～51）

46は深鉢の口縁部であり、刻印蓮華文を施している。47も深鉢の口縁部であり、キャリパー状の口縁部は

波状をなし口唇部は内側にせりだして肥厚して、強い撫でによる凹帯が認められる。有刻の無文帯は削り取って窪んでいる。

48は文様を施さない深鉢の口縁部であり、比較的大きく外反する口縁部は、端部を無文として以下に直前段反捲りのR L L複節縄文を横位に施し、口唇部は内傾して面を取っている。

49・50は浅鉢であり、口唇部は内側にせりだして肥厚し、口縁端部外面を篋でなぞっている。

51は小型土器であり、外面の調整は丁寧で平滑に仕上げられているが、内面にはほとんど調整を施していない。

## 2期 (52~71)

52~59は、加曾利B1式系の土器である。52・53・55は深鉢であり、52は二条一単位の沈線を弧線で区切り、口縁部内面に段を作り出し、口唇部は細かく刻みを入れて単位部に蕨手状の浮文を貼付している。53では縄文を充填し、55では内外面に沈線を密に施している。54・56は浅鉢であり、口縁部が小さく内屈する器形で内面に沈線を密に施すものである。57は注口土器の球形の胴部片であり、58は同様のものにつく注口部、59は口縁部に二個一対で取り付けられる突起である。

60は小型の深鉢であり、口縁部には刺突帯をめぐらし、胴部には「C」字状の意匠文を三単位に割付ける。61は口縁部が緩く外反する深鉢であり、縦位に沈線の蛇行文を施し、左右に条痕を弧状に施し、口唇部に縄文を施している。62は胴部が緩く張り出す深鉢であり、先端の丸い工具による刺突帯をめぐらす。図では分かりにくいですが、刺突帯には縄文を施している。

63~71は底部である。底板のあまり厚くならないもの(63~66・69・70)、厚くなるもの(67・68)、有台状になるもの(71)がある。底部圧痕はいずれも網代痕であり、63・65・66・67・69が一本越え一本潜り一本送りであり、68が二本越え二本潜り一本送りである。67は網代痕をなで消している。70にも網代痕は認められるが、全面を削っており編み方は不明である。

## (4) 石器 (第17図~第20図)

### 打製石斧 (第17図・第18図15~18)

すべて暗灰色を呈する泥岩製である。石の節理にそって板状の剥片を取り、調整を施したものと考えられる。形態は刃部がやや開くタイプの短冊形を基調とするが、刃部の開かないものや斧身に抉りが認められるものもある。

1~8・17・18は刃部がやや開く短冊形であり、基部は幅を狭く成形している。刃部の平面形態は扁平である。9~11・16も同様な短冊形であるが、刃部の平面形態は丸く、10・11は刃部が開かない。12~15は刃部の形態に特徴があり、平面形態は台形を呈して縦に長い。14では斧身に抉りが認められる。

### 磨製石斧 (第18図19~21)

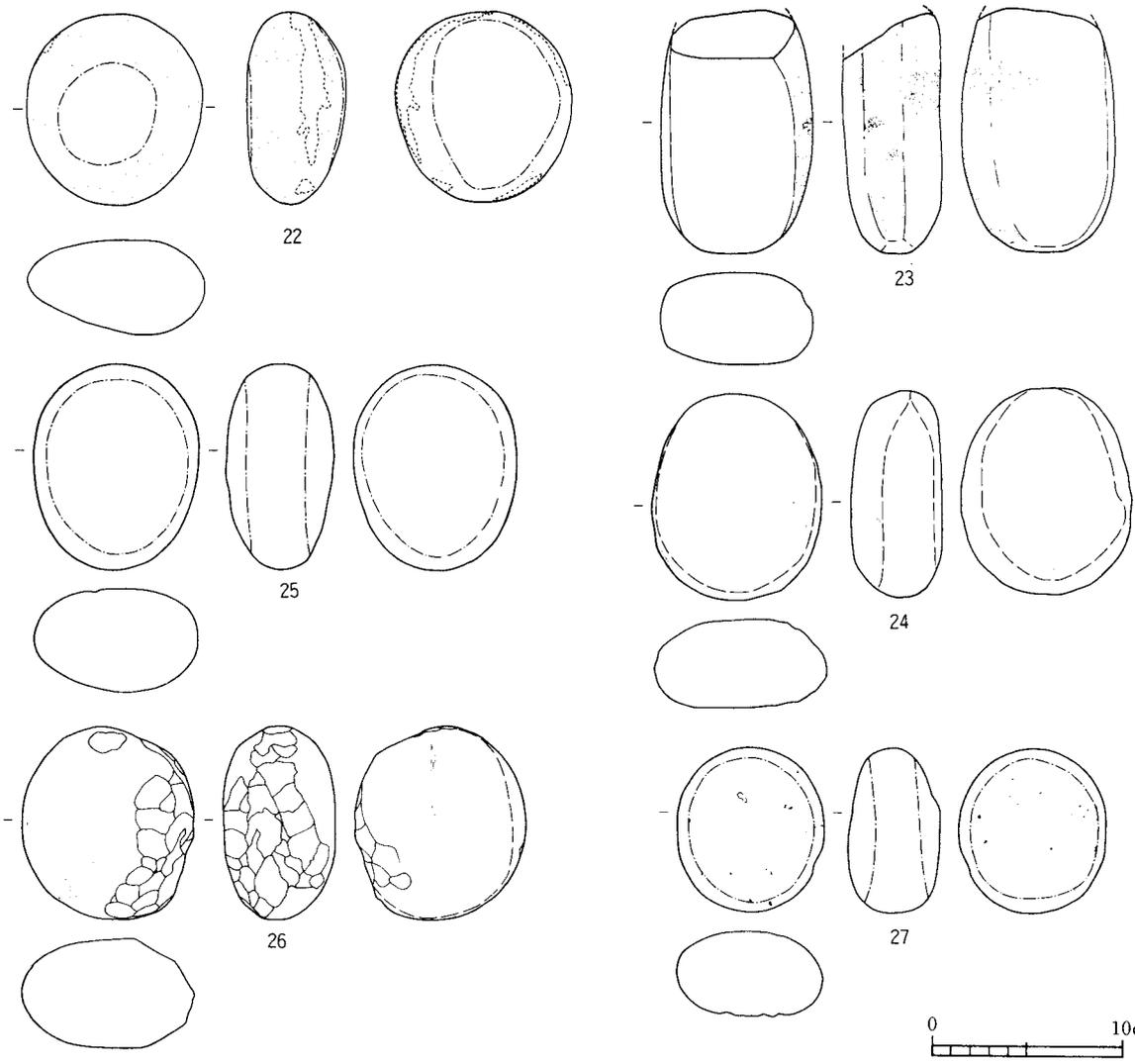
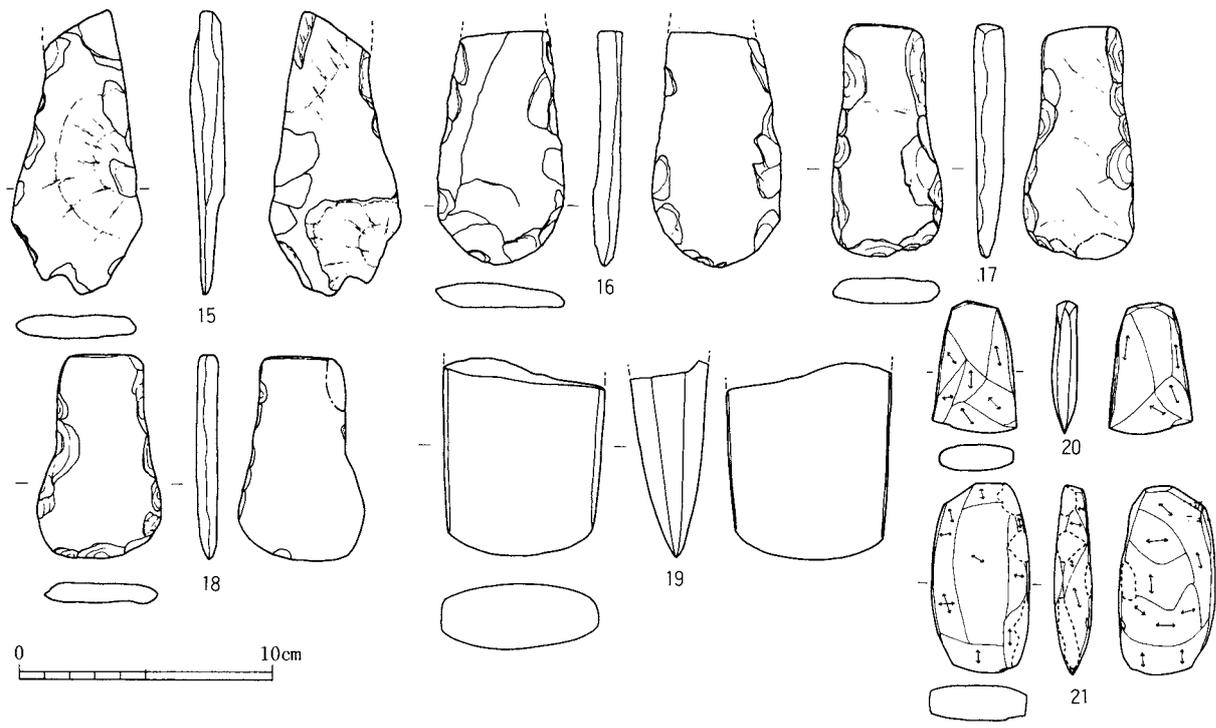
19は大型の定角式磨製石斧であり、暗灰色を呈する安山岩製である。20・21は小型の定角式磨製石斧であり、20は緑灰色を呈する流紋岩製であり、刃部が開く形態のものである。21は灰白色を呈する流紋岩製であり、斧身は肉厚で刃部はすはまる形態のものである。

### 磨石類 (第18図22~27)

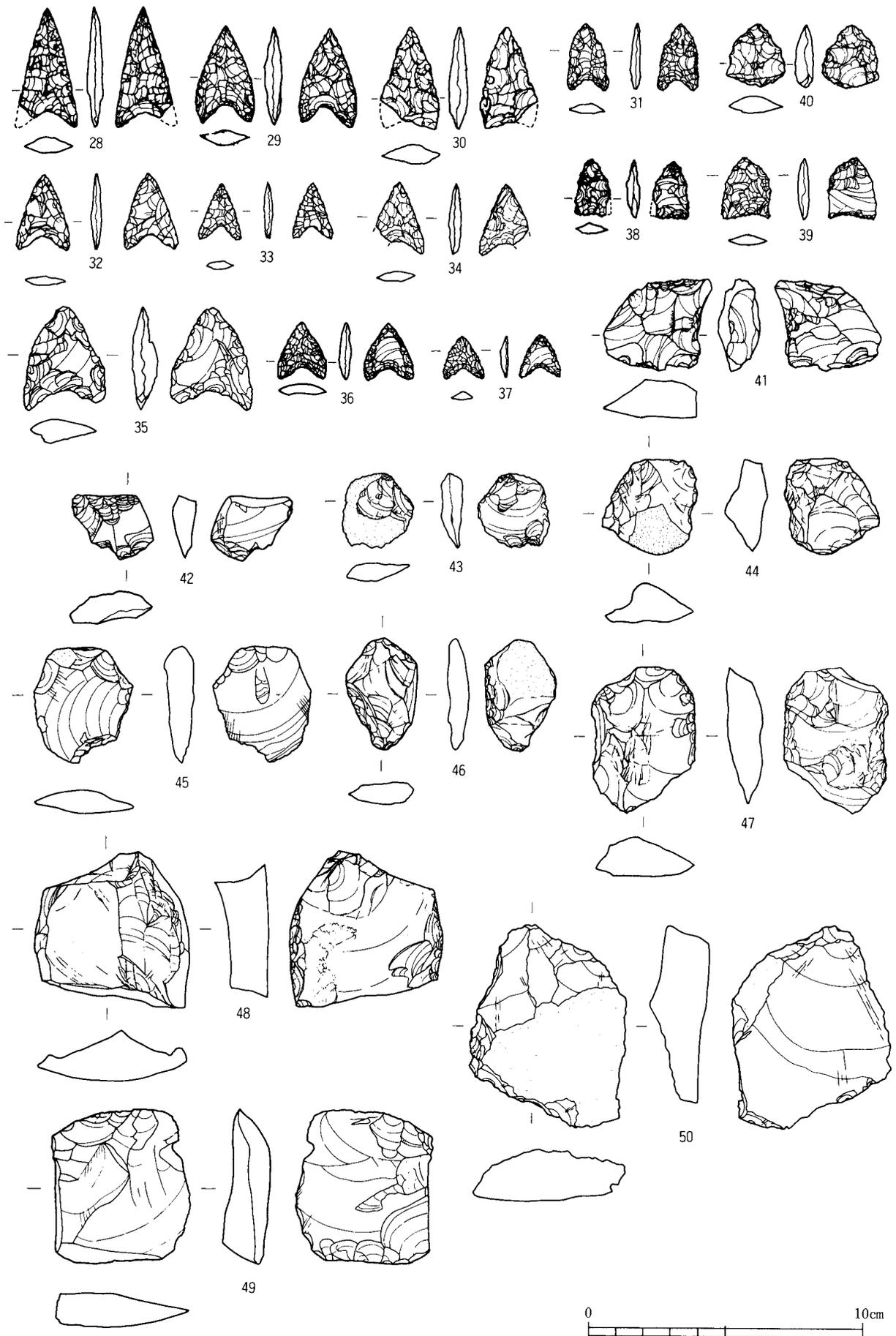
すべて安山岩質の円礫を用いており、磨り面(一点破線で囲んだ部分)は、26で一面、そのほかのものには二面認められる。22では礫の側面に微細な敲打痕(点線で囲んだ部分)が認められ、26には顕著な敲打痕ないし剥離が認められる。



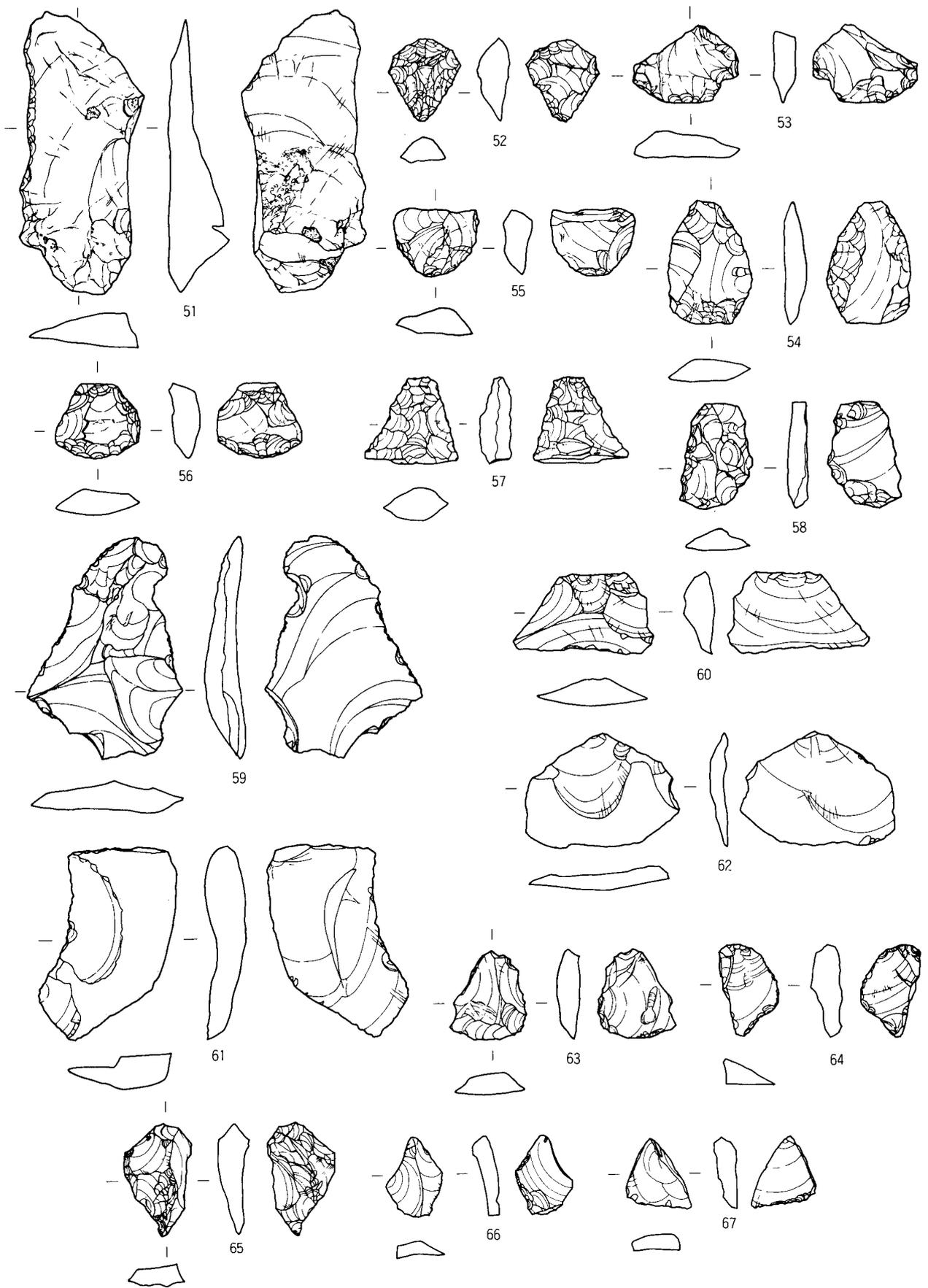
第17图 打製石斧实测图 (S = 1 / 3)



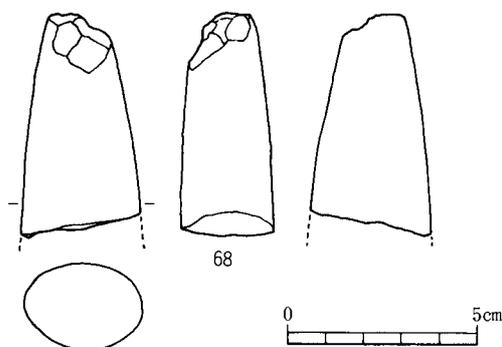
第18図 打製石斧、磨製石斧、磨石類実測図（石斧はS = 1 / 3、磨石類はS = 1 / 4）



第19図 石鏃、クサビ状剥片、剥片 a 実測図 (S = 1/2)



第20图 剥片 a、b 实测图 (S = 1/2)



第21図 石製品実測図 (S = 1 / 2)

#### 石鏃 (第19図28~40)

30は白色を呈する凝灰岩製、34・35は輝石安山岩製、その他は玉髄製であり、素材としては玉髄が多く用いられる傾向が強い。玉髄には飴色・淡い褐色・紫がかった灰白色・半透明の白色などいくつかの色調を呈するものがあるが、大型の剥片・碎片には二・三種類の色調が認められるものが多いことから、特に色調による細分類はしない。28・29・37以外の玉髄製の石鏃はすべて飴色であり、第2

号住居址から出土した玉髄の剥片のほぼすべてが飴色であることとの関連性が成立するならば、飴色の玉髄製の石鏃は1期のものである可能性が高いとも考えられるが、それを裏付けるデータは得られていない。

形態は凹基式を基調とするが、38・39は平基式であり、40は凸基式である。いずれのものも茎を作り出さない無茎鏃である。凹基式のものには28~30のように鏃身が長いものから35~37のように鏃身が短いものまでのバリエーションが認められる。

#### 剥片類 (第19図41~50・第20図)

石器の製作に伴って大小様々の剥片が出るが、これらのうち二次加工痕や使用痕と考えられる剥離痕が認められるものもここに一括して扱う。分類は、上記のうち前者を剥片a、後者のうち微細な剥離痕が認められるものを剥片b、後者のうち特に両極剥離痕が認められるものをクサビ状剥片 (クサビ形石器; ピエス・エスキュー) とし、分類の煩雑さを避けて、特に細分類はおこなわない。

#### クサビ状剥片 (41~49)

45は石英安山岩、49は白色を呈する凝灰岩であり、その他はすべて玉髄である。43には風化面が認められ、円礫から取られた剥片であることが窺われる。使用される剥片は大小様々であるが、全般に厚手であり、両極剥離痕は鋭利な部分に認められる。

#### 剥片a (50~58)

50は輝石安山岩の剥片に急角度の剥離調整をおこなっている。51は玉髄の剥片の薄く伸びた部分に剥離調整をおこなっている。52・55は玉髄の剥片に急角度の剥離調整をおこなっている。53・54・56・57は玉髄の剥片に両面から剥離調整をおこなっている。58は玉髄の剥片に片面から剥離調整をおこなっているが、調整は急角度にはならない。

#### 剥片b (59~67)

微細な剥落痕が認められる剥片を一括した。59・61・62は石英安山岩、60は白色を呈する凝灰岩であり、その他は玉髄である。65は剥片の突出部の先端に剥落痕が認められるが、その他はいずれも剥片の鋭利な部分に剥落痕が認められる。

#### 石製品 (第21図)

68は石棒と考えられるものであり、安山岩質の石を用いている。頭部を含む大部分を欠損しているが、残存部分の先端は先細りに成形しており、先端は欠けている。

## (5) まとめと補足

### 遺物の散布状況

本節の冒頭でも概略を述べたが、時期によって遺物の散布範囲は若干異なる。遺構に伴う遺物は、第22図に示すように、1期では東西にのびる尾根上の竪穴住居址や土坑・ピットなどに集中する傾向があり、2期では西側の南北にのびる尾根上の土坑・ピットなどに多く認められる。

このような傾向を確認するために、土器の胎土の特徴に注目して若干の検討をおこなう。第2表には胎土の分類も示してあるが、以下にその内容を示す。

胎土 a：微砂粒を多く認める砂っぽい胎土である。混和物によって三細分した。

a-1；1mm大程度未満の砂粒を認める胎土である。

a-2；特に焼土粒の混和が認められる胎土である。

a-3；1mm大～2mm大程度の砂粒を多く認める胎土である。

胎土 b：微砂粒がほとんど認められない胎土であり、1mm大～2mm大程度の砂粒を多く認める。

この分類をもとに、各期の土器の胎土別の比率を示したのが第25図(1)である。集計は、原則として個体識別法によっておこなった。0期については、資料数が少ないために参考データとする。1期の胎土は、全般に微砂粒を多く認める胎土 a であり、胎土 b は僅かである。焼土粒を混和する胎土 a-2 が顕著に認められ、全体の過半数を占めることが最大の特徴であり、1期の胎土の標識的な特徴として抽出することが可能である。2期も胎土 a が大多数を占めるが、大粒の砂粒を混和する胎土 a-3 が認められ、これは2期の特徴として抽出できるであろう。また、1期と比較して胎土 b の比率が高い傾向がある。胎土への焼土粒の混和は原則として認められない。

次に、多くの遺物が出土した第2号住居址・第4号住居址・第28号土坑・第44号土坑の土器の胎土別の比率を第25図(2)に示した。前二者が1期の遺構であり、後二者が2期の遺構である。集計は破片数によっておこなった。1期の特徴として抽出した胎土 a-2 は第2号住居址・第4号住居址に認められ、特に第2号住居址の資料は1期の組成に近い。2期の特徴として抽出した胎土 a-3 はいずれの遺構の資料にも認められるが、第28号土坑・第44号土坑で比率が高く、胎土 a-2 が認められないことから、第28号土坑と第44号土坑には、1期の資料が含まれる可能性は極めて低い。また、第2号住居址・第4号住居址には、胎土 a-3 が認められることを勘案すれば、2期の資料が混入している可能性が極めて高いということができよう。

最後にこれらのデータをふまえて、包含層資料について、破片数による胎土別の比率を見る(第25図3)。集計は、グリッドを南北に区切り、遺物の出土が多い2区から5区までのものについておこなった。全般に胎土 a-1 が多いが、2・3区に比較して4・5区は胎土 a-2 が若干多く、胎土 a-3 は若干少ないようである。

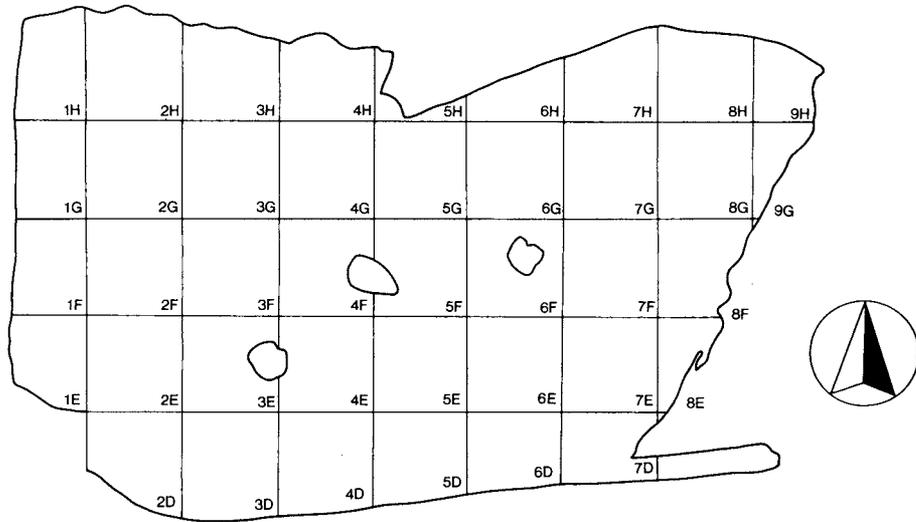
以上より、時期別の遺構の分布と胎土別の土器の分布の状況は、両者に近似性を認めることが可能である。したがって、1期は竪穴住居を営んでいた、少なくとも生活拠点であり、2期は、必ずしも生活拠点とはなりえないが、なんらかの活動拠点であったろうと推測する。

## (6) 土器群の編年的位置付け

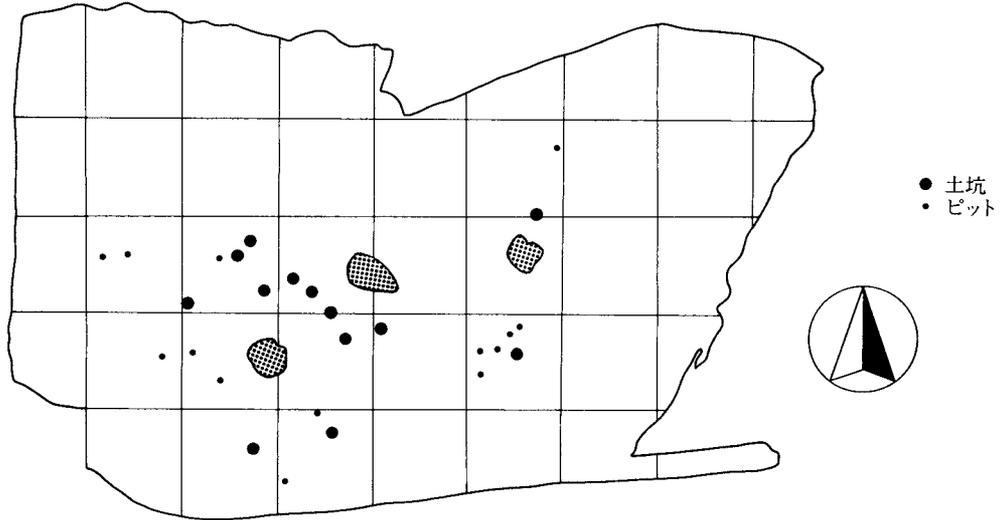
### 0期

細い半隆起線文や木目状燃糸文を特徴とし、「V」字状の意匠や孔のない把手状の突起などから加藤三千雄氏のいう新保式1期に位置付くと考える。

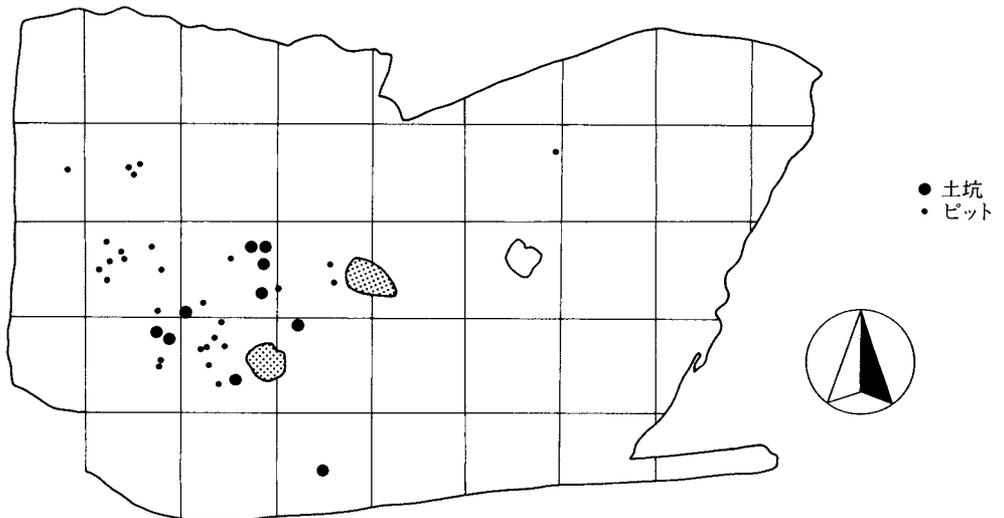
(1) 調査区グリッド



(2) 1期の土器を出土した遺構の分布

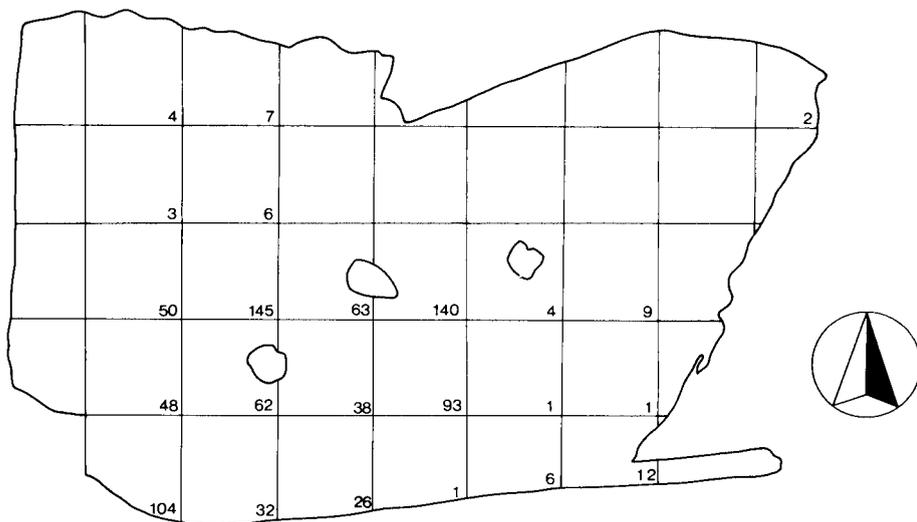


(3) 2期の土器を出土した遺構の分布

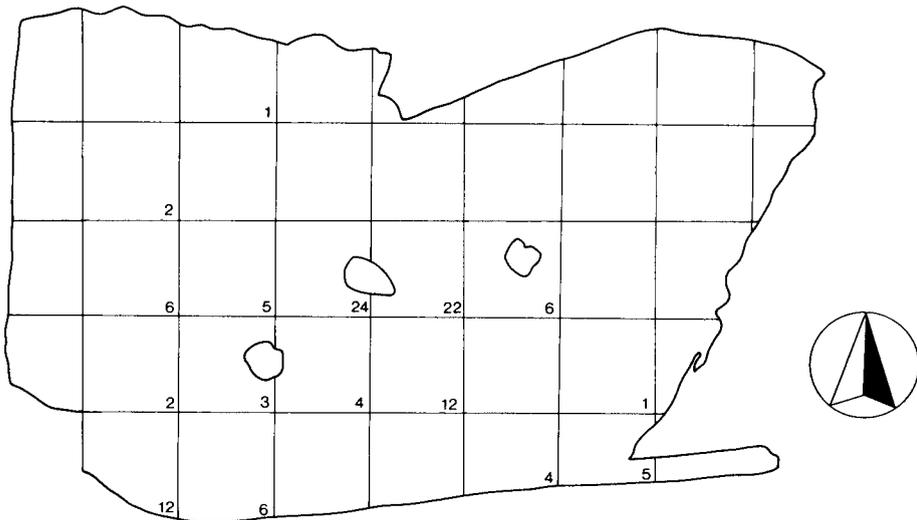


第22図 各期の土器を出土した遺構の分布状況

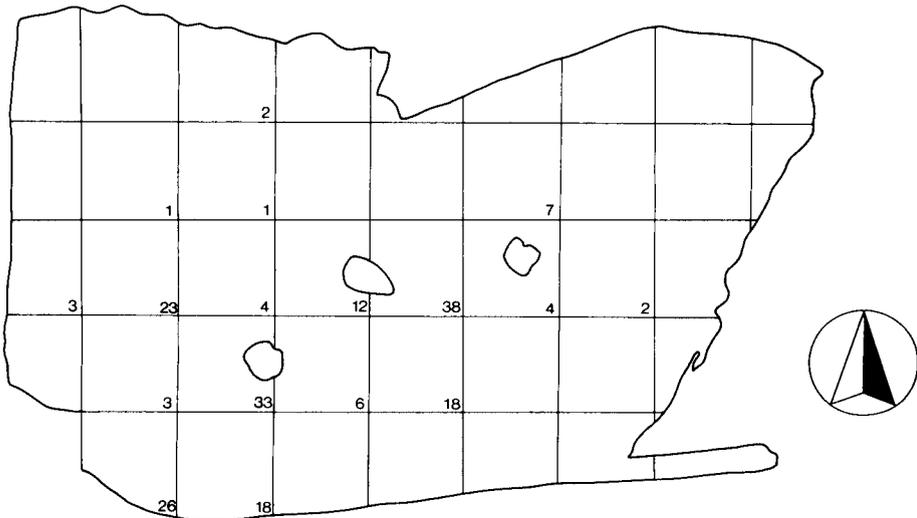
(1) グリッド別胎土 a-1 の分布 (破片数)



(2) グリッド別胎土 a-2 の分布 (破片数)



(3) グリッド別胎土 a-3 の分布 (破片数)

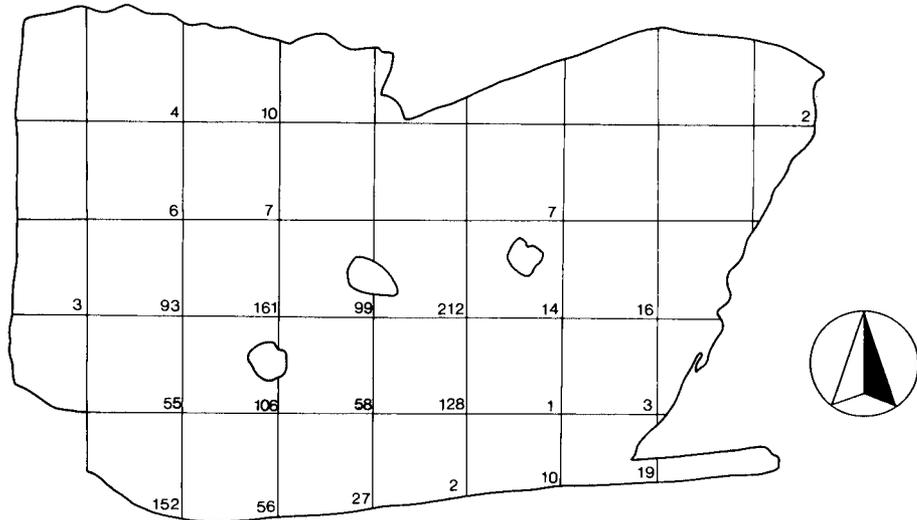


第23図 包含層出土土器の散布状況 1

(4) グリッド別胎土bの分布(破片数)



(5) 合計 (破片数)



第24図 包含層出土土器の散布状況 2

1 期

遺構出土の一括性の高い資料として、第2号住居址の資料を標式的な一群として抽出する。有文土器では、装飾に基隆帯が認められる点・隆帯上の綾杉状に刻む点・有扶無文帯の縦位展開や縄文施文が認められる点など、新崎式の「規格」に外れる特徴をもっていることから、加藤三千雄氏のいう新崎式3期に位置付くと考える。遺物量からいえば、1期の主体はここに置くことができるが、新崎式1・2期の資料として、口縁部に蓮華文を施すものや、第3号住居址の資料が挙げられ、実際には、1期は新崎式1～3期の幅で捉らえるのが穏当である。各住居が廃絶した時期については、第2号住居址は少なくとも新崎式3期には廃絶しており、第3号住居址は新崎式1～2期の範疇で廃絶したものと推測される。第4号住居址は時期の特定が難しいが、新崎式1～3期を越えるものではないと推測される。したがって、一時期に住居が営まれたのは、

一・二棟程度であったと推測され、第2号住居址に新崎式3期の土器が多く出土するのは第2号住居址の廃絶後の窪地に遺物の投棄がおこなわれたためであって、必ずしも1期の主体となる時期とはならない。

なお、新崎式3期は新道式系の土器群の伴出が指標の一つに挙げられるが、本遺跡では一点も確認していない。

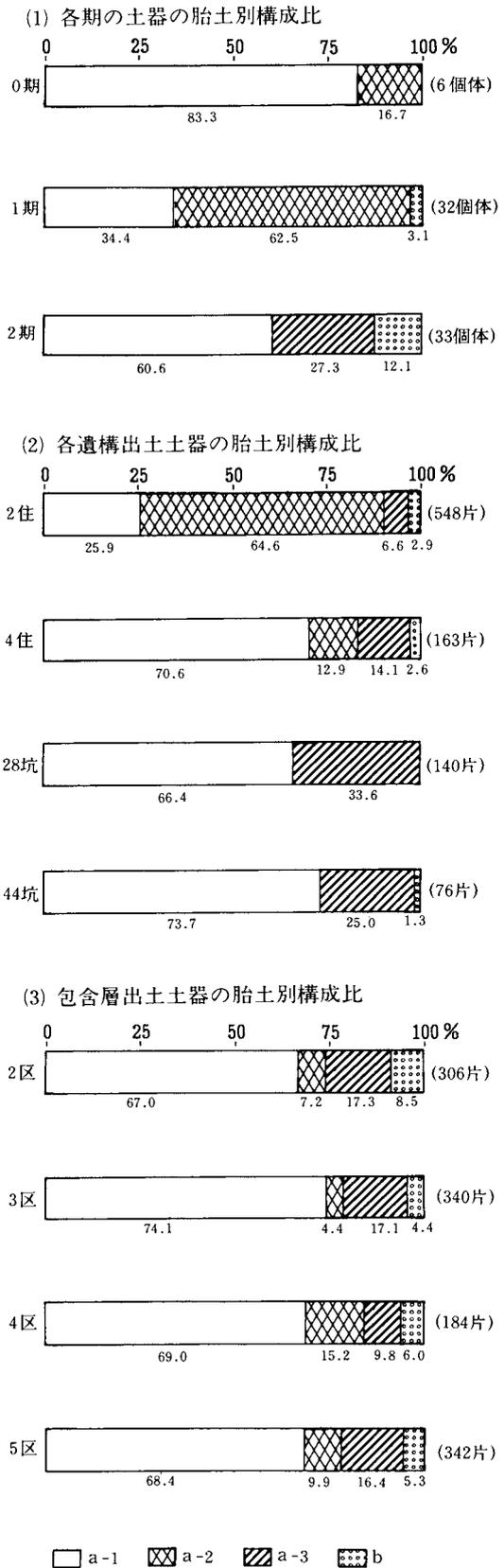
2期

遺構出土の土器は土坑・ピットのものが多く、第2号住居址や第4号住居址にも2期の遺物は含まれるが、原則的に該期の竪穴住居址は認められない。

遺構出土の一括性の高い資料として、第28号土坑・第44号土坑の資料を標式的な一群として抽出する。有文土器では、頸部の括れる小型の深鉢と樽形の大型の深鉢・大型の注口土器が確認される。第15図35のような三単位の波状口縁の深鉢は、器形・文様ともに金沢市馬替遺跡や福井市菅方布遺跡などに類似する資料が認められ、内湾する口縁部の縁帯の文様は福井県永平寺町鳴鹿手島遺跡に顕著に認められる要素であり、いずれも西日本系と考えられているものの範疇を越えるものではない。第14図30の注口土器は胴部が肩の張る算盤玉形を呈して、立ち上がる頸部が取り付け器形であり、第15図38も同様な器形となろう。類似する資料は馬替遺跡に断片的ながら認められるが、肩の張り出しは弱いようである。しかしながら、該期にはむしろ球形の胴部が目立つのであり、鳴鹿手島遺跡や福井市上筋生田遺跡などで見られるような頸部が立ち上がりず球胴に大きな装飾把手を取り付けるものや、頸部が立ち上がるものであっても胴部は球形ないしやや下膨れのイチジク形となるのが通例である。長い注口部は該期には一般的に認められる特徴である。

装飾の手法として目立つのは刺突の多用であり、特に第44号土坑の資料では沈線の中に刺突列を連ねるなど徹底している。こうした例は馬替遺跡や上筋生田遺跡に認められる。第14図23・31のような条線文は西日本系といわれるものに類例が多い。

2期の資料は、包含層出土の加曾利B1式系の土器群を勘案すれば、概ね加曾利B1式並行期に編年する



第25図 土器の胎土別構成比

ことができる。上述の資料もほぼこの時期に比定されていることや、気屋2式や標式的な酒見式が認められない点からも、両者の間、すなわち加曽利B1式並行期に編年できると考えてよい。しかしながら、包含層出土の第16図60のような資料は加曽利B1式よりは後出と考えられるし、注口土器の算盤形の器形や屈曲部の刺突も加曽利B1式よりは後出の特徴である。さらに、加曽利B1式系に認められる沈線間を弧線で区切る手法は、加曽利B1式の中でも後出の手法であるという<sup>(註)</sup>。

堀之内2式と加曽利B1式を区切る目安は、区画化された堀之内式の文様意匠がさらに横位展開を強めて単純化するというところに求められているというが、北陸を含む西日本系の資料にはこうした変化は認められず、このため東日本の土器と連動しているようには感じられず、関東の資料と単純に比較した場合には、大きな渦巻き意匠や縦位に展開する蛇行意匠など、むしろ堀之内式的な特徴の方が目につく。

本遺跡のほかに加曽利B1式系の土器群が伴う遺跡として能都町真脇遺跡・加賀市横北遺跡・鳴鹿手島遺跡の三遺跡をサンプルとして例にとると、真脇遺跡では、気屋2式の系譜の範疇で西日本系の文様のみを受け入れたものが伴関係にあるものとされるが、本遺跡では横北遺跡や鳴鹿手島遺跡の資料に類似すると認めうる資料(第16図61)が伴関係にあると見なされる一方で、気屋2式の系譜で捉らえる資料として、頸部無文帯をもたない第14図31を挙げることができる。また、馬替遺跡や曾万布遺跡のように加曽利B1式系の土器群が認められない遺跡もあり、本遺跡の第15図35のような資料が、これらの遺跡の資料の中に類例を認める資料として挙げられる点も看過できない。

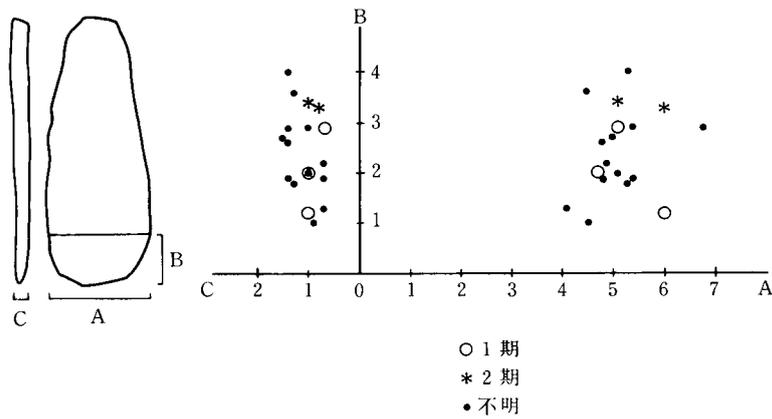
2期の編年的位置付けは、上述したような諸点から必ずしもはっきりとしないが、ほぼ並行関係にある資料として、鳴鹿手島遺跡の存続期後半の資料、曾万布遺跡・横北遺跡第1群・馬替遺跡・真脇遺跡第16群の資料を代表的なものとして提示し、本遺跡の資料は加曽利B1式並行の資料と若干の後出的様相をもつ資料を含むものとする。また、繰り返しになるが、本遺跡の2期の資料には気屋2式・酒見式の資料は存在しないか、少なくとも、明確に群をなす資料としては存在しない。このことを重視すれば、問題点として、気屋2式と鳴鹿手島遺跡の存続期前半の資料はどのような関係にあるのか、加曽利B1式系の土器群が伴う資料と伴わない資料には時期差を認めることができるのか、あるいは遺跡差として同時期と考えるのか、気屋2式・酒見式の下限・上限をどこに設定するのか、あるいはいまだにヒアタスを埋める資料が検出されていないと解釈するのかといった諸点を挙げるのであろう。

#### (7) 石器組成について(特に遺跡の状況との関連から)

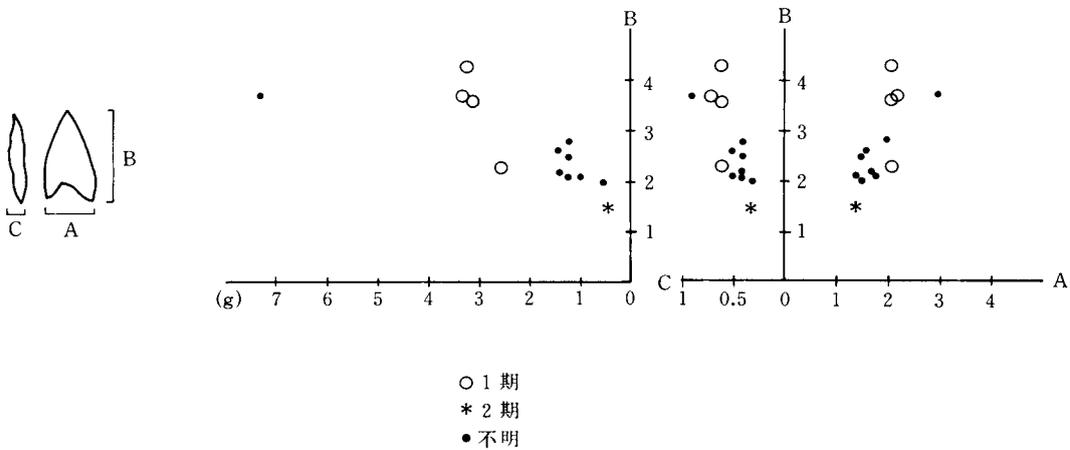
本遺跡で出土した石器はさほど多くはないが、遺跡に認めた活動の痕跡は、土器を見る限りにおいては短期間であったと考えられるため、よほど頻繁に破損を繰り返さない限りあまり数は増えないであろう。本遺跡の石器は、活動の痕跡が明瞭な1期・2期の両時期のものがほとんどであると考えられるが、出土状況などから時期を特定できるものは少ない。ただ、両時期の間には石器組成に大きな違いはないようである。

石器の種類は少なく、打製石斧・磨石類・石鎌が軸となる。なお、機能的に磨石類とセットをなすと考えられる石皿の類の出土は確認していない。これらの石材は、それぞれ泥岩・安山岩・玉髓が主体であり、いずれも奥能登に分布するものようである。広域に分布する類の石材はほとんど認められず、遺跡の規模と同様にこじんまりとした内容であり、遺跡の性格をよく表しているように感じられる。本遺跡で多く出土した泥岩・玉髓の剥片を勘案すれば、石材・石器ともに自給自足であり、たとえば玉髓製の石器は、河原の転石が使われている。石材の交易活動のような痕跡は、遺物からは認めることができない。石器製作の過程で生じたと考えられる大小様々の剥片を道具として使用したと推測されるクサビ状剥片・剥片a・剥片bとい

(1) 打製石斧の刃部の大きさ(単位:cm)



(2) 石鏃の大きさ(単位:cm)と重量



第26図 打製石斧と石鏃の計測値の散布図

ったものも、自給自足という解釈を裏付けるものと考え。観念的な解釈が許されるならば、無駄を最小限にとどめて、使えるものは使うという意識を感じることができる。

(8) 打製石斧の刃部形態についての補足(第26図1)

打製石斧は刃部のやや広がる短冊形を基調として形態的には齊一性が強いが、刃部の形態には変化が認められる。第26図(1)には、A:刃部幅・B:刃部高・C:刃部厚として(復元値を含む)散布図をしめた。B軸が0に近づくほど、刃部は扁平となる。刃部の幅と高さの関係に着目すると、幅と高さの比が5:1・5:2・5:3前後となる三種類が認められ、ある意味当然であるが、これは刃部の形態的特徴(扁平・丸・台形)にはほぼ対応する。刃部の高さが大きいほど石斧自体の厚さは若干大きくなる傾向にあるようである。刃部形態の違いが機能的な違いを反映するということが認められるならば、打製石斧の刃部形態には、この場合、少なくとも三種類の個性が存在した可能性が高い。すべての打製石斧が土掘り具として作られていたとしても、同じ土を掘る行為でありながらそこには様々な状況があり、それぞれの状況に適した形というものが、刃部形態に反映されていると考える。

#### (9) 石鏃についての概観 (第26図2)

石鏃は凹基無茎式を基調とし、その他の形態のものも認められるが、これらは、いびつな形であり、形態的に整っているとは言い難いので、形態的には一種類と見なして大過ないと考える。第26図(2)にはA：最大幅・B：全長・C：最大厚として(復元値を含む)、重量と併せて散布図をしめした。石鏃の場合は、個体数が少ないことにも起因するかもしれないが、小型のものと大型のものがはっきり分かれており、前者は全長2～3cm・最大幅1～2cm・最大厚0.5cm弱・重量1g前後、後者は、同様に4cm前後・2cm前後・0.5cm強・3g前後に集中する。1期の可能性の高い個体は、全般に大型に傾斜する傾向にあり、サイズでは大小の区別が認められるが、重量を見ると、値が近似するという側面がある。

今一度形態に着目すると、形態的に主流の凹基無茎式の石鏃は、大小二種類のサイズが認められるのに対し、その他のものは、小型品に限定される。石鏃の形態に斉一性を認めるならば、目的に応じて複数のサイズの石鏃を作り分けていたとも十分考えられる。また、最大幅に対して全長が相対的に長いものと短いものが認められるという点も勘案すると、同じ凹基無茎式の石鏃であっても複数の個性を認めることも可能であろう。どこまで意図性を認めるかにもよるが、「どんな形になるかは作ってみないとわからない。」といった低い技術水準でない限り、少なくとも精製品のサイズの違いには何らかの意義を認める必要があると考える。

#### 註

(財)千葉県文化財センター小笠原永隆氏・四柳 隆氏の御教示による。

#### 参考文献

- 石川県教育委員会 1977 『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』  
今橋浩一 1980 「堀之内式土器について」『大田区史』資料編 考古Ⅱ 大田区  
加藤三千雄 1995 「北陸における中期前葉の土器群について」『中期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会  
金沢市教育委員会 1993 『金沢市馬替遺跡』  
小島俊彰 1979 「本江遺跡」『滑川市史』考古資料編 滑川市  
鈴木道之助 1991 『石器入門事典』縄文 柏書房  
鈴木加津子 1980 「加曾利B2式精製土器様式」『大田区史』資料編 考古Ⅱ 大田区  
鈴木正博 1980 「加曾利B1式精製土器様式」『大田区史』資料編 考古Ⅱ 大田区  
鈴木正博 1980 「加曾利B1-2式精製土器様式」『大田区史』資料編 考古Ⅱ 大田区  
(財)千葉県文化財センター他 1979 『千葉東南部ニュータウン』7  
中司照世 1990 「曾万布遺跡」『福井市史』資料編1 考古 福井市  
西田泰民 1992 「縄文土瓶」『古代学研究所研究紀要』2 (財)古代学研究会  
仁科 章 1990 「上筋生田遺跡」『福井市史』資料編1 考古 福井市  
能都町教育委員会他 1986 『真脇遺跡』  
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1987 『鳴鹿手島遺跡』  
山本直人 1985 「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』28 石川考古学研究会  
渡辺 誠編 1975 『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館

フリット	出土位置	遺構層位	胎土	器形	時期	二次火傷	No.	備考
5 F	2住15区	覆土	a-1	深鉢形	0期	有	1	
5 F	2住14区	覆土	a-1	深鉢形	1期	有	2	
4 F	2住6.7区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	3	
5 F	2住19区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	4	
4 F	2住7区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	5	
5 F	2住16区	覆土	a-1	深鉢形	1期	有	6	
5 F	2住15区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	7	
4 F	2住6区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	8	
5 F	2住15区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	9	
5 F	2住15区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	10	
4 F	2住2.6区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	11	
4 F	2住11区	覆土	a-2	深鉢形	1期	不明	12	
4 F	2住11区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	13	
4 F	2住7区	覆土	a-2	浅鉢形	1期	有	14	
5 F	2住15区	覆土	a-2	浅鉢形	1期	有	15	
4 F	2住11区	覆土	a-2	浅鉢形	1期	無	16	
4 F	2住11区	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	17	底部
5 F	2住19区	覆土	a-3	深鉢形	2期	有	18	底部(網代痕1:1:1)
6 F	3住	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	19	
6 F	3住	覆土	a-2	浅鉢形	1期	有	20	底部
3 E	4住4区	覆土	a-2	深鉢形	1期	不明	21	
4 E	4住3区	覆土	a-1	小型土器	1期	有	22	
3 E	4住4区	覆土	a-1	深鉢形	2期	無	23	
4 E	17坑	覆土	a-2	深鉢形	1期	無	24	
6 G	25坑	覆土	a-1	深鉢形	1期	不明	25	
3 D	52坑	覆土	a-1	深鉢形	1期	不明	26	
3 D	52坑	覆土	a-1	深鉢形	1期	有	27	
3 D	52坑	覆土	a-2	深鉢形	1期	有	28	
5 E	123ピット	覆土	a-1	深鉢形	0期	有	29	
4 E	28坑	覆土	a-3	注口壺形	2期	無	30	底部(網代痕1:1:1)
4 E	28坑	覆土	a-1	深鉢形	2期	無	31	
4 E	28坑	覆土	a-1	深鉢形	2期	不明	32	
4 E	28坑	覆土	a-3	深鉢形	2期	有	33	底部(網代痕) 32と同一個体か
2 E	40坑	覆土	a-3	深鉢形	2期	有	34	底部(網代痕1:1:1) 完形で出土
3 E	44坑	覆土	a-1	深鉢形	2期	有	35	
3 E	44坑	覆土	a-3	深鉢形	2期	不明	36	
3 E	44坑	覆土	a-1	深鉢形	2期	不明	37	
3 E	44坑	覆土	a-3	注口壺形	2期	無	38	
3 F	90ピット	覆土	a-2	深鉢形	1期	不明	39	底部
3 E	70ピット	底	a-1	深鉢形	2期	有	40	底部(網代痕2:2:1) 調整有
2 G	74ピット	覆土	a-3	深鉢形	2期	有	41	底部(網代痕1:1:1)
4 E	包含層		a-1	深鉢形	0期	不明	42	
7 E	包含層		a-2	深鉢形	0期	不明	43	
5 E	包含層		a-1	深鉢形	0期	不明	44	
5 F	包含層		a-1	深鉢形	0期	有	45	
5 F	包含層		a-1	深鉢形	1期	無	46	
4 D	包含層		a-1	深鉢形	1期	無	47	
4 E	包含層		a-1	深鉢形	1期	無	48	
6 E	包含層		a-1	浅鉢形	1期	不明	49	
4 E	包含層		a-1	浅鉢形	1期	不明	50	
5 D	包含層		b	小型土器	1期	無	51	
5 F	風倒木		a-1	深鉢形	2期	有	52	加曾利B1式系 補修孔有
3 F	包含層		a-1	深鉢形	2期	有	53	加曾利B1式系
2 E	包含層		a-1	浅鉢形	2期	無	54	加曾利B1式系
3 E	包含層		b	深鉢形	2期	有	55	加曾利B1式系
3 F	包含層		a-1	浅鉢形	2期	無	56	加曾利B1式系
3 F	包含層		a-1	注口壺形	2期	無	57	加曾利B1式系
2 D	風倒木		a-1	注口壺形	2期	無	58	加曾利B1式系 注口部
1 E	包含層		a-1	注口壺形	2期	無	59	加曾利B1式系 口縁部突起
3 D	包含層		a-1	小型土器	2期	無	60	
3 F	包含層		a-1	深鉢形	2期	無	61	補修孔有
3 F	包含層		a-1	深鉢形	2期	有	62	
3 E	包含層		b	深鉢形	2期	有	63	底部(網代痕1:1:1)
2 F	包含層		a-1	深鉢形	2期	有	64	底部(網代痕2:2:1)
3 G	包含層		a-3	深鉢形	2期	有	65	底部(網代痕)
2 D	包含層		a-1	深鉢形	2期	有	66	底部(網代痕1:1:1)
3 D	包含層		a-3	深鉢形	2期	有	67	底部(網代痕1:1:1) 調整有
1 G	表土		b	深鉢形	2期	不明	68	底部(網代痕2:2:1)
3 E	包含層		b	深鉢形	2期	有	69	底部(網代痕1:1:1)
3 F	包含層		a-1	深鉢形	2期	無	70	底部(ケズリ調整)
3 D	包含層		a-1	不明	2期	有	71	底部(上げ底)

第2表 土器一覧表

フリット	出土位置	遺構層位	石材	器種	重量(g)	No	備考
3 E	4住3区	覆土	泥岩	打製石斧	116.42	1	
4 E	17坑	覆土	泥岩	打製石斧	242	2	
2 D	風倒木		泥岩	打製石斧	130	3	
3 E	包含層		泥岩	打製石斧	113.71	4	
3 D E	包含層		泥岩	打製石斧	165	5	
5 D	包含層		泥岩	打製石斧	100.66	6	刃部・基部欠損
4 D	表土		泥岩	打製石斧	96.91	7	
5 F	風倒木		泥岩	打製石斧	67.43	8	刃部・基部欠損
2 D	風倒木		泥岩	打製石斧	94.73	9	
2 D	風倒木		泥岩	打製石斧	148	10	基部折損
3 D	包含層		泥岩	打製石斧	89.17	11	
4 D	54坑	覆土	泥岩	打製石斧	73.7	12	
2 D	包含層		泥岩	打製石斧	66.54	13	刃部折損
4 F	包含層		泥岩	打製石斧	111.5	14	基部折損
4 F	2住7区	覆土	泥岩	打製石斧	62.55	15	基部折損
4 F	2住6区	覆土	泥岩	打製石斧	56.71	16	基部折損
3 D	包含層		泥岩	打製石斧	56.17	17	基部折損
7 F	包含層		泥岩	打製石斧	33.68	18	基部折損
3 E	44坑	覆土	安山岩類	磨製石斧	220	19	基部折損
4 F	2住5区	覆土	流紋岩	磨製石斧	29.65	20	
5 E	包含層		流紋岩	磨製石斧	76.26	21	
4 F	2住6区	覆土	安山岩類	磨石類	698	22	
4 F	2住	12ピット	安山岩類	磨石類	684	23	
6 F	3住	ピット	安山岩類	磨石類	714	24	
3 E	4住4区	覆土	安山岩類	磨石類	773	25	
6 D	包含層		安山岩類	磨石類	699	26	
7 E	包含層		安山岩類	磨石類	468	27	
5 F	2住20区	覆土	玉髓	石鏃	3.23	28	
4 F	2住6区	覆土	玉髓	石鏃	3.14	29	
4 F	2住	12ピット	凝灰岩	石鏃	3.29	30	
3 D	包含層		玉髓	石鏃	1.22	31	
4 F	13ピット	覆土	玉髓	石鏃	1.21	32	
2 E	S X 0 1	覆土	玉髓	石鏃	0.54	33	
5 D	包含層		輝石安山岩	石鏃	1.42	34	
3 D	包含層		輝石安山岩	石鏃	7.36	35	
4 D	包含層		玉髓	石鏃	1.25	36	
4 E	28坑	覆土	玉髓	石鏃	0.45	37	
3 F	包含層		玉髓	石鏃	0.96	38	
4 F	包含層		玉髓	石鏃	1.4	39	
4 F	2住7区	覆土	玉髓	石鏃	2.58	40	
4 F	2住7区	覆土	玉髓	クサビ	18.92	41	
2 G	包含層		玉髓	クサビ	5.66	42	
2 D	包含層		玉髓	クサビ	5.54	43	
1 F	包含層		玉髓	クサビ	13.57	44	
6 F	包含層		石英安山岩	クサビ	11.35	45	
2 F	包含層		玉髓	クサビ	9.1	46	
2 F	包含層		玉髓	クサビ	27.56	47	
6 G	包含層		玉髓	クサビ	56.09	48	
4 D	包含層		凝灰岩	クサビ	44.23	49	
2 E	包含層		輝石安山岩	剝片a	86.46	50	急角度剝離
4 F	包含層		玉髓	剝片a	67.6	51	片面から剝離
3 F	包含層		玉髓	剝片a	7.24	52	急角度剝離
3 D	包含層		玉髓	剝片a	8.21	53	両面から剝離
2 D	包含層		玉髓	剝片a	10.88	54	両面から剝離
4 E	28坑	覆土	玉髓	剝片a	8.56	55	急角度剝離
4 F	包含層		玉髓	剝片a	8.63	56	両面から剝離
6 D	包含層		玉髓	剝片a	10.27	57	両面から剝離
	表土		玉髓	剝片a	6.49	58	片面から剝離
4 E	包含層		石英安山岩	剝片b	34.85	59	
4 D	包含層		凝灰岩	剝片b	9.95	60	
3 E	4住	1坑	石英安山岩	剝片b	34.66	61	
3 E	包含層		石英安山岩	剝片b	14.05	62	
3 F	包含層		玉髓	剝片b	6.79	63	
4 F	包含層		玉髓	剝片b	5.06	64	
2 D	風倒木		玉髓	剝片b	8.33	65	石鏃?
2 E	包含層		玉髓	剝片b	2.94	66	
3 F	包含層		玉髓	剝片b	3.38	67	
2 F	包含層		安山岩類	石棒?	58.34	68	折片

第3表 石器一覧表

## 第5章 古代の遺構と遺物

### (1) 土器投棄遺構（2D区）（第32図1～21、第33図22・23）

上町和住下遺跡の、南西隅斜面で検出した。遺跡が立地する丘陵尾根には、表土掘削に使用する重機が登れる道はなく、尾根の西斜面を削って進入路を造成した。この進入路が尾根の上部にとりつくあたりで土器片がまとまって出土したので、尾根南西隅の斜面上部の表土を除去したところ、約3×2mの範囲で多量の土器や焼土が堆積していることが明らかになった。当初は、斜面に焼土とともに堆積していることから、土器焼成窯の存在も想定して調査を進めた。

#### 土層堆積

土層観察の結果、表土の直下には以下の土層堆積を確認した。

第一層：黄茶褐色土層（炭化物を少量含む地山質土）

第二層：暗黄茶褐色土層（炭化物・焼土・土器を多量に含む）

第三層：暗灰褐色土層（炭化物と焼土は第二層より少ない。土器は南北畦畔A Bの周辺で多く検出した。）

第四層：黄灰色土層（炭化物や縄文土器片を含む）

最下層の第四層は縄文時代の包含層で、この項で報告する古代土器の堆積層は第三層と第二層に包含されている。第一層の黄茶褐色土層は、土器投棄遺構形成後に丘陵上から流出した地山質の土である。

#### 遺物

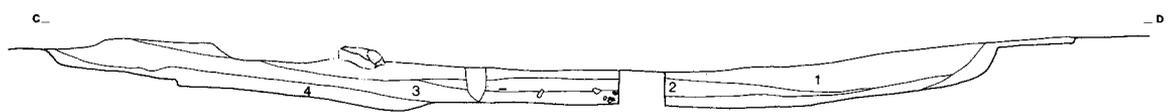
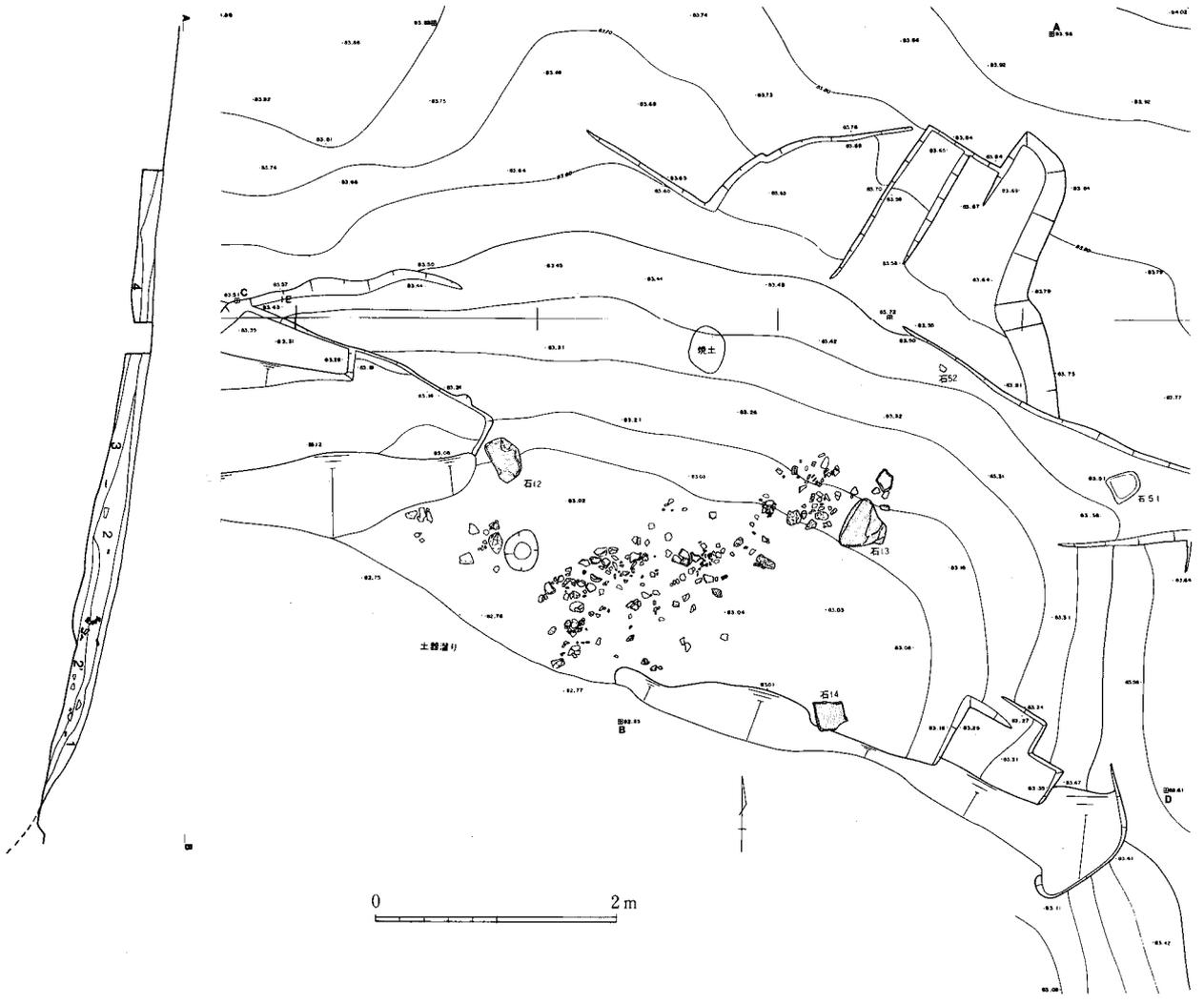
第32、33図の1～23が、土器投棄遺構で検出した資料である。須恵器は、土師器に比べて出土量が少ない。また、須恵器の壺・甕などの貯蔵具は、この遺構の土器群からは検出しなかった。2は焼けゆがんだ坏蓋。3は、精良な胎土で作られた葉壺の蓋である。1～4の須恵器は、9世紀前半に比定できる資料である。5は、口径11.8cm・器高4cmの土師器碗である。内面は黒色処理がされており、外面とともに、磨き調整が施されている。非ロクロ整形である。内面と外面の口縁部周辺には、油煤が付着している。6は深身の非ロクロ碗で、7・8は口縁部が内傾する罎状の容器である。いずれも非ロクロ整形で、内面が黒色処理されている。10～14は手捏ねの坏で、口径5cm前後の小型品10・11と、口径6cm前後の大型品12～14の二種の法量がある。内面に油煤の付着した資料13があり、灯明に使用されていたことを示唆している。16～21は、非ロクロ整形の甕である。資料数が少ないので形式分類は難しいが、口縁端部を押さええないA類16・17・20と端部を押さええたB類18・19の二種に大別できる。A類はさらに、体部が外側に膨らむ16・20と、直立傾向をみせる17に二分できる。いずれの資料も、外面に粘土紐巻き上げ痕を残し、指頭圧痕を明瞭に残している。内面は、ハケ調整を丁寧に施している。22・23は、頸部から口縁にかけて大きく外反する埴型の土器である。体部の内外面には、粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。また、指頭圧痕も明瞭に残っている。

#### 年代観

この土器群に共伴した須恵器は9世紀初頭に比定できるものであり、土器群全体の年代観もほぼこの時期に比定できると思われる。

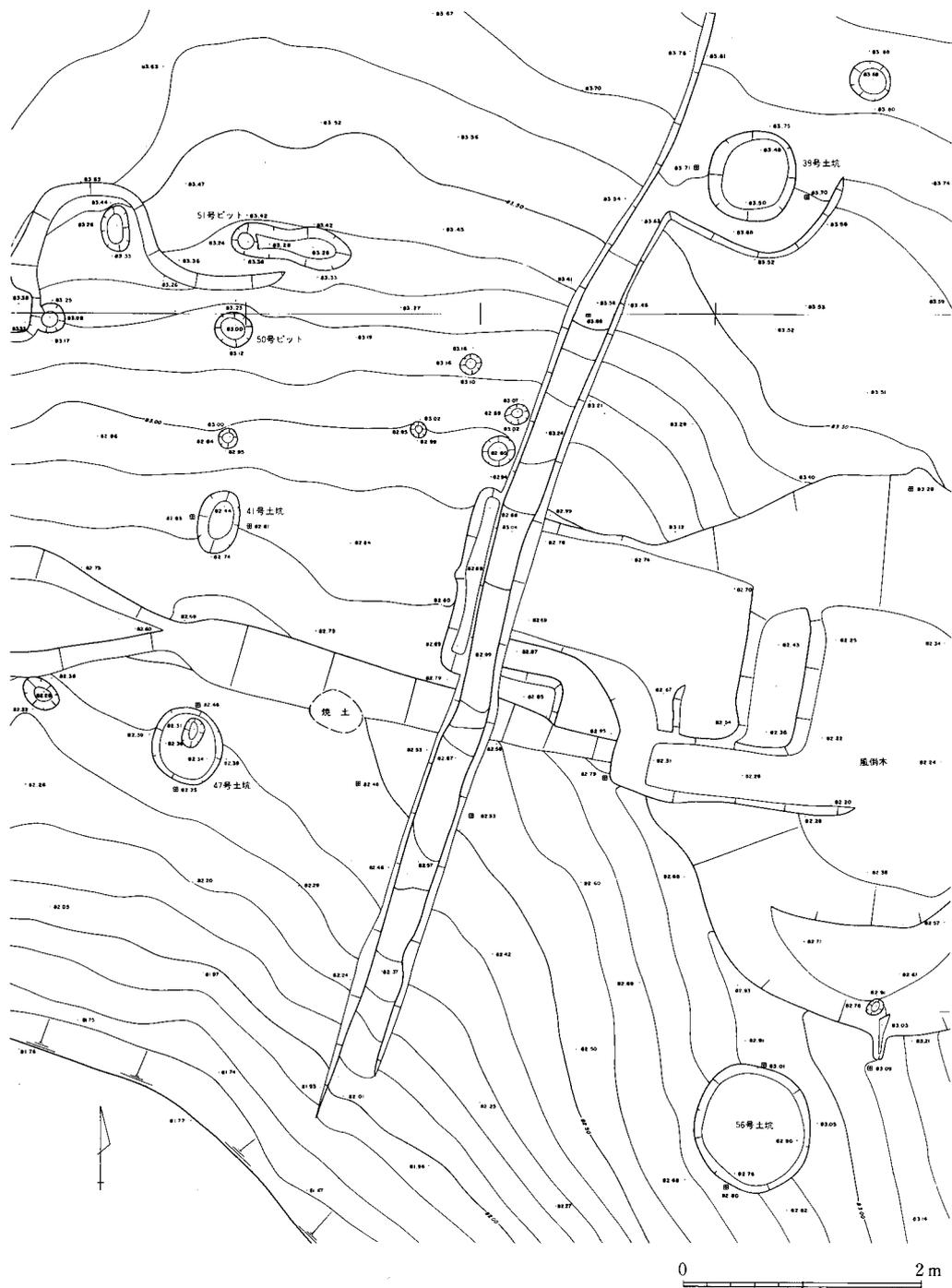
#### 土器投棄遺構の性格

この土器群で検出した土器には油煤痕を伴う資料があり、灯明に使用されたことが考えられる。手捏ね坏は古墳時代中期の祭祀に使用されている例が一般的であり、8世紀以降に比定できる資料は羽咋市寺家遺跡<sup>(1)</sup>や輪島市三井小泉遺跡<sup>(2)</sup>などで出土してはいるが、出土例はきわめて少ない。上町和住下遺跡の土器投棄遺構から5点もの手捏ね坏が出土していることは、この土器群が何らかの宗教的な行為に使用されたことを推測できる。

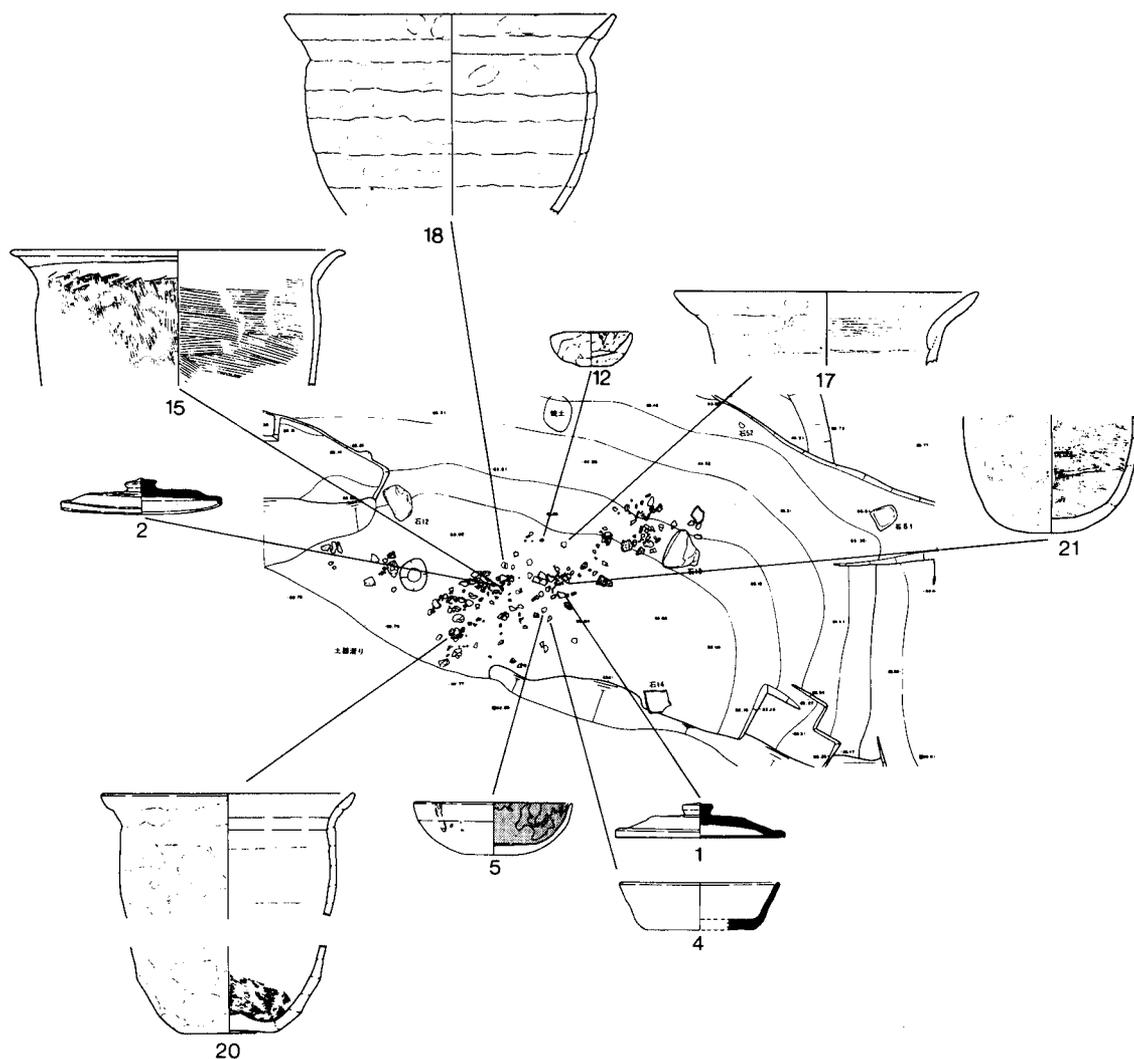


1. 黄茶褐色土層(炭化物を少量含む地山質土)
2. 暗黄茶褐色土層(炭化物・焼土・土器を多量に含む)
3. 暗灰褐色土層(炭化物と焼土は第2層より少ない)
4. 黄灰色土層(炭化物や縄文土器片を含む)

第27図 土器投棄遺構(2D区)



第28図 土器投棄遺構の下層（土器群除去後の地形）



第29図 土器投棄遺構の土器出土位置

(2) 4 E・5 E区出土の土器 (第33図24~29)

このグリッドでは、盛土で平坦面を造成した上に柱穴が多数掘り込まれているのを検出した。柱筋を確認できなかったが、何らかの建物があったものと思われる。いくつかの柱穴から、内黒土師碗を検出している。この調査区から、第33図24~29の内黒土師碗を検出した。法量や調整は、前述の2 D区土器投棄遺構で検出した土師碗と同じである。

(3) 5 G区出土の土器 (第33図30~31)

丘陵の北斜面から出土した土器。この周辺は階段状に盛土が行われており、近世以降の畑跡と思われる。盛土から、有台碗が二点採集されている。30は内面黒色で、底部外面に糸切り痕を残している。31の内面は、黒色処理はされていない。いずれも、10世紀代に比定できる。



第30図 古代土器を出土したグリッド

(4) 5 D・6 E区出土の土器（第33図32～35）

4 E・5 E区で検出した盛土整地面から一段下がっており、当初は竪穴住居跡の痕跡とも考えて1号住居と呼んでいた浅い落ち込みや小穴を検出している。土器は、直径6.5cm前後の円盤状土製品32、内黒無台椀33、内黒有台椀34、両黒椀35を検出している。いずれの資料も、9世紀後半から10世紀前半に比定できる。

(5) 7 D・E・F区出土の土器（第33図36～47）

丘陵の東斜面から、36～46の土器が出土している。36・37は、2 D区土器投棄遺構や5 G区で検出した内黒土師椀と同じ法量と調整で作られている。38は分厚い糸切り底部の外周をつまんで高台とした土師椀で、内外両面を黒色処理している。39～42は、高坏状の器形と思われる資料である。39の坏部には、小穴が見られる。また、40の坏部底面には三個の透かし穴がある。41は、脚部上部に小孔がある。これらの資料に類似した高坏は、押水町宿向山遺跡から出土している。43は、多口瓶の一部である。44は大型の盤もしくは鉢の口縁付近で、内黒処理がされている。45は非クロコ土師甕で、2 D区の土器投棄遺構で検出した甕と同型である。46は須恵器双耳瓶の肩部で、9世紀半ばから後半に比定できる資料である。47は、直径3 cm前後と思われる韃羽口の破片である。

36・37・45は、9世紀初頭に比定できる。38～43・46は、9世紀中頃から後半に比定できる。これらの土器は、いずれも丘陵東斜面から検出しており、丘陵上から流れ込んだものと思われる。

(6) 古代の遺構（第31図）

第20号土坑（5 E区）長径約90cm、短径約55cmの長楕円形。深さ約12cm。

第22号土坑（6 G区）平面が不定形の土坑。深さ約20cm。

第23号土坑（6 G区）平面が不定形の土坑。深さ約20cm。

第39号土坑（2 E区）径75cmの円形を呈し、深さは約20cmを測る。覆土は灰褐色の単層である。

第41号土坑（2 D区）長軸54cm、短軸34cm、深さ40cmを測る。覆土には、炭化物と焼土を含む。

第42号土坑（2 E区）径120cmの略円形を呈す。覆土は灰褐色の単層で、炭化物を少量含む。

第43号土坑（2 E区）長軸74cm、短軸52cmの略円形を呈し、深さは約52cmを測る。覆土は、灰褐色の単層。

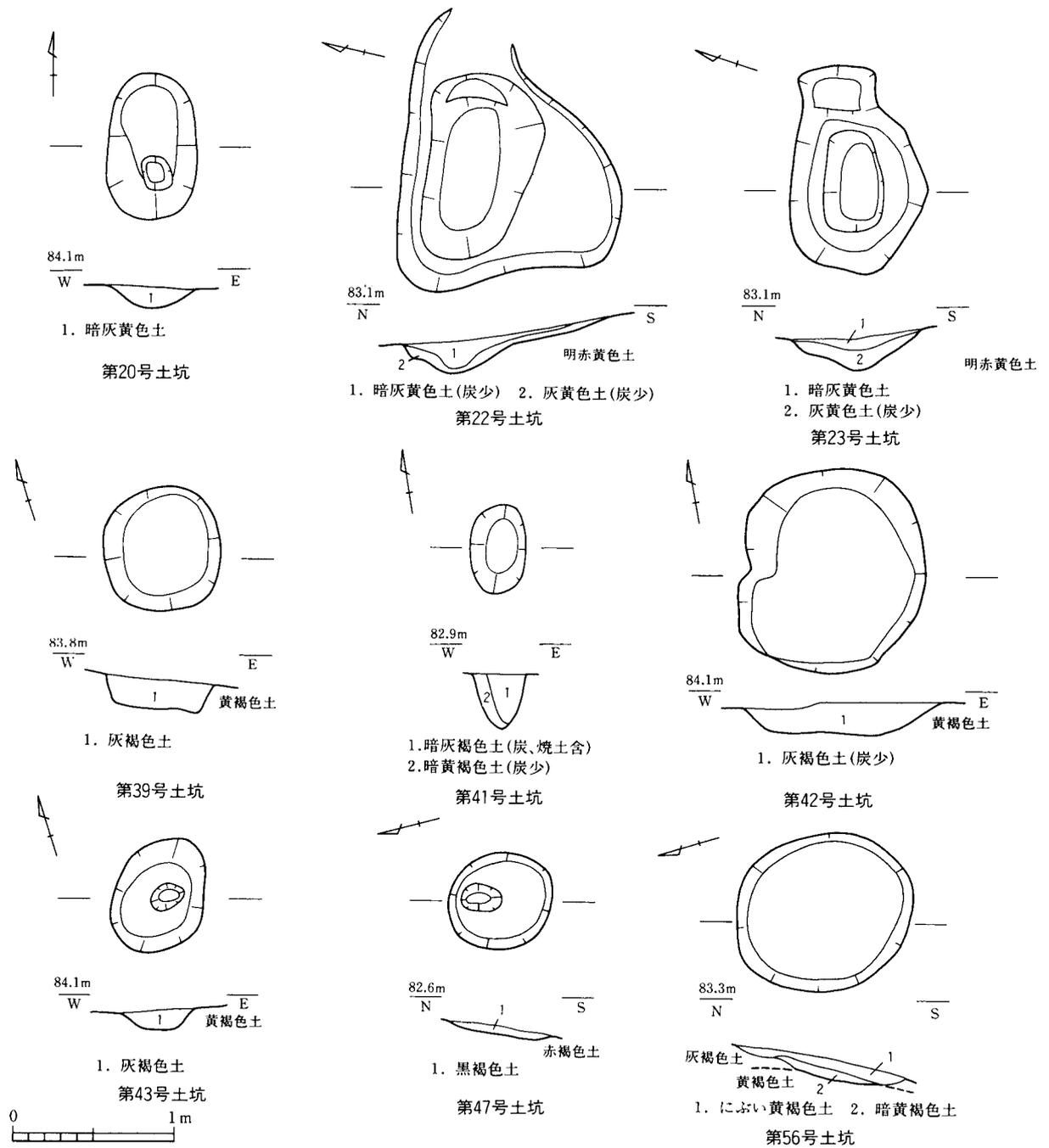
第47号土坑（2 D区）径60cmの円形を呈し、深さは10cm未満と浅い。黒褐色の覆土を持つ。

第56号土坑（2 D区）径100cmの円形を呈し、深さは10cmを測る。

(7) 古代の和住下丘陵

丘陵の上では4～6 E区周辺で、9世紀初頭と9世紀後半から10世紀初頭の土器が出土し、また、5 E区では盛土整地層を検出している。丘陵の西斜面では2 D区の土器投棄遺構があり、9世紀前半に多量の土器が投棄されている。また、丘陵東斜面では9世紀前半と9世紀後半から10世紀初頭の土器が流れ込んだ状態で検出され、北側斜面の5 G区では10世紀の土器を検出している。丘陵の斜面から出土した土器は、いずれも丘陵中央部で活動した古代の人々が投棄したり流れ込んだものと思われる。丘陵の中央には、5 E区で検出したように盛土整地面があり、何らかの建物があった可能性が高い。丘陵斜面で検出した土器は、この建物の由来するものと思われる。

2 D区土器投棄遺構からは灯明に使用した痕跡を残す土器が出土し、また、祭祀に使用したと思われる手捏ね土器も出土している。東斜面の7 E・F区からも、多口瓶や高坏など祭祀に使用された土器が出土して



第31図 古代の土坑実測図 (S = 1 / 40)

いる。これらの状況から、丘陵中央には何らかの宗教的な施設があり、そこで使用された土器が斜面に廃棄されたものと考えられる。上町和住下遺跡で検出したような宗教行為後の土器投棄を窺わせる例は、押水町宿向山遺跡にある。宿向山遺跡は平地からの比高差が約30mの丘陵上にあり、尾根筋の南斜面に油煤痕跡をとともなう多量の椀・皿や壺・三足盤・多口瓶、黒笹90号窯期の灰釉手付瓶などが検出されている。この土器群の性格について、調査者は丘陵上にあった小規模な宗教施設に由来すると想定している。金沢市から小松市にいたる前山地帯では、8～9世紀に山林寺院が創建されているが、上町和住下遺跡の丘陵上にも9世紀に小規模な仏堂が建てられ、修行が行われていたのではないだろうか。

#### (8) 上町和住下遺跡にみる、珠洲・柳田村周辺の古代土器

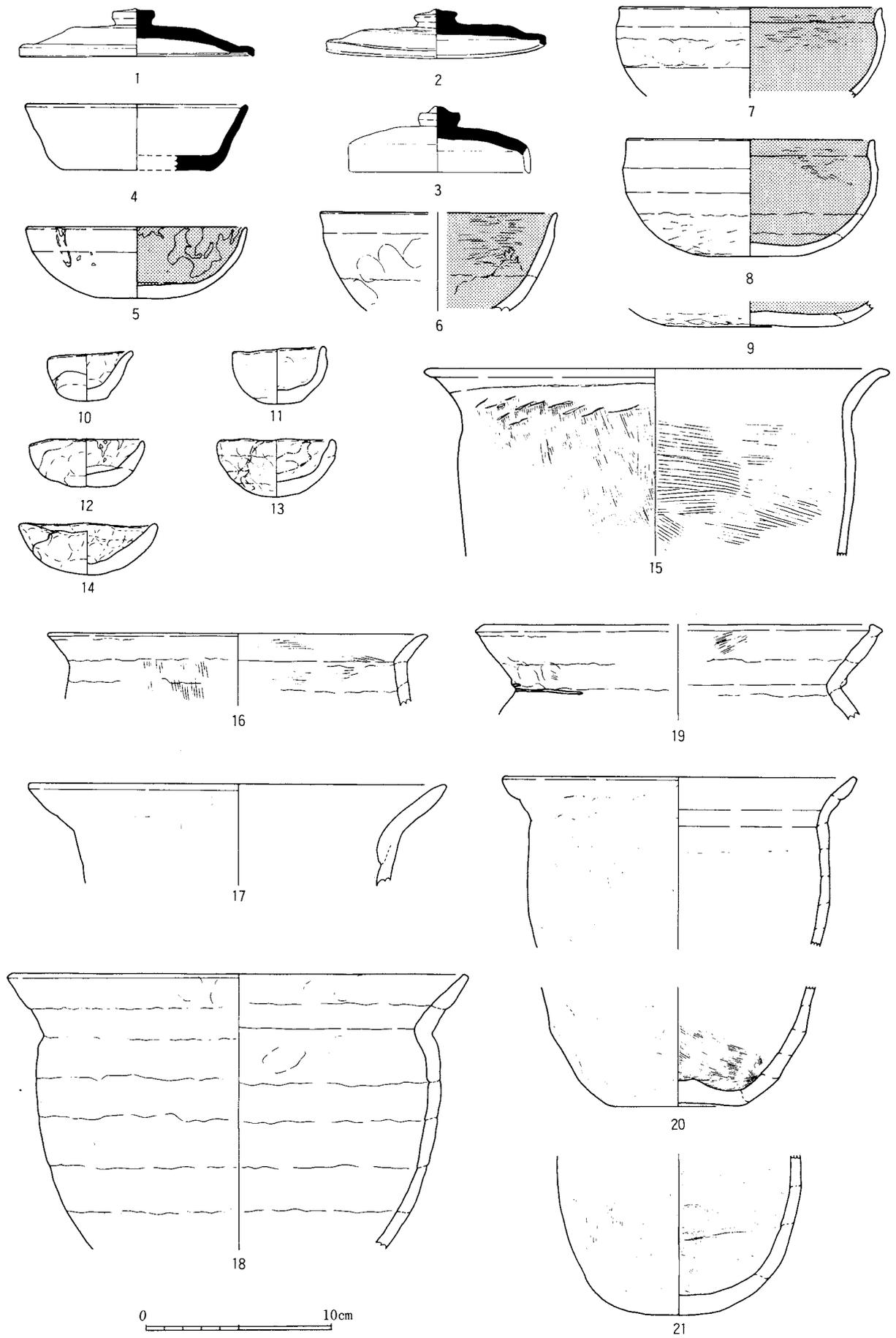
2 D区の土器投棄遺構の調査で検出した粘土紐輪積み痕を残す甕形土器や非ロクロの内黒土師椀などは、これまでの北陸古代土器では知られていない内容を持っている。調査の進展にともない、土器群は丘陵上から投棄されたもので、非ロクロ土師器の甕・壺・椀を主としていることが明らかになった。この土器群の年代観は共伴する須恵器によれば9世紀初頭に比定できるが、加賀や能登では非ロクロの土師器は8世紀前半にロクロ土師器に置き換わっているのが一般的である。柳田村から珠洲市周辺では、非ロクロ土師器が9世紀初頭まで残るということを納得するまで、かなりの時間を要した。

上町和住下遺跡の土器投棄遺構で検出した非ロクロ土師器は椀・甕・壺を主とし、特殊品として手捏ね土器が含まれている。須恵器の比率は低く、圧倒的な量で土師器が多い。このことも、須恵器が卓越する加賀や口能登の様相とは異なっている。これまでに刊行された報告書から、上町和住下遺跡に類似した非ロクロの土師甕と8世紀初頭の非ロクロ土師甕を識別することは困難なので、非ロクロの土師椀を対象に若干の検討をおこなった。上町和住下遺跡以外で、この種の土師椀が出土しているのは、珠洲市飯田町遺跡<sup>(3)</sup>・輪島市時国遺跡<sup>(4)</sup>・能都町真脇遺跡<sup>(5)</sup>・門前町道下元町遺跡<sup>(6)</sup>・穴水町白山橋遺跡<sup>(7)</sup>・中島町ヤトン谷内遺跡<sup>(8)</sup>などである。この種の土師椀も、8世紀初頭の土師椀と法量がやや小型であることを除けば識別は難しく、従来の報告の中でも8世紀初頭の土器群に包括されている事例もある。今後、この種の土器を伴出した遺構や土器様式の年代観などについて、再検討が必要になるとと思われる。上町和住下遺跡では、9世紀後半にロクロ有台椀が出現しているようであり(第33図34・38など)、非ロクロ土師が卓越するのは9世紀初頭までに限られるようである。非ロクロ土師が9世紀初頭まで残存する現象は、輪島市の町野川流域以東から柳田村と珠洲市に顕著に見ることができ、この地域以外では非ロクロ土師は遺存しているものの出土量は比較的少ない。

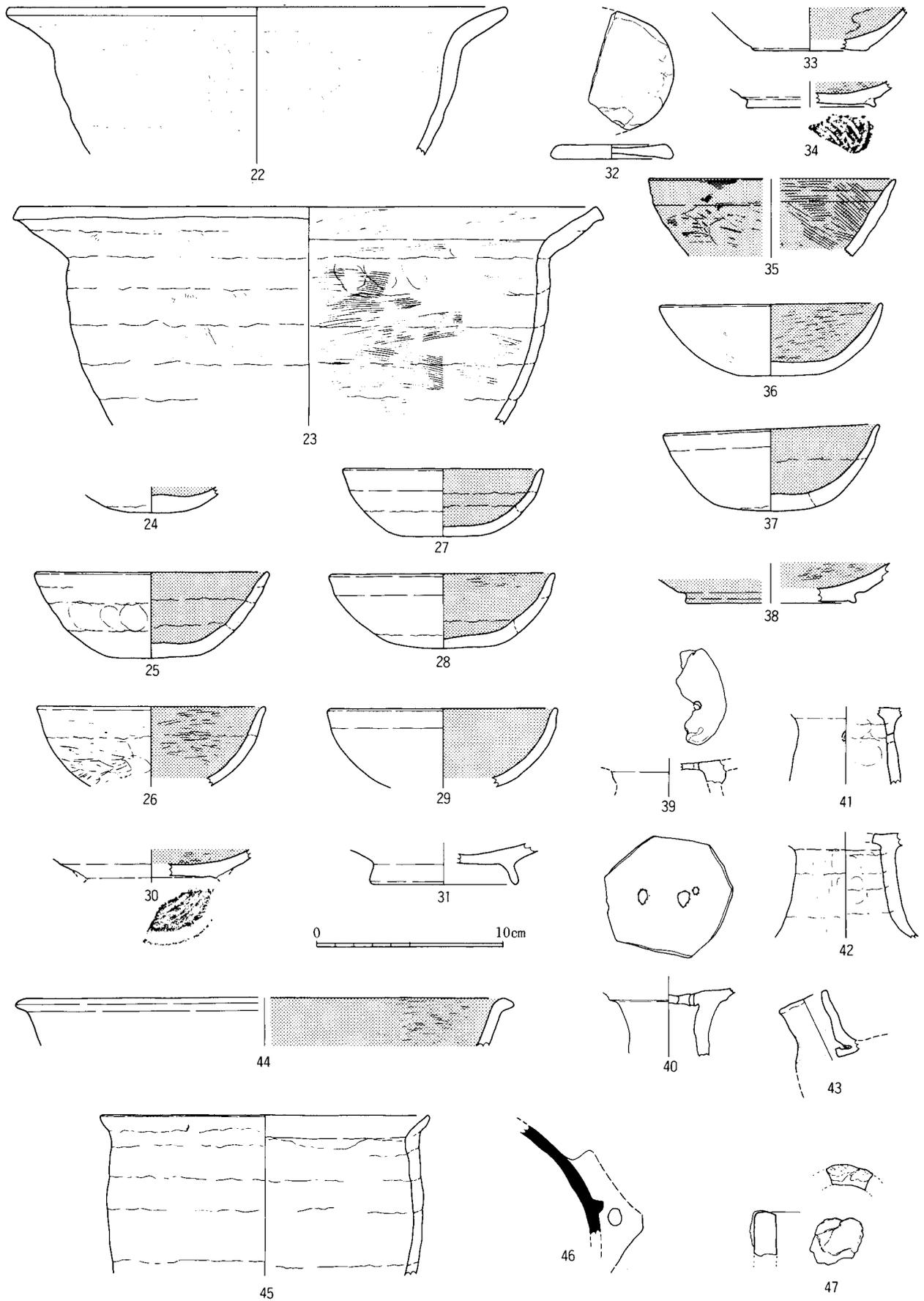
9世紀初頭まで非ロクロ土師が主たる土器組成として遺存する地域は、おおよそ律令時代以来の珠洲郡に含まれている。今回の調査で、旧珠洲郡域の土師器生産技術が能登の他地域とは異なってロクロ技術の導入が遅かったことが明らかになった。上町和住下遺跡で須恵器の占める率が極めて低かったことについては、宗教行為に伴うという特殊な要素や山間部という立地も加味して検討する必要がある、土器投棄遺構の様相が旧珠洲郡域での須恵器構成率を反映していると考えするには躊躇を覚える。今後の資料の蓄積を待ちたい。旧珠洲郡域で非ロクロ土師が9世紀代まで生産・使用されている背景には、東北地方との関連も含めて検討する必要がある。天気の良い日に珠洲市や能都町の富山湾に面する海岸に立つと、立山連峰から親不知海岸に続く地形を見ることができる。今回の報告ではこの問題に深く立ち入ることはできないが、9世紀初頭まで見られる旧珠洲郡域の非ロクロ土師は、親不知海岸の彼方に展開している東北地方の非ロクロ土師との関連で理解すべきものと考えている。

註

- (1) 『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』 石川県立埋蔵文化財センター 1988年。
- (2) 『三井小泉遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年。
- (3) 『飯田町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1992年。
- (4) 石川県立埋蔵文化財センター1997年度調査。担当者安英樹氏の教示を得た。
- (5) 真脇遺跡発掘調査団 『真脇遺跡』 能都町教育委員会 1986年。
- (6) 『門前町道下元町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1985年。
- (7) 西川島遺跡群発掘調査団 『西川島』 穴水町教育委員会 1987年。
- (8) 『ヤトン谷内遺跡』 中島町教育委員会 1995。



第32図 古代の遺物実測図1 (S = 1 / 3)



第33図 古代の遺物実測図2 (S = 1 / 3)

第4表 上町和住下遺跡出土古代土器観察表(1)

No.	器種	グリッド	遺構	層位	遺物No.	外面調整	内面調整	黒色	胎土	焼成	口径	底径	器高	その他
1	坏蓋	2D	土器群		5-4 5-9	ロクロナデ	ロクロナデ	なし	長石粒多い	明灰褐色	12.1	6.5	2.5	
2	坏蓋	2D	土器群	上層	6-3	ロクロナデ	ロクロナデ	なし	長石粒多い	灰褐色	12	8	1.7	ゆがみあり
3	葉蓋	2D	土器群			ロクロナデ	ロクロナデ	なし	精良	堅い		9.8		外面降灰
4	須恵器坏	2D	土器群		5-7	ナデ	ナデ	なし	砂粒	灰色	11.6	8.1	3.6	
5	碗	2D	土器群		5-6	磨き	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	11.8	5	4	内外面に油煤痕
6	碗	3E		包含層		指押さえ→磨き	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	12.8			内面油煤付着
7	埴	2E	土器群	下層		磨き	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	13.9			
8	埴	2E	SK39			体部下半削り	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	13.1	6	6.4	
9	碗	2D	土器群	下層	東326	削り	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色		9.5		
10	手捏坏	2D	土器群	西区上層		指押さえ	指押さえ	なし	砂粒	暗黄褐色	4.5	2	2.6	口縁に油煤痕
11	手捏坏	2E	SX01			指押さえ	指押さえ	なし	砂粒	灰褐色	5	2	3	内外面炭化物付着
12	手捏坏	2D	土器群		5-10	指押さえ	指押さえ	なし	砂粒	明黄褐色	6.1	3	2.6	口縁に油煤痕
13	手捏坏	2D	土器群			指押さえ	指押さえ	なし	砂粒	灰褐色	6	2	3.1	内外面油煤付着
14	手捏坏	2D				指押さえ	指押さえ	なし	砂粒	暗黄褐色	7.3	3	2.7	全体に油煤痕
15	甕	2D	土器群		6-3	縦ハケ	横ハケ	なし	砂粒	暗黄褐色	25			
16	甕	2D	土器群 (雨畦畔)			縦ハケ	横ハケ	なし	砂粒・海綿骨針	橙色	20.3			
17	甕	2D	土器群		5-1	指ナデ	頸部は横磨き・ 他はナデ	なし	砂粒	赤灰色	22.6			
18	甕	2D	土器群		6-2	指押さえ→ナデ	ナデ	なし	砂粒・海綿骨針	橙色	24.5			
19	甕	2D	SK47			磨減	ハケ	なし	砂粒	橙色	20.8			
20	甕上半部	2D	土器群		8	指ナデ→ハケ	ハケ	なし	砂粒	赤褐色	18.5			
20	甕底部	2D	土器群		8-1	指ナデ→ハケ	ハケ	なし	砂粒	赤褐色		7		
21	甕底部	2D	土器群		5	縦ハケ・底部は 指押・ナデ	ハケ	なし	砂粒	赤褐色		7		
22	埴	2D	土器群		9	指ナデ	指ナデ	なし	砂粒	赤褐色	27			
23	埴	2D	土器群		4-2	指押さえ→ ナデ・ハケ	横ハケ	なし	砂粒多い	灰褐色	32			
24	碗	4E		包含層		磨減	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色		4		
25	碗	4E		包含層		磨き・体部中位 を指押さえ	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	12.3	5	4.7	
26	碗	5E	115P			ナデ/下半を 削り	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	12.1			
27	碗	5E	115P			剥落観察不能	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	10.7	5	3.5	
28	碗	5E	114P			口縁付近：横ナ デ/下半：ナデ	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	12	5.5	4	内部底面に 布目付痕
29	碗	5E		包含層		磨減	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	12.2			

(注)量の単位: cm

第5表 上町和住下遺跡出土古代土器観察表(2)

No.	器種	グリッド	遺構	層位	遺物No.	外面調整	内面調整	黒色	胎土	焼成	口径	底径	器高	その他
30	高台碗	5G		盛土層		ナア	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色		7		
31	高台坏	5G		盛土層		ナア	磨き?	なし	砂粒・海綿骨針	橙色		7.7		
32	円盤土製品	6E		包含層		ナア	ナア	なし	砂粒・海綿骨針	橙色				
33	碗	5D		包含層		磨き	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色		5.9		
34	高台碗	6E		包含層		磨き?	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色		6.7		底部内面に付着物
35	碗	5E.6E				上半:ナア 下半:削り	磨き	内面	長石・石英・ 雲母粒多い/ 海綿骨針多い	灰色				
36	碗			包含層	1	剥落観察不能	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	11.6	4.5	4	
37	碗	7E		包含層		磨減	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色	11.3	5	4.75	
38	高台碗	7D		包含層		磨き	磨き	内外両面	砂粒・海綿骨針	橙色				
39	多口瓶?	7E		包含層		ナア	ナア	なし	砂粒	橙色				穿孔 ニカ所
40	多口瓶	7F		包含層		指頭圧痕	指頭圧痕	なし	砂粒	橙色	2.6			
41	高坏	7F		包含層		磨減	ナア	なし	砂粒・海綿骨針	橙色				
42	高坏	2E		包含層		磨き	ナア	なし	砂粒	橙色				8トレンチ
43	多口瓶	7E		包含層		ナア	ナア	なし	砂粒	橙色				
44	鉢	7D		包含層	7	磨き	磨き	内面	砂粒・海綿骨針	橙色				
45	壺	7E		包含層		ナア	ナア	なし	砂粒	橙色	17.3			
46	双耳瓶	7E		包含層		ナア	ナア	なし	砂粒	橙色				
47	ふいご羽口	7D						なし	石英粒多い	赤褐色				

(法量の単位: cm)

・ 蓋の底径欄の数値は天井部径を表す  
・ 土器群は土器投棄遺構の略称である

## 第6章 近世以降の遺構と遺物

### 第1節 遺 構

#### (1) 土坑 (第34図)

##### 第1号土坑

2 H区で検出した。検出時の観察では、地山の周囲を炭が円形に囲んでいるかに見えた。径70cm前後の略円形を呈し、深さは約30cmを測る。第2層には火葬骨片が大量に見られた。炭を敷き詰めた後、骨を納め、地山質土の第1層でふさいだとみられる。

##### 第2号土坑

2 H区で検出した。土坑の名を付したが溝状の遺構であり、長さ約370cm、最大幅約80cmを測る。平面図には表現していないが、底部には浅く溝が掘られていた。坑内からは多くの炭化木、焼土塊が出土し、壁面には被熱による赤化が見られた。骨片等は検出されていないものの、その形態から、通風孔を持つ火葬遺構の可能性が高い。

##### 第3号土坑

2 H区で検出した。平面形は不定形で、深さは約30cmを測る。第1号土坑同様に、炭を敷き詰めた上に少量の火葬骨片を入れ、地山質土で埋められていた。

##### 第4号土坑

1 H区で検出した。長軸170cm、短軸80cm、深さ約20cmを測る。第1層から焼土、炭とともに比較的形をとどめた火葬骨を多く検出した。被葬者は青年或いは女性と推定されている(第7章第3節参照)。

##### 第5号土坑

2 H区で検出した。平面形は不定形で、深さは約15cmを測る。覆土に炭化物が含まれていたが、骨片は検出されなかった。

##### 第6号土坑

2 I区で検出した。径約40cmの円形で、深さは約8cmと浅い。炭化物、骨片は検出されていない。

##### 第32号土坑

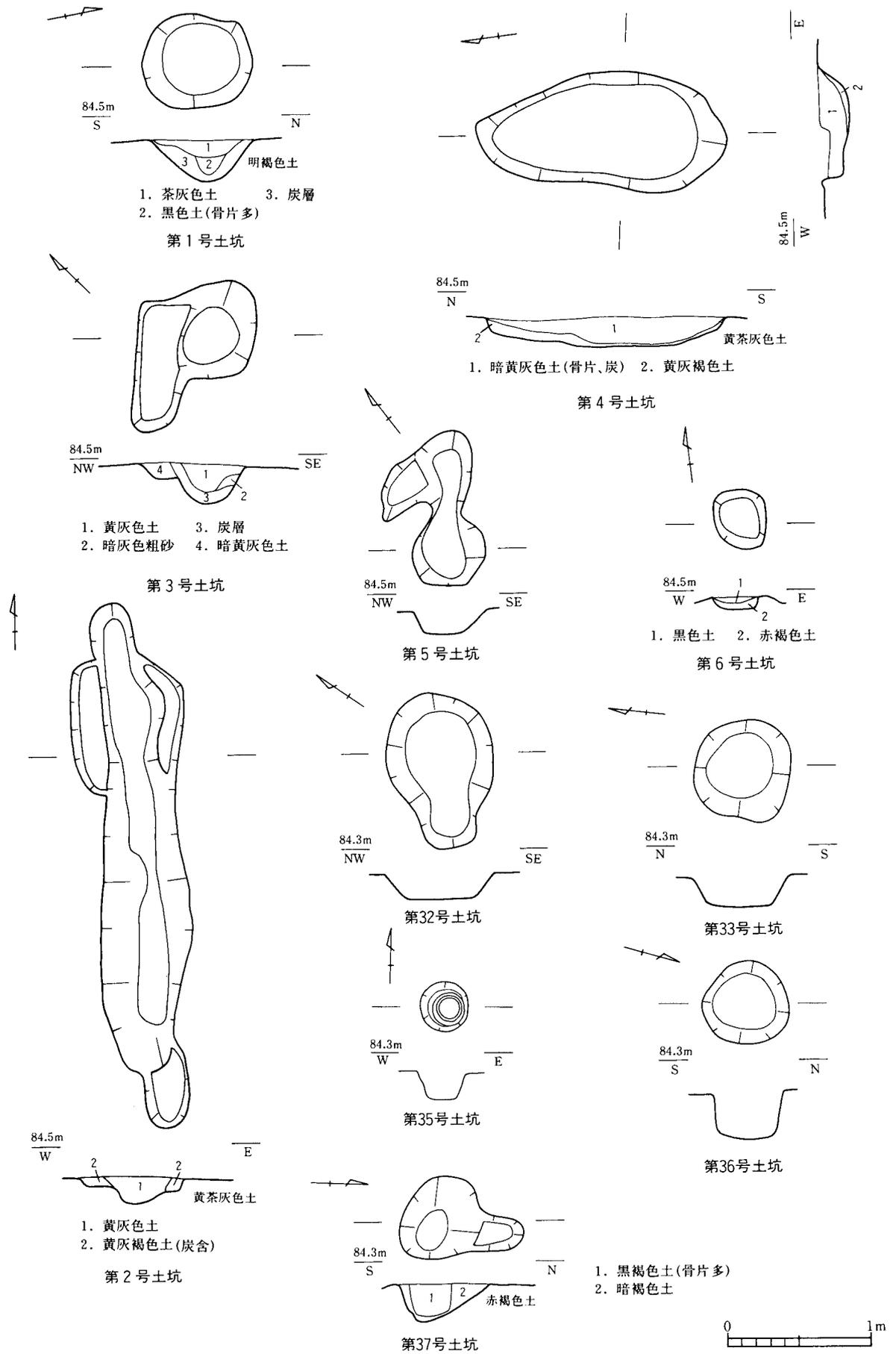
2 H区で検出した。長軸110cm、短軸74cmの楕円形状を呈し、深さは約20cmを測る。土層図は示していないが、炭を敷き詰め、地山質土でふさぐ形態の土坑である。炭層の上面から火葬骨片が多量に出土した。被葬者は成人男性と推定されている。

##### 第33号土坑

2 H区で検出した。径70cm弱の円形で、深さ約22cmを測る。炭を敷き詰め、その上面から火葬骨片が多量に出土した。被葬者は未成年者と推定されている。

##### 第35号土坑

2 I区で検出した。径35cm前後の略円形を呈する。深さは検出面から20cmを測るが、まず甕を検出し、その後掘り方が見えるまで掘り下げたため、本来は30cmを超えていたと思われる。甕には多量の火葬骨片が充填されていた。火葬骨が出土した土坑は多いが、蔵骨器の出土は本土坑のみである。被葬者は成人男性と推定されている。



第34图 近世の土坑実測図 (S = 1 / 40)

### 第36号土坑

2 H区で検出した。検出時の観察では、第1号土坑同様に、地山の周囲を炭が円形に囲んでいた。径60cmの円形で、深さは30cmを測る。土層図は示していないが、壁面に炭を敷き詰めた上に地山質土を敷き、中心部に火葬骨を入れ、地山質土で埋められていた。骨片の集中した様子から、何らかの容器に納められていた可能性も考えられる。被葬者は成人と推定されている。

### 第37号土坑

2 I区で検出した。平面形はダルマ状を呈し、深さは約26cmを測る。第1層には多量の火葬骨片が充填されており、その状態から曲物等の容器に納骨されていた可能性が高い。被葬者は成人男性と推定されている。

### 第46号ピット

2 H区で検出した。図示はしていない。小ピットであるが、多量の火葬骨片が検出されており、観察から、何らかの容器に納骨された可能性が想定された。被葬者は成人と推定されている。

## (2) 炭窯跡

### 第1号炭窯跡 (第35図)

3 H区で検出した。平坦面から斜面への変換点に自然地形を利用した形で設置されている。燃烧室下端の最大幅は約300cm、焚口の下端幅約50cmを測る、平面形がいちじく型を呈する改良窯である。煙道からは割れた土管が出土した。床面下には煙道付近から幅25~50cmの排水溝が検出された。それは焚口奥で二股に分かれ、一方は焚口西側の土坑へ、もう一方は東側の土坑を経て更に北東方向へ続いている。焚口前の北西土坑の覆土は炭、焼土を含む暗褐色を主体とし、赤子頭大の礫が底部付近に見られた。東側の土坑は、地山質の明褐色粘土を主体とする。この土坑の南東よりには焚口の閉塞に用いたとみられる角石が斜面に立て掛けられていた。普通ならば、石は高価であるため、窯の移動とともに持って行くものであるが、本炭窯跡では角石がそのまま残っているため、その職人の最後の窯であった可能性が高い<sup>(1)</sup>。

### 第2号炭窯跡 (第36図)

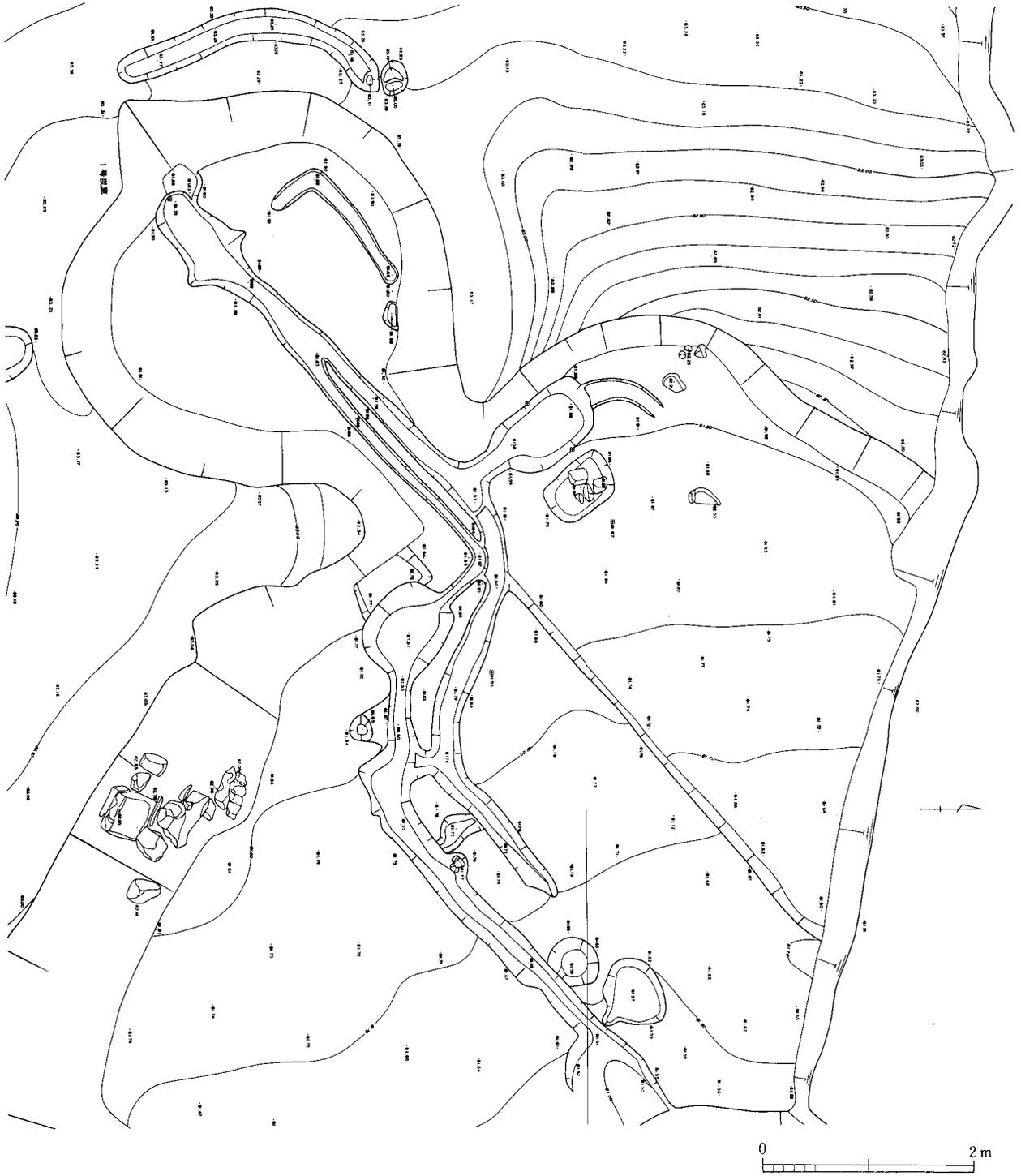
調査区の谷を挟んだ東側斜面にて検出した。本来は調査区外であったが、路線内に明瞭な窪みが認められたため、調査を行った。第1号炭窯同様、いちじく型の改良窯である。窯本体の周囲には、覆い屋の痕跡かと思われる段も検出している。燃烧室の下端幅は約210cm、焚口下端幅は40cmを測る。床面下には排水溝が約40cmの幅をもって煙道から焚口まで東西に流れ、南に方向転換して土坑の西側をかすめて続いていた。焚口北側の土坑からは礫が多く出土した。

本炭窯跡からは磁器碗が出土しており、その操業年代は昭和期と推定される。

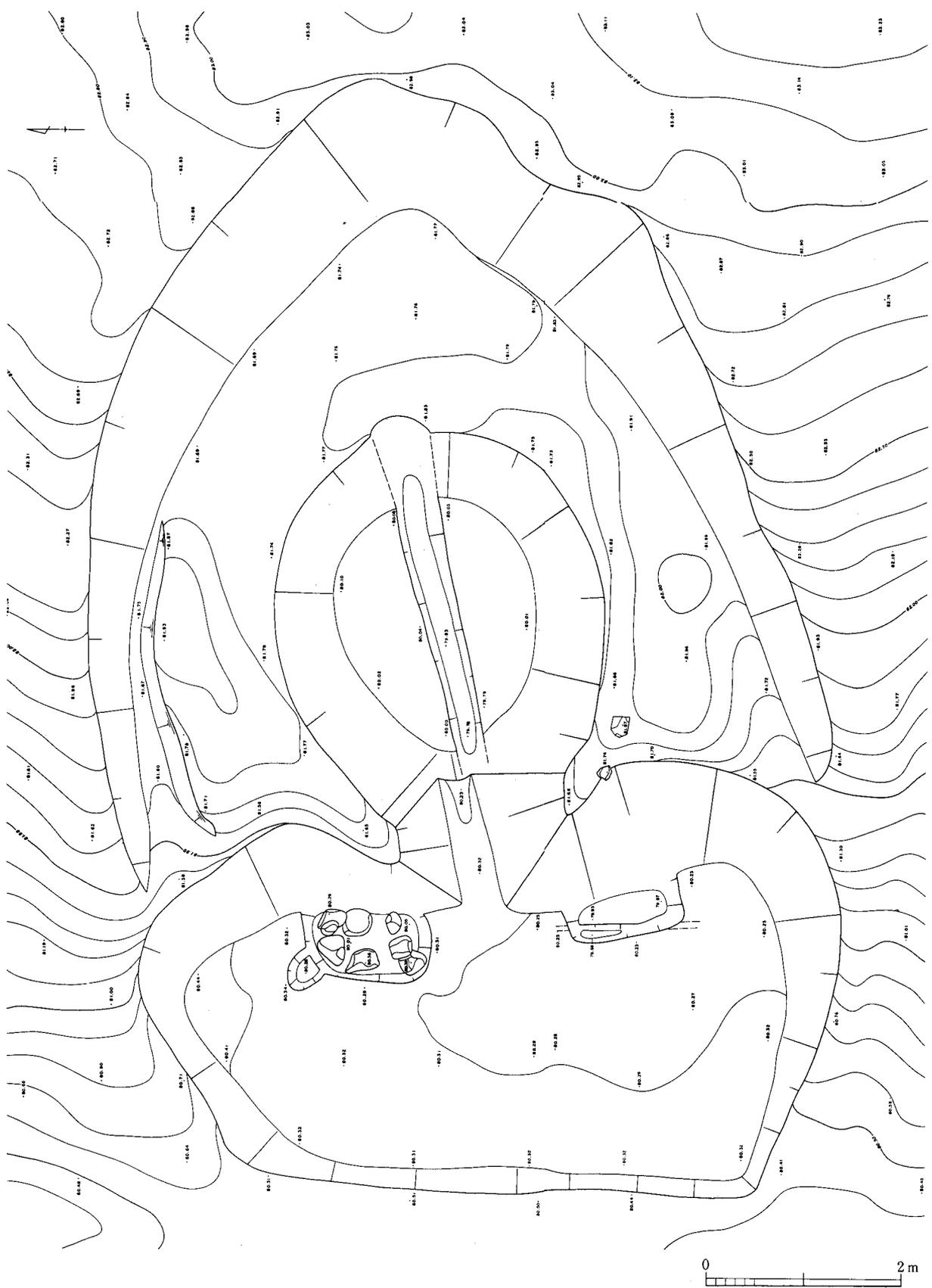
## 第2節 遺物 (第37図)

1は第35号土坑出土の蔵骨器である。ほぼ完形であり、口径15.1cm、器高26.9cmを測る肥前系陶器の小甕である。底部内面には粘土塊を円形に叩き延ばした痕跡が、体部内面には粘土紐の巻き上げ痕と格子目叩きが明瞭に観察される。器表には薄く釉が掛けられるが、口縁帯の内側は、8mm程の幅で輪状に釉が掻き取られている。これは、合わせ口にして重ね焼きするためとみられる。17世紀後半以降の製品である。

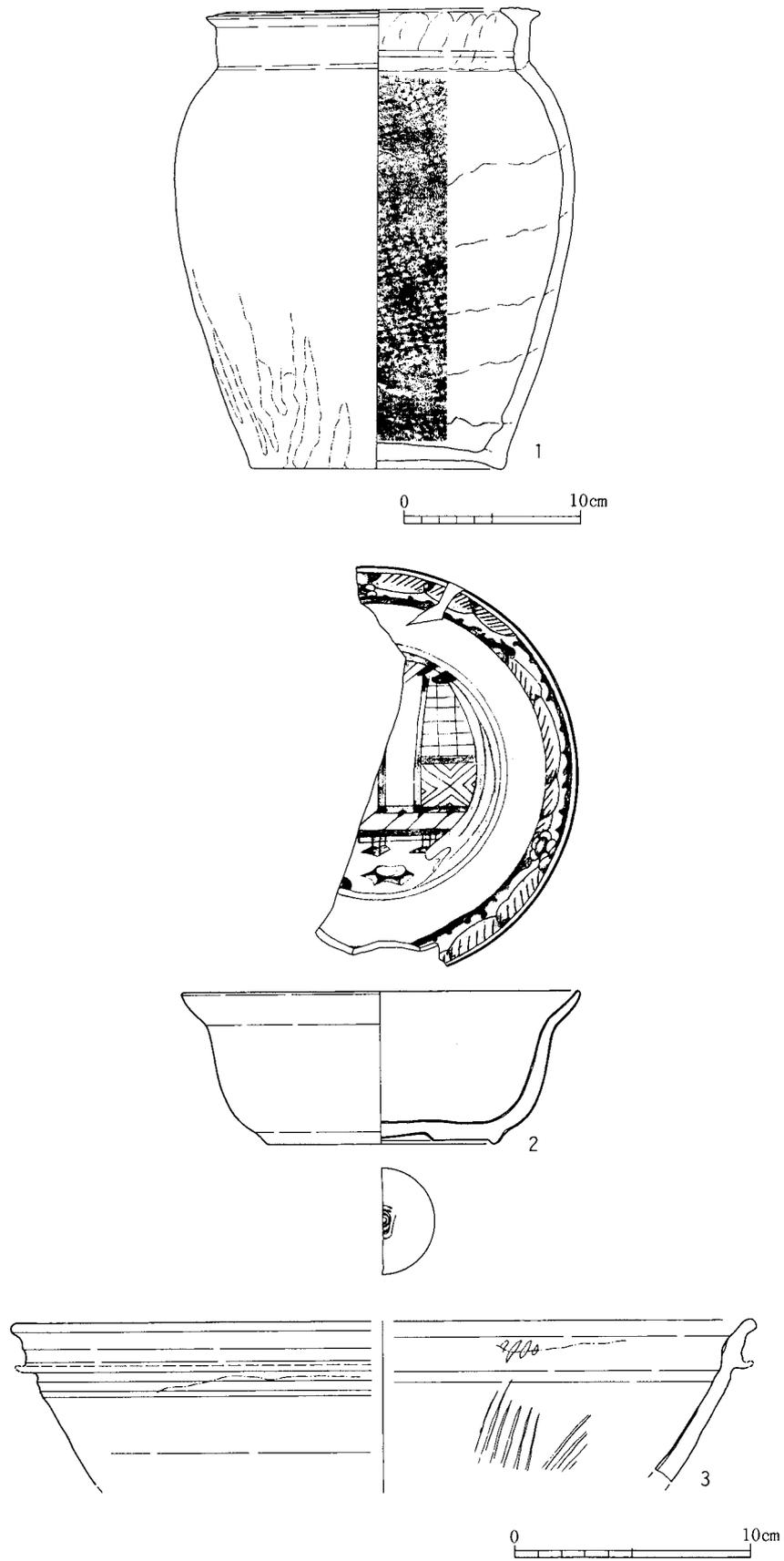
2は8 E区の表土中から出土した。口径17.0cm、器高6.6cmを測る、青磁染め付けの鉢である。底部は蛇ノ目凹型高台とし、高台内には渦福様の裏銘が見られる。3は5 E区包含層から出土した。口径が約30cmに復元される摺鉢である。胎土は暗赤褐色を呈して焼き締まり、口縁部内外に鉄釉が施される。



第35图 第1号炭窯跡实测图 (S = 1 / 60)



第36图 第2号炭窑跡实测图 (S = 1 / 60)



第37図 近世の遺物実測図 (1はS = 1 / 4, 2、3はS = 1 / 3)

### 第3節 まとめ

以上の土坑、ピットは、蔵骨器、火葬骨片等の出土から、墓、または火葬後の片付け穴と判断される。骨片の出土量には多少があるが、意図的に炭を敷いたと見られる土坑については、炭の湿気を防ぐ機能を意識していたとみられることから、骨片が少量であれ、墓である可能性を考えたい。

第1～6号土坑が上層、第32、33、35～37号土坑、第46号ピットが下層での検出であり、これらは明らかに時期差が想定されるが、平面的にはほぼ重なりを見せない。このことは先行して築造されていた墓が意識された結果であり、調査では明らかにできなかったが、土饅頭或いは卒塔婆などの標識の存在を想像させる。また、これらの土坑一帯は周囲よりも一段高く、固く締まっていたことから、土壇状のものが築かれていた可能性もあろう。

火葬施設として第2号土坑を考えているが、壁面はさほど焼けておらず、繰り返し使用されたとは考え難い。表土除去後に一帯から被熱したと見られる30cm大の石が数個検出されており、それらを組んで火葬施設としたことも考えられよう。

これらが築かれた時期は、出土遺物が蔵骨器一点のみであり、断定はできないが、それが17世紀後半以降の製品であるため、17世紀後半以降の墓と推定される。

墓は調査区外の西向きの斜面近くにまで広がっていると見られ、集落背後の丘陵上に墓地が築かれたと判断される。この近世墓地の東側に現在でも墓が3基存在する。それは、墓の前面に位置する民家の墓地であるが、その家の当主はかつて母親から、近世墓地が検出された辺りには立ち入ってはいけないと言われていたという。墓があるという事実はいつの頃にか忘れ去られているものの、墓を持つ特殊な場の概念は受け継がれているようであり、墓地が営まれたのはさほど遠くない過去と判断されよう。

#### 註

- (1) 浜野伸雄氏から御教示いただいた。































## 第8章 まとめ

### (1) 縄文時代

今回の調査では、中期初頭の新保式・中期前葉の新崎式・後期中葉の加曾利B 1式並行の三時期を認識できた。検出した主な遺構と内容を、以下に記す。

時期	区分	遺構	遺構数	内容
中期	初頭	土坑	2基	陥とし穴
		ピット	1基	
	前葉	住居跡	3棟	2号住居：焼失住居・石器製作 床面にトチ・クルミ
		土坑	7基	52号土坑：トチ・オニグルミ 62号土坑：コナラ・トチ
		ピット	多数	
後期	中葉	土坑	2基	28号土坑：トチ・クリ 44号土坑：トチ・クリ

中期初頭には陥とし穴が設けられて、狩り場になっていたものと思われる。中期前葉にはいると、二・三棟を単位とする小規模集落が形成され、住居内では周辺から採集してきた粘板岩や玉髓で石器を製作していた。また、床面から検出したトチ・オニグルミなどの種実は、当時の食生活の一端を示している。その後、人々の活動痕跡は見えなくなり、後期中葉になって再びトチ・クリを主とする種実を埋納した土坑を検出している。土坑内の種実は全て炭化しており、44号土坑では石器剥片も伴出している。この出土状態から、トチ・クリなどの食糧を貯蔵した土坑と単純に理解することは難しい。何らかの宗教的行為の可能性も含めて、背景を考える必要がある。後期中葉の住居跡は検出できなかったが、今回の調査区は丘陵の可住域をほとんど含んでおり、調査区外に当該時期の住居跡が存在している可能性は少ない。

### (2) 古代

今回の調査では、丘陵中央部の建物推定地と東西両側斜面に土器を投棄した遺構を検出している。今回検出した遺構や遺物から、9世紀初頭の和住下丘陵の上で小規模な山林修行が行われていたことが推測できる。また、検出した土器は東北地方との関連を推測させる非ロクロ製作土器で、平安時代初頭の旧珠洲郡域が東北地方と文化的に共通するものを持っていたことを示唆している。

### (3) 近世以降

火葬炉1基、火葬骨を埋納した土坑10基、火葬骨埋納ピット1基を検出している。この内の35号土坑からは、肥前系陶器の蔵骨器を検出した。また、調査区の北側と西側で炭焼窯を2基検出し、調査を行った。

今回の調査では、柳田村天坂をはじめ遺跡周辺の皆さんにご協力をいただいた。また、現地説明会の案内や様々なことで、柳田村教育委員会のご協力を得ることができた。山本直人・山口敏の両氏には、ご多忙中にもかかわらず玉稿を執筆いただいた。調査や報告書刊行の過程で、多くの方々にご協力やご指導をいただいたことに感謝します。

# 写真図版





上町和住下遺跡の位置 (○印)



調査区俯瞰（西から）



調査区俯瞰（東から）



調査前風景



表土除去作業



表土除去状態



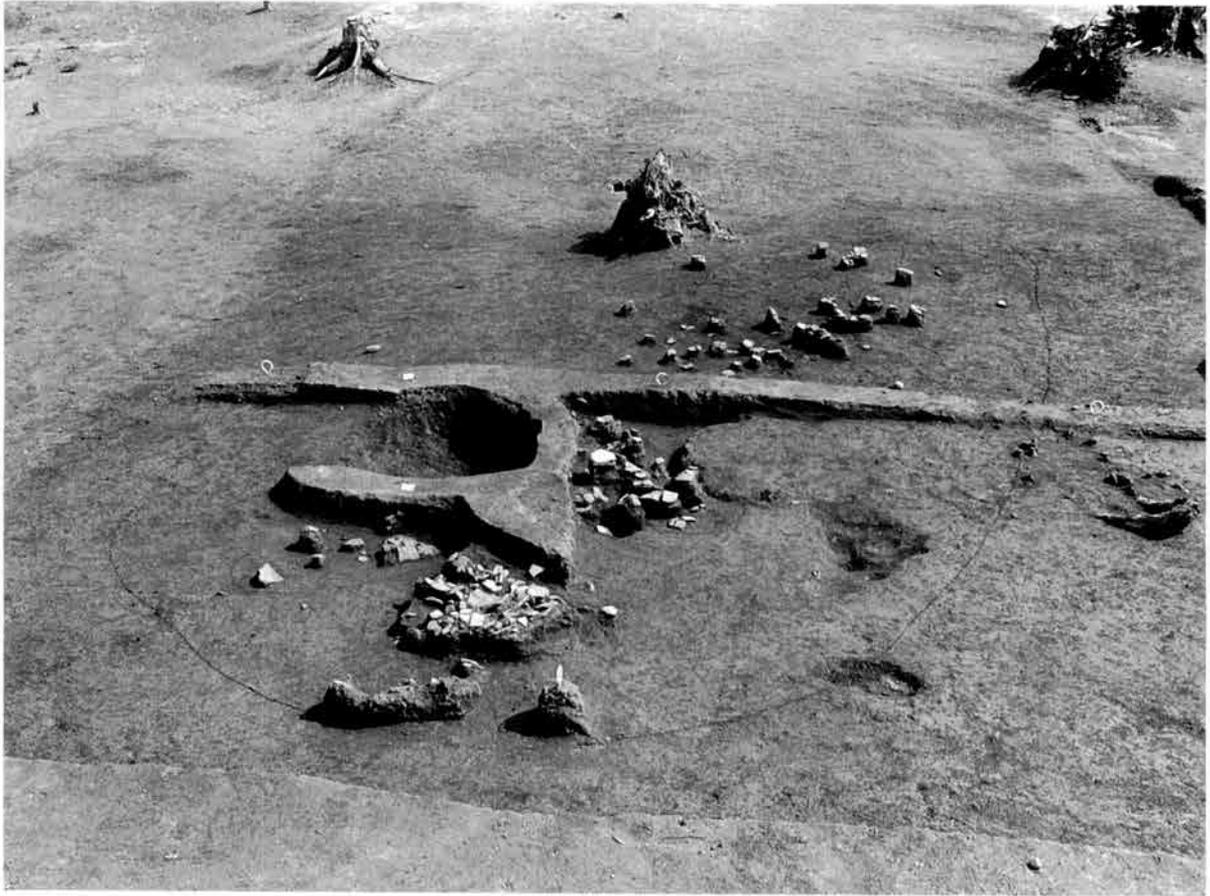
調査区西側完掘状態



調査区東側完掘状態



実測風景



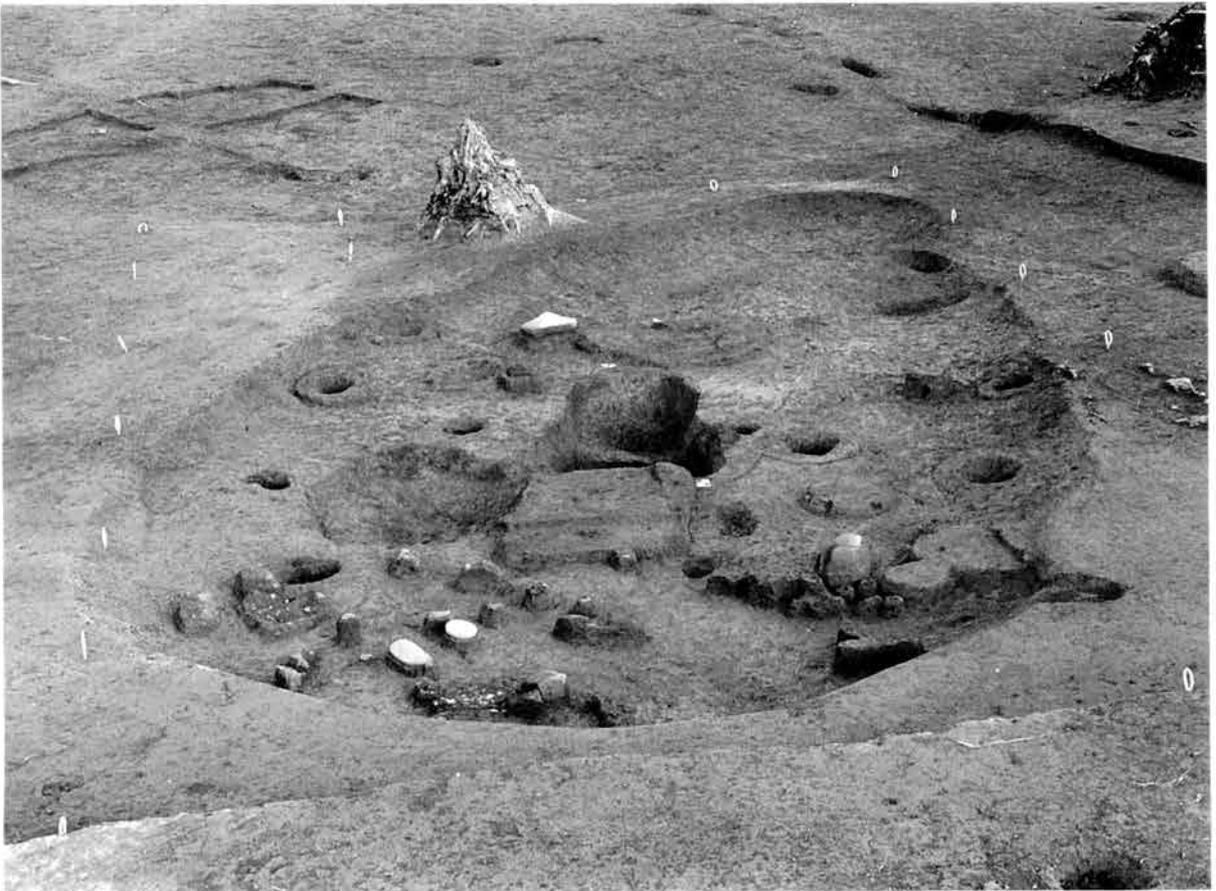
第2号竪穴住居址検出状態(南から)



同上層遺物出土状態(北から)



第2号竪穴住居址作業風景



同床面検出状態(西から)



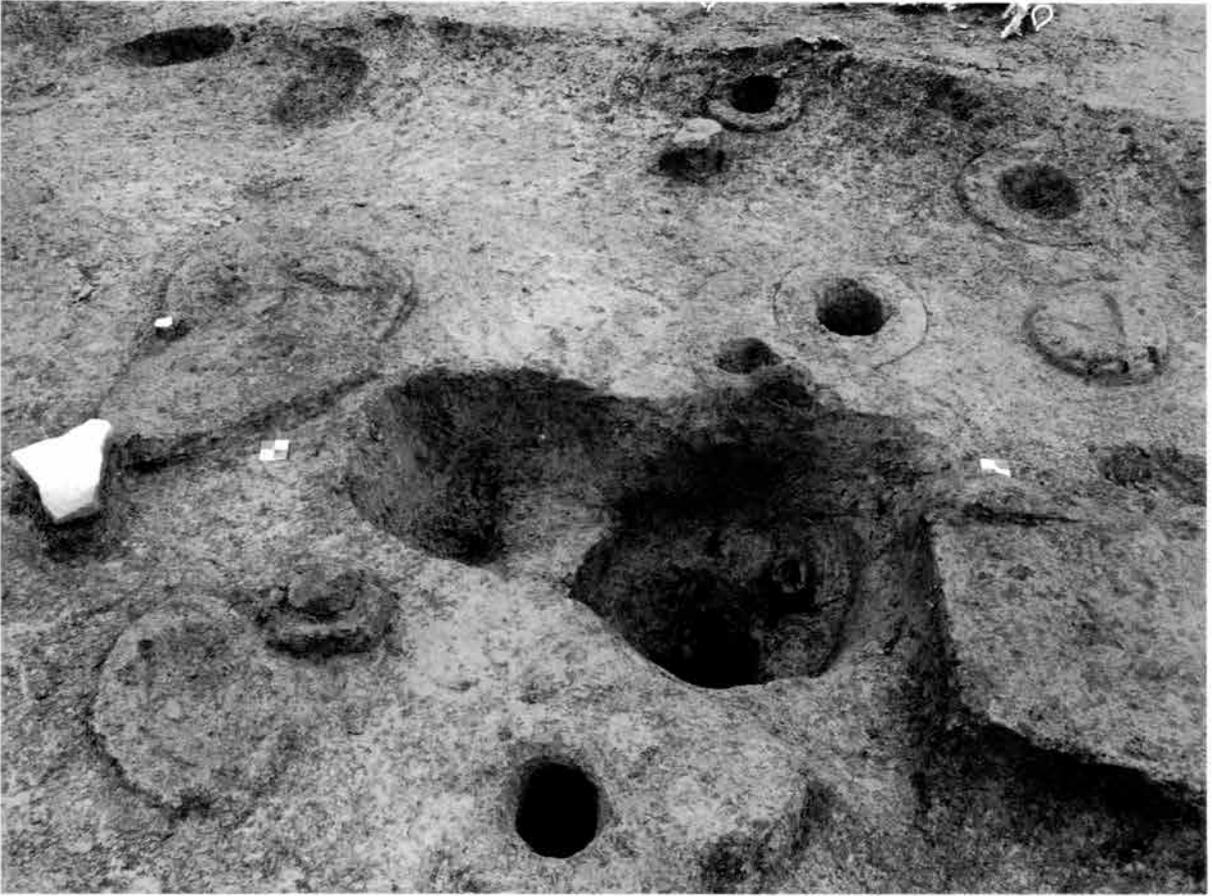
第2号竪穴住居址遺物出土状態(北東から)



同フレイク群



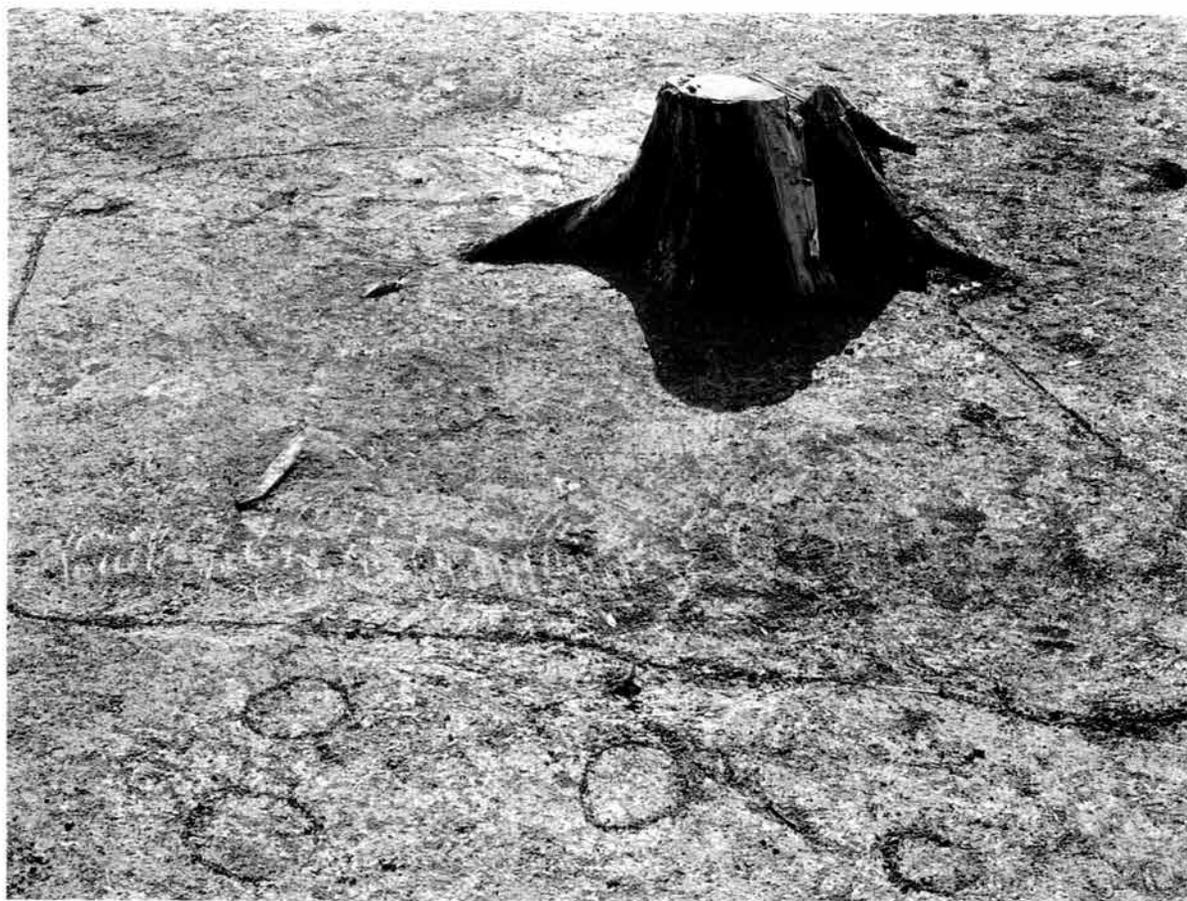
同石鏃出土状態



第2号竖穴住居址中央部ピット(北から)



同完掘状態(北から)



第3号竖穴住居址検出状態(北東から)



同完掘状態(南東から)



第4号竖穴住居址検出状態(南西から)



同作業風景



第4号竪穴住居址完掘状態(北西から)



第17号土坑完掘状態(西から)



第28号土坑検出状態(東から)



同出土炭化種実(北から)



同完掘状態(東から)



第44号土坑遺物出土状態(東から)



同(北西から)



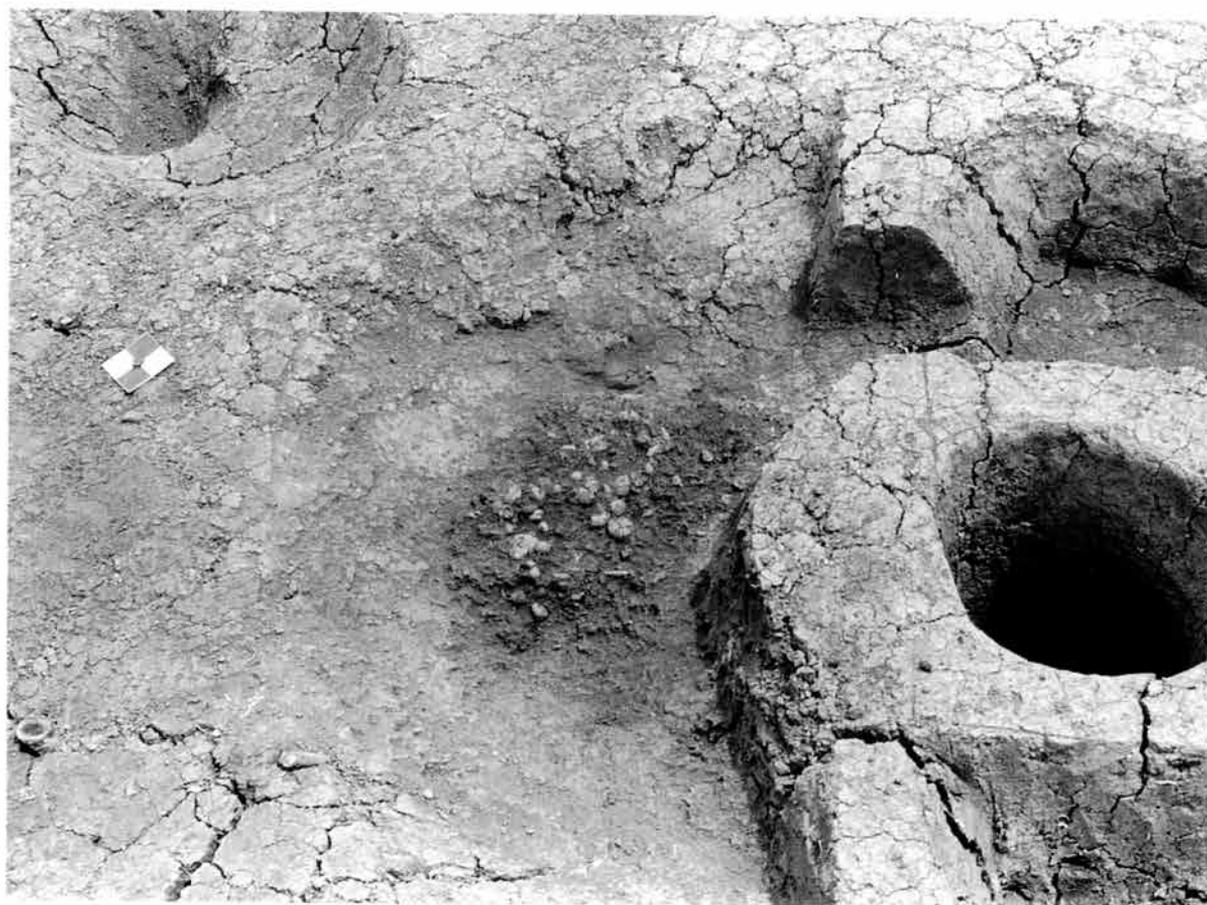
同完掘状態(北から)



第40号土坑遺物出土状態(南西から)



第48～50号土坑完掘状態(北西から)



第62号土坑炭化種実出土状態(西から)



同近撮



土器投棄遺構遺物出土状態(南から)



同



土器投棄遺構遺物出土状態



第114号ピット内黒土師器出土状態(南から)



近世土坑検出状態(東から)



同完掘状態(東から)



第2号土坑完掘状態(東から)



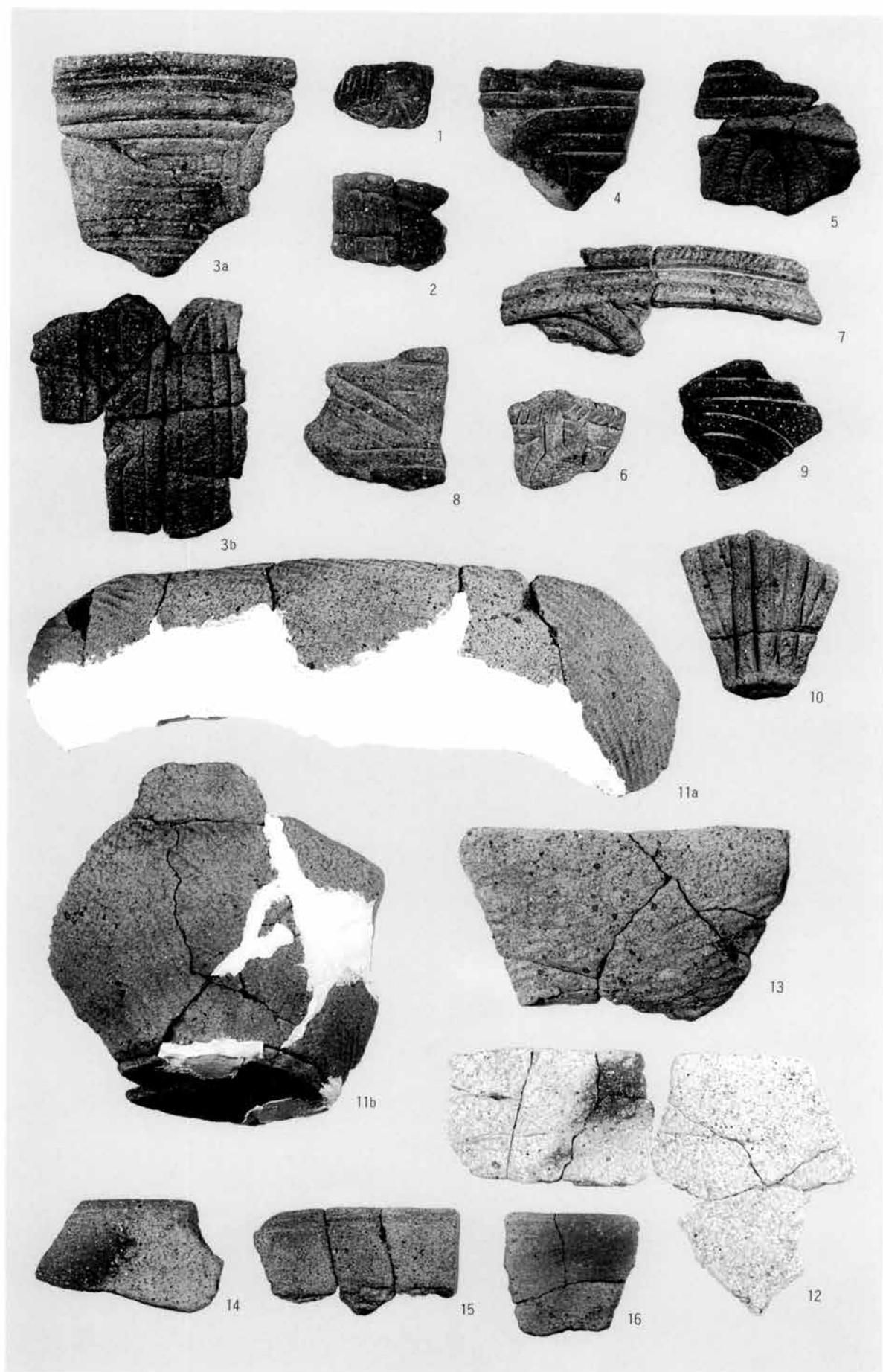
第46号ピット火葬骨出土状態



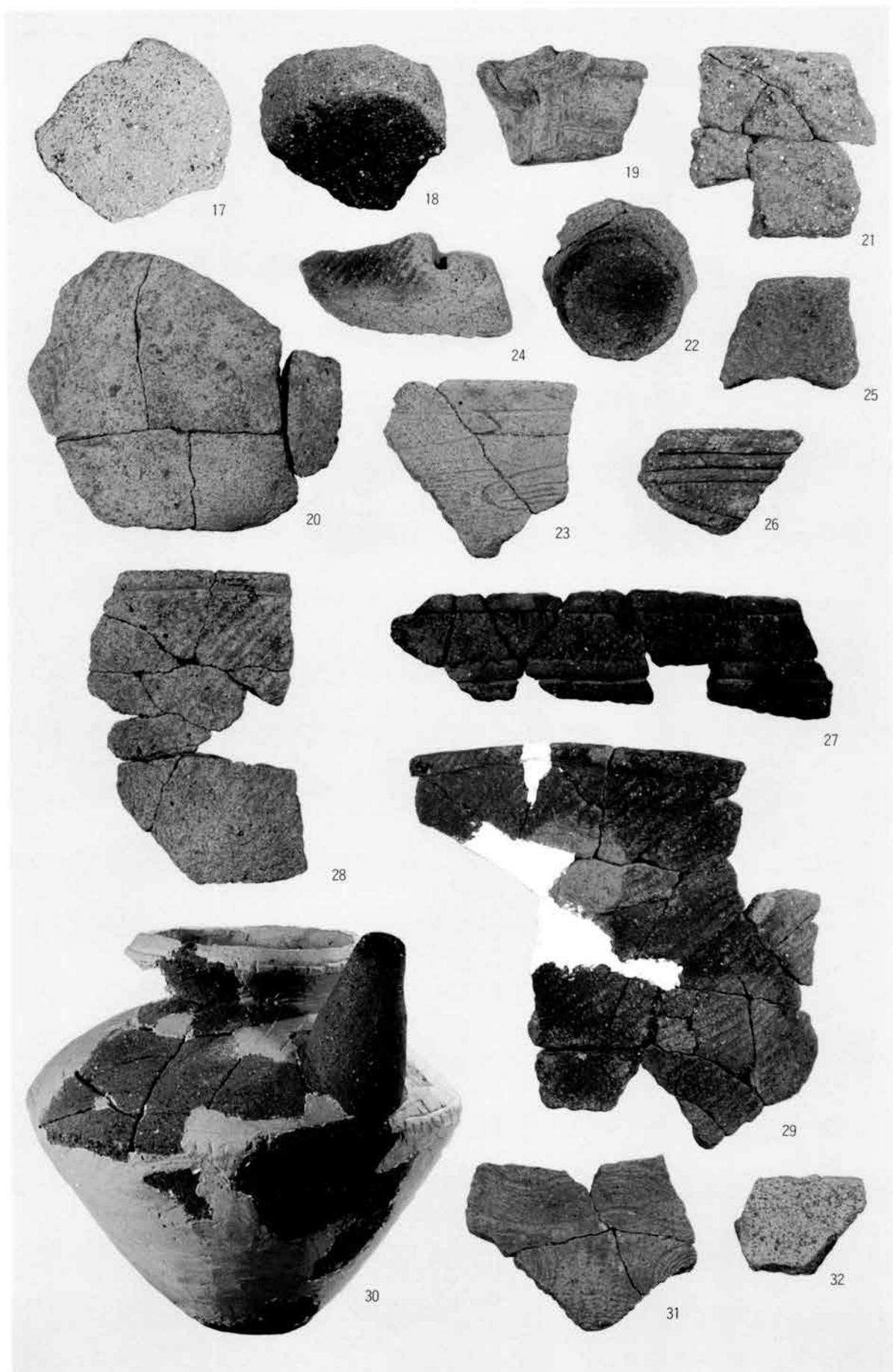
第1号炭窯跡完掘状態(西から)



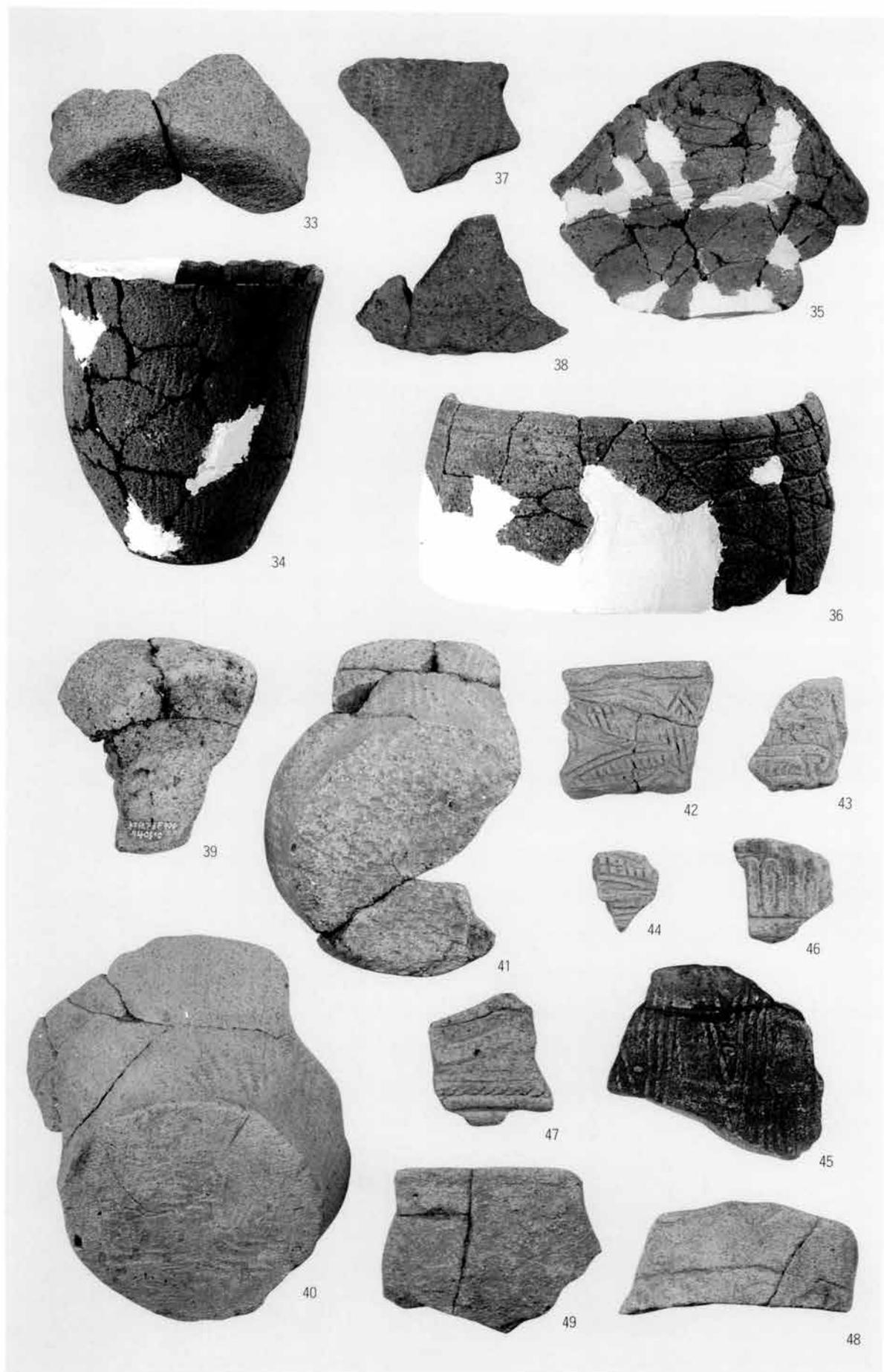
第2号炭窯跡完掘状態(南西から)



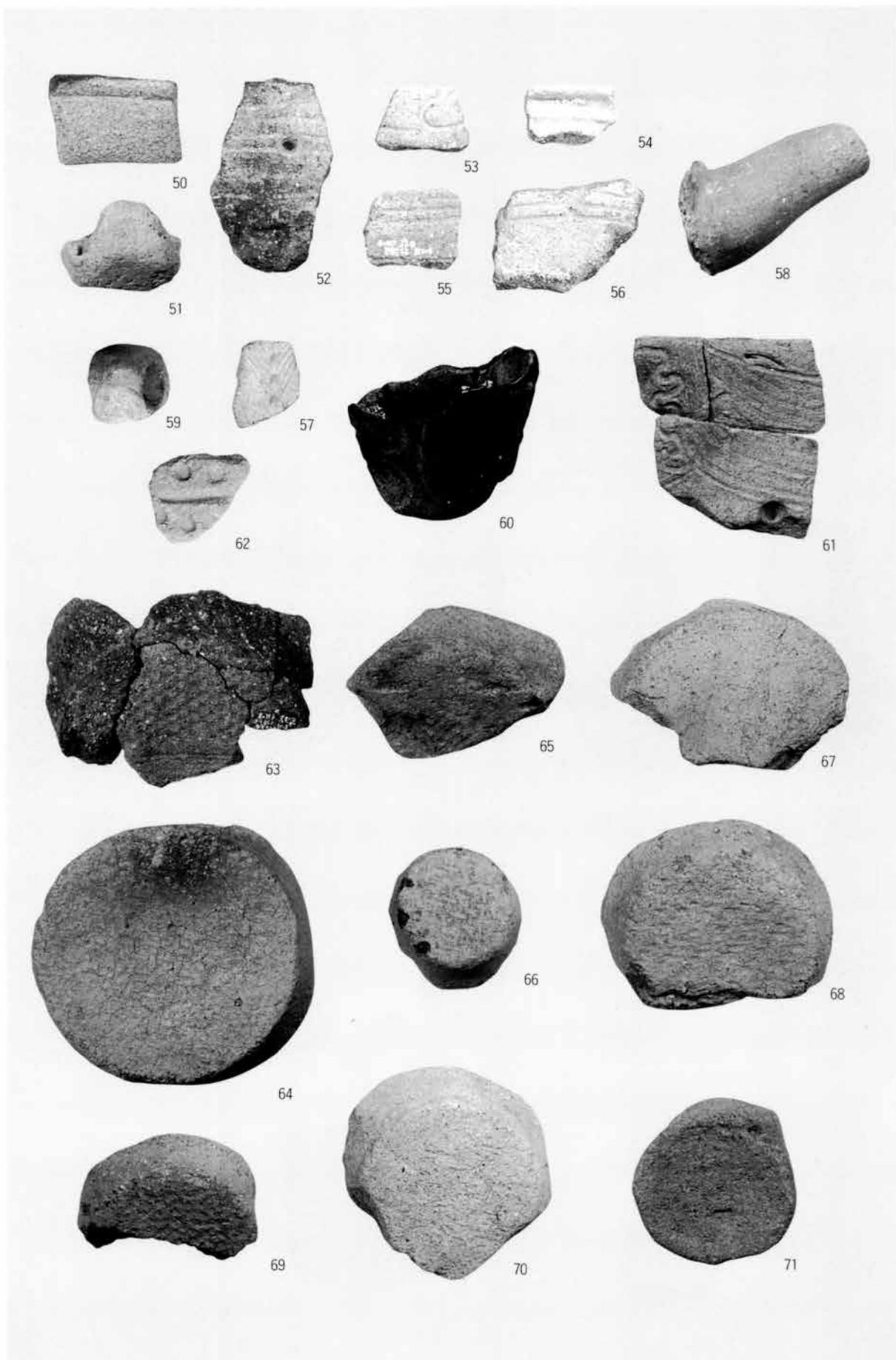
縄文時代の遺物 1



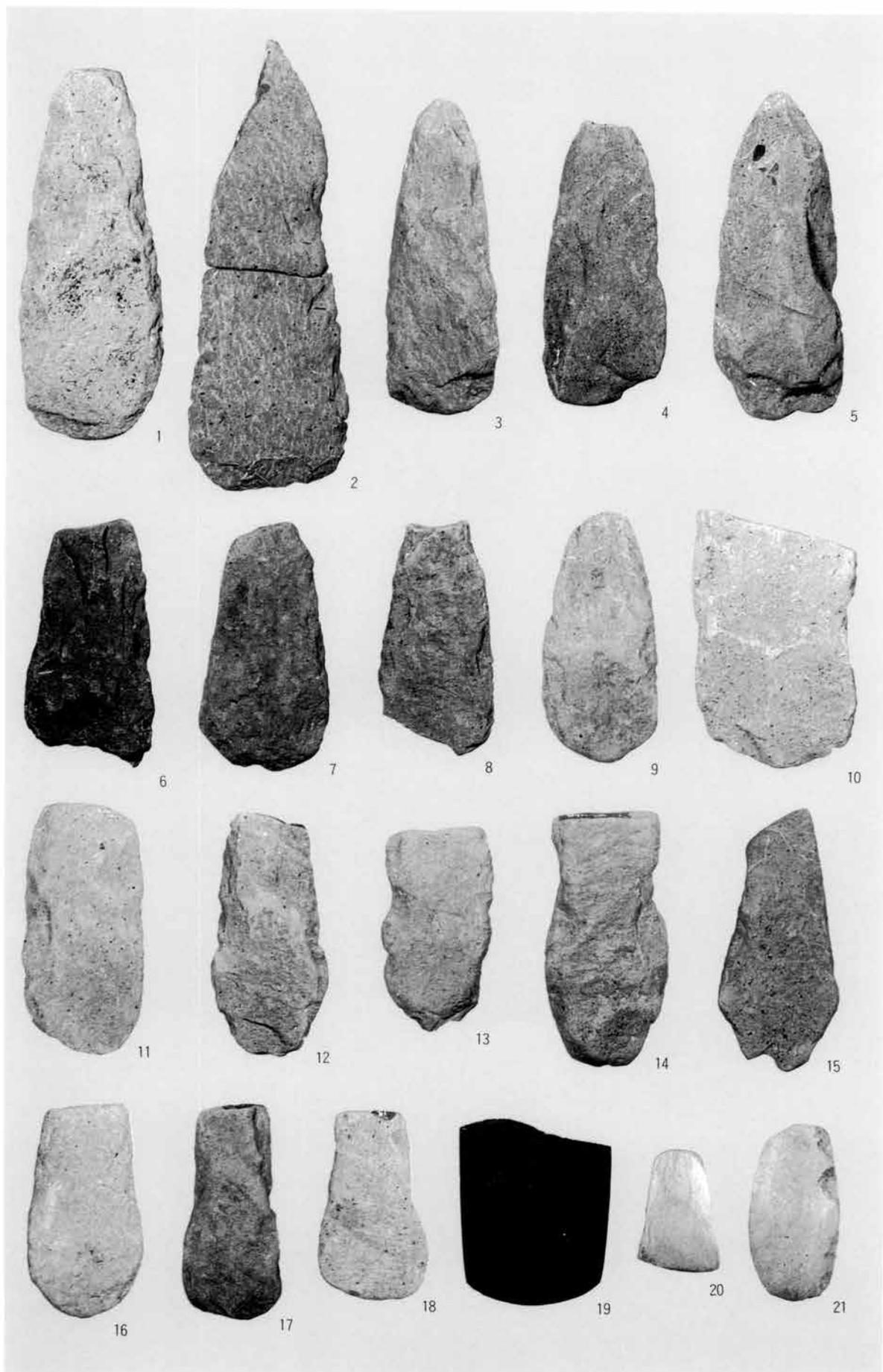
縄文時代の遺物 2



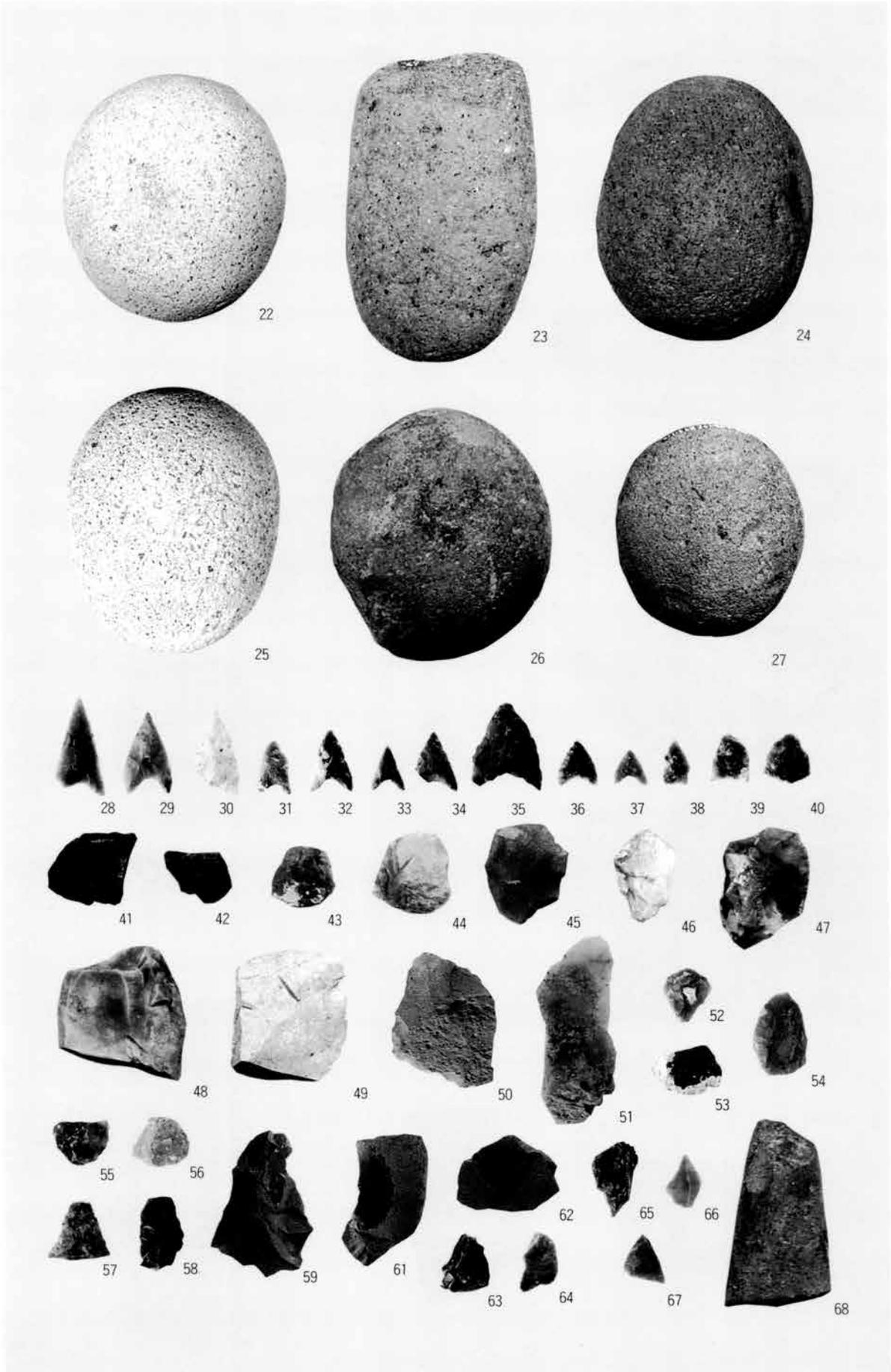
縄文時代の遺物 3



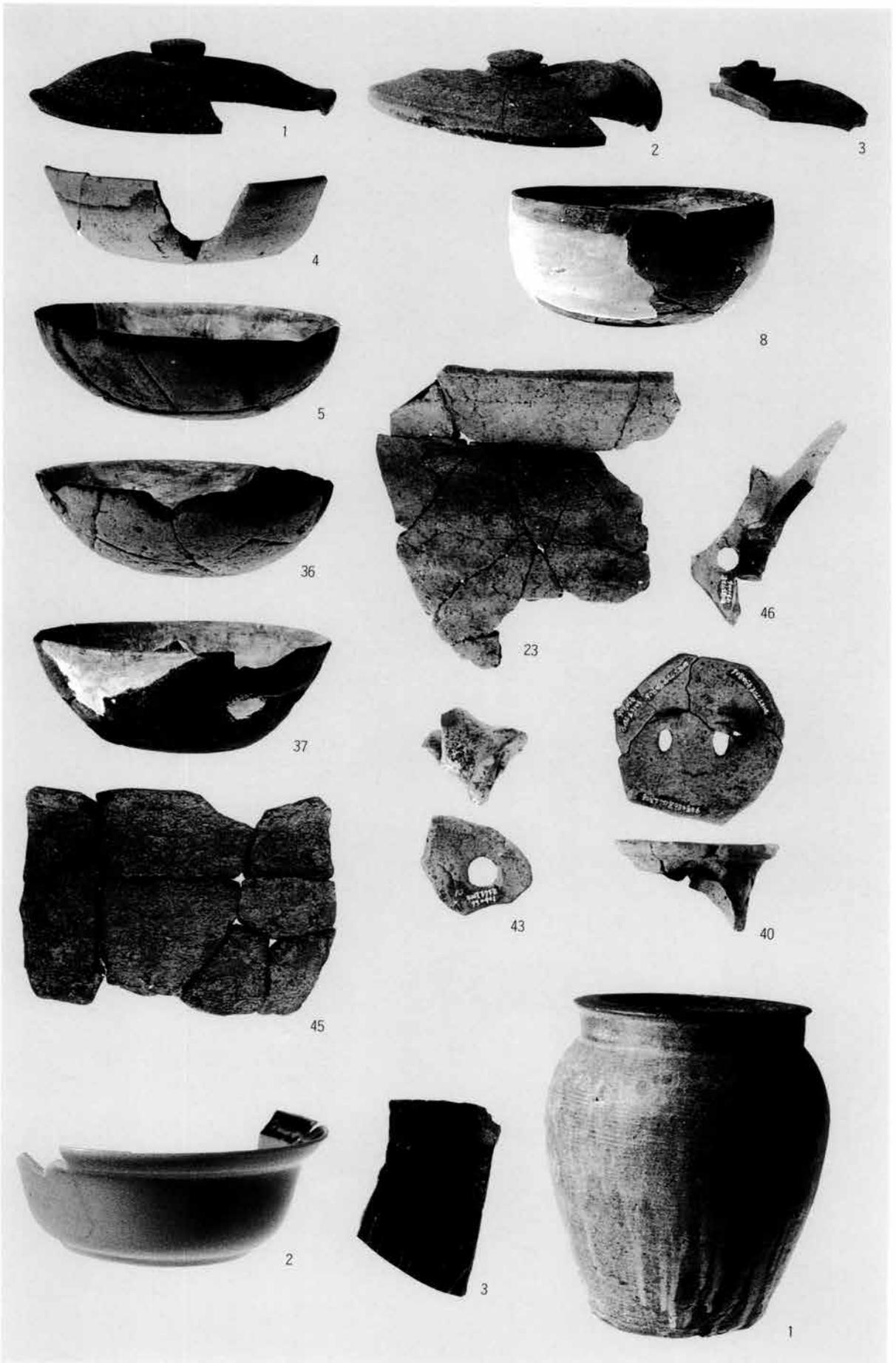
縄文時代の遺物 4



縄文時代の遺物 5



縄文時代の遺物 6



古代、近世の遺物

# 報告書抄録

ふりがな	かんまちわすみしもいせき							
書名	上町和住下遺跡							
副書名	県土幹線軸道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小嶋芳孝、岩瀬由美、宮田 明、山本直人、山口 敏、吉川純子							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921-8044 石川県金沢市米泉町4丁目133番地 電話 (076)-243-7692							
発行年月日	西暦1998年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんまちわすみしもいせき 上町和住下遺跡	かほしごん 鳳至郡 やなぎだわら 柳田村 かんまち 上町	17240	40054	37° 20' 52"	137° 6' 23"	第1次 19930701	3,500	県土幹線軸 道路整備工 事
						第2次 19931220 19940421 19940910		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上町和住下遺跡	集落遺跡	縄文 古代 近世	竪穴住居址 3棟 土坑 70基 ピット 多数 炭窯跡 2基	縄文土器 須恵器 土師器 石器 近世陶磁器				

# 上町和住下遺跡

県土幹線軸道路整備工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成10年3月20日 印刷

平成10年3月27日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町4丁目133番地  
〒921-8044 電話 (076)-243-7692

印刷 北國書籍印刷株式会社

---

©石川県立埋蔵文化財センター 1998